630
(344)
1

630-1
12005015406 03

犬を連れた奥さん

外九篇

アントン・チェーホフ作

神西清譯

春陽堂版

383

世界名作文庫

——344——

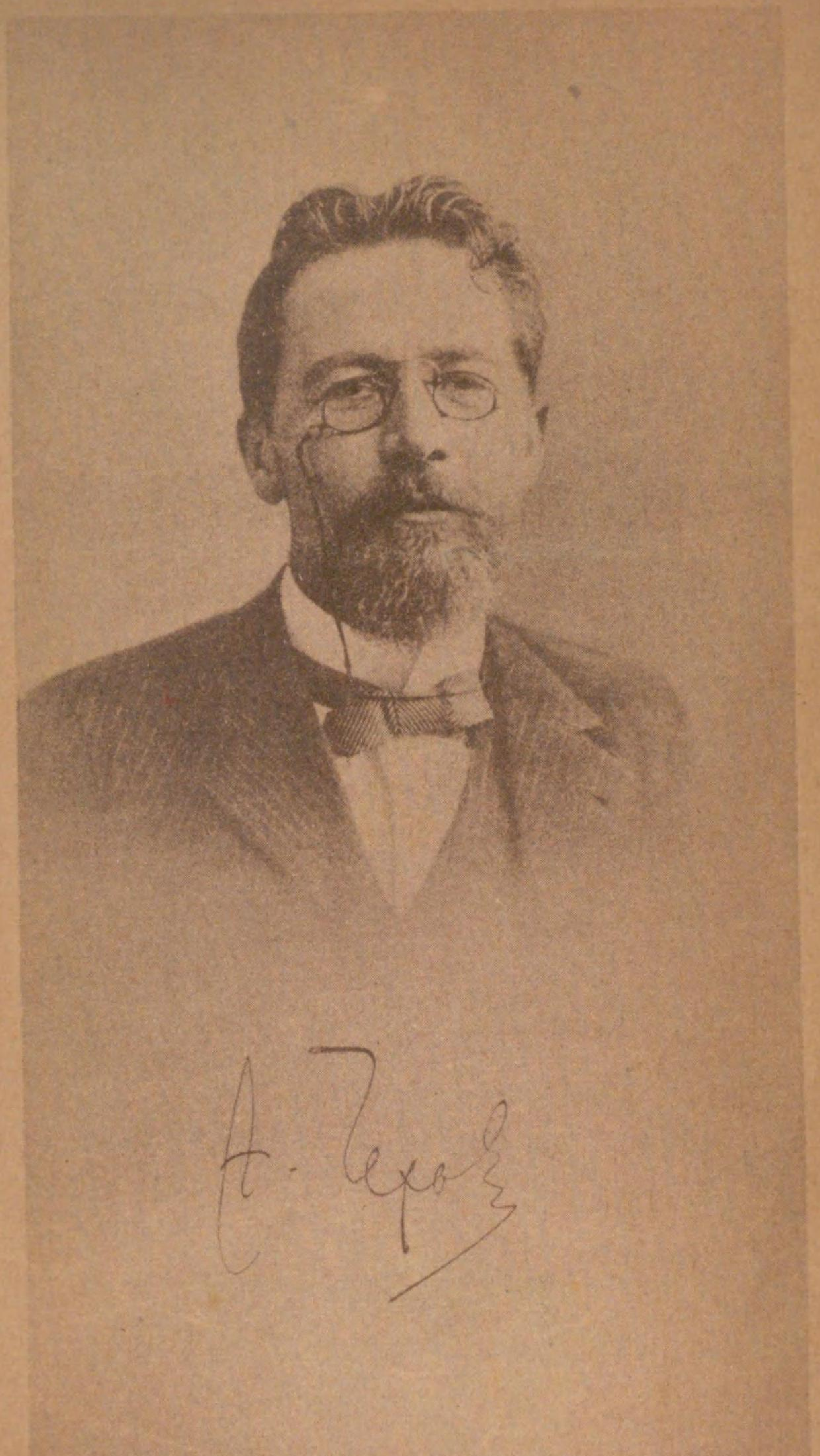
犬を連れた奥さん

外九篇

アントン・チェーホフ
神西　清　譯

春陽堂

犬を連れた奥さん・ほか九篇



――アントン・チェーホフ――

630-1.

犬を連れた奥さん

目次

犬を連れた奥さん……三
ヨヌイッチ……三一
頸の上のアンナ……六三
アリアドナ……八七
嫁資……一二九
小波瀾……一三九
マリ・デル……一五一
天才……一六三
富籤……一七一
大ヴォローヂャと小ヴォローヂャ……一八一
譯者のメモ……二〇三

一

海岸通に新しい顔が現はれたといふ噂であつた、——犬を連れた奥さんが。

ドミートリ・ドミートリッチ・グーロフはヤルタに來てからもう二週間になり、この土地も珍らしくなくなつて來てゐたので、矢張り新しい顔に興味を持ちはじめた。ヴェルネの茶亭に坐つてゐると、海岸通を若い奥さんの歩いて行くのが見えた。亜麻色の髪にベレ帽を被つた中脊の婦人で、後から白毛の房房した犬が駈けて行つた。

その後も、公園や街の芝生で日に何度もその人に出逢つた。彼女はいつも同じベレをかぶり白い犬を連れて、一人きりで散歩してゐた。誰も彼女を知つてゐる者はなく、ただ簡單に、「犬を連れた奥さん」と呼んでゐた。

「あの女が夫も知合ひも連れずに來てゐるのなら」とグーロフは考へた、「ひとつ附合つて見やうか。」

彼はまだ四十にもならないのに十二になる娘があり、二人の息子は中學に通つてゐた。大層早婚だつたので、大學の二年のときに貰つた妻は、今では自分より一倍半も老けて見えた。眉の濃い脊の高い女で、實直でなかなか確りした氣性だつたが、少し氣取り屋でもあつた。自分から世話女房と稱してゐた。讀書が好きで、手紙を書くときにはわざわざ新式の略字を使つたり、夫のことをドミートリとは呼ばずに、ヂミートリと呼ぶのであつた。彼は心中ひそかに妻のことを、愚鈍で偏狹な仕樣のない野暮女だと

恐れをなしてゐたので、從つて家に居つかなかつた。妻にかくれて女を拵らへ出したのはもう大分前からのことで、それも幾度だつたか知れない。多分そのためだつたのであらう、——彼はいつも女の惡口を言つてゐたし、眼の前で女の話が出やうものなら、次のやうに片附けるのであつた。

「低級極まる種族ですよ！」

散々苦い經驗を嘗めさせられたので、今では女を何と呼ばうと自分の勝手だと思つてゐるのだが、その實はこの「低級極まる種族」無しには二日と生きて行けないのであつた。男の仲間には入ると退屈で居心地が惡く、碌々話もせずに冷淡に構へてゐたが、一旦女の仲間には入つたとなると急に身體が樂々として來て、いい話題は浮んで來るしとても調子が好くなつた。女のなかなら默つて居たつて樂しかつた。彼の姿や性格や、謂はばその生れ附きには、何かしら捕捉出來ない魅力があつて女の心を惹きつけるのであつた。彼はそれに氣附いてゐたし、また自分からも何かの力に牽かれて女の方へ誘ひ寄せられた。

一體かうした親密といふものは、始めのうちこそうさ晴しにもなり、ちよつとした戀の冒險ぐらゐに思はれるけれど、まともな人間——とりわけ優柔不斷なモスクワ人にとつては、段々にとても面倒な重荷に變つて來て、とどの詰りは何とも身動きのならぬ狀態に達してしまふものである。そんな事は自分の一再どころでない苦い經驗のお蔭で、彼はとうの昔に知つてゐた。にも關らず、美しい女の人を見る段になると、何時の間にやらこの經驗は心からずり落ちてしまひ、愉しき哉人生！と思つてしまふの

であつた。

　で、或る夕暮、公園で食事をしてゐると、ベレの奥さんが靜かに寄つて來て、彼のすぐ隣の卓子に坐つた。その表情や物腰や、衣裳や髮かたちを一見すると、彼女が相當の家庭の奥さんであり、ヤルタにははじめての滯在で、しかも獨りきりで退屈してゐることが解つた。……

　土地の亂れた風俗についての色々な傳説はみんな嘘だらけで、大概は罪を犯したくてうずうずしてゐる人間共の創作にかかるものであることは、彼も承知してゐたし、從つて輕蔑もしてゐた。だが、いざその奥さんに三歩と隔たつてゐない隣の卓子に坐られて見ると、易々と口說き落した話や、山中のドライヴの話などが思ひ出されて來た。そして忽ち、手輕な氣紛れな關係だの、名も姓も聞かないでゐる未知の女とのロマンスだのと云ふ、誘惑的な空想が彼を俘にしてしまつた。

　彼は優しげに犬に手招きをした。そして寄つて來たところを指を立てて脅かした。犬は唸つた。するとグーロフはまた脅かした。

　奥さんがちらと彼を見た。が、すぐに眼を落してしまつた。

「咬みはしませんのよ」と彼女は言つて、紅くなつた。

「骨をやつてもいいでせうか？」そして彼女がうなづいたのを見て、彼は愛想よく問ひ掛けた、「もうヤルタには大分御逗留ですか？」

「五日ほどですわ。」

「私はもう二週間になりますよ。」

　二人とも暫く默つてゐた。

「ずんずん日が經つて行きますのに、此處は本當に退屈ですのね」と彼女が眼を外らしながら言つた。

「この土地でまあ話すことと言つたら、退屈だ、と云ふことだけですよ。ベリョーフかジードラ邊りの在で、結構退屈もせずに暮してゐる連中までが、此處へやつて來ると「退屈だ！　埃つぽい！」ですからね。まるでグラナダからでも出掛けて來たやうに。」

　彼女は笑ひ出した。それから二人はまるで知らぬ同志のやうに默つて食事を續けた。食事が濟むと並んで出て行つたが、もうその時は、何處へ足が向かうが何の話をしやうが一向に變りはない自由で心の滿ち足りた人達のやる、あの輕い冗談話をしあつてゐた。二人は散歩しながら、海の不思議な明るさのことを話した。水は溫かさうな紫金いろに和んで、その面には月が金色の帶を投げかけてゐた。それからまた、暑い日の暮れたあとの堪らない息苦しさも話題にした。グーロフは自分がモスクワ人であること、言語學の方をやつたが今では銀行に勤めてゐることなどを告げた。それから、昔素人オペラに出るつもりで稽古をやつたが止めにしたこと、モスクワに家作が二軒あることなど。……彼の方では、この婦人がペテルブルグで生ひ立つたこと、S市の人に嫁いだこと、そこで二年も暮したこと、まだ一と月ほどヤルタに逗留するつもりなこと、夫も休養がてら多分あとからやつて來るだらうこと、そんな事を訊き出した。彼女は夫の勤め先が縣廳なのかそれとも地方自治廳なのか、どうしても說明が附かなかつ

た。それを自分でも可笑しがつてゐた。グーロフは、彼女がアンナ・セルゲーヴナといふ名だと云ふことも知つた。

ホテルの部屋に歸つてから、きつと明日も會つて與れるだらうと彼は考へた。さう來なければ嘘だ。寢床には入つてからも色々なことに思ひを馳せた。——彼女がつい此間までは女學生で、いま自分の娘がやつてゐるやうなことを習つてゐたことや、彼女が知らない人と話したり笑つたりする時のまだ角の取れないおづおづした樣子や、だからてつきり彼女は生れて始めてこんな環境——自分の想像も及ばないやうな或る思惑をそれぞれの心に押し匿した人々に後を蹤けられたり、見詰められたり、話掛けられたりする環境に、一人ぼつちで置かれたに相違ないといふことや、さうかと思ふと、彼女の細つそりした頸や、美しい灰色の眼を思ひ浮べたりした。

「それにしても、何處となしに可哀さうな樣子があるな」と彼はふと思ひ、眠りに落ちて行つた。

二

二人が知合ひになつてから一週間經つた。その日は祭日であつた。部屋の中は息苦しかつたが、と言つて街路では旋風が埃を捲き上げ帽子を飛してゐた。一日ぢう咽喉が渇いて堪らなかつた。グーロフは幾度も茶亭へ出掛けて行つて、アンナ・セルゲーヴナにシロップ水だのアイスクリームだのを勸めた。何處にも逃げ場所がなかつた。

夕暮になつて少し風が靜まると、二人は船の着くのを見に波止場へ出掛けた。埠頭には散歩の人達が群をなして、誰か出迎へるらしく花束を抱へてゐた。なかでも、ヤルタ特有の二つの階級の人々が美々しい裝ひで一際眼についた。それは派手作りの老夫人連と、大勢の將軍たちであつた。

海が荒れたため船は遲れて、日が沈んでからやつとは入つて來た。波止場に横附けになるまで大分長いこと搖ら搖らしてゐた。アンナ・セルゲーヴナは柄附眼鏡を出して、知り人を搜すらしく船や船客を眺めてゐたが、やがてグーロフの方を振り向いたとき、その眼はきらきら輝いてゐた。彼女は色々のことを饒舌りはじめた。が、どれも脈絡のない質問ばかりで、自分でも何を訊いたのか直ぐに忘れてしまつた。そして人混みのなかに眼鏡を失くした。

着飾つた群衆が散らばつて行つた。風はすつかり靜まり、もう人の顔は見えなかつた。けれど、グーロフとアンナ・セルゲーヴナとは、まだ船から降りて來る人はないかと思つて立ちつくしてゐた。アンナ・セルゲーヴナはグーロフの方は見ないで、默つて花の匂ひを嗅いでゐた。

「夜になつて、いい天氣になりましたね」と彼が言つた、「さあ、何處へ行きませうか？　ひとつ馬車で出掛けませうか？」

彼女は返事をしなかつた。

すると彼は、凝と女を見詰めてゐたが、いきなり抱き緊めて唇に接吻をした。そして花の雫と匂ひを浴びた。すぐに彼は、誰か見はしなかつたかしらと、四邊をおづおづと見廻した。

「あなたの部屋へ行きませう。……」と、彼は小聲で囁いた。

二人は急ぎ足で立ち去つた。

彼女の部屋は息苦しかつた。彼女が日本人の店で買つて來た香水の匂ひがしてゐた。グーロフは彼女を眺めながら、世の中には實にさまざまな人間が居るものだと考へた。そして、過去の思ひ出から色々な女を引き出した見るのであつた。戀のために快活になつて、ほんの短い間の幸福でもとても嬉しがる、單純で善良な女達。また、例へば自分の妻のやうに、餘計なことばかり饒舌り散らしては、これは愛でも情欲でもない、何か知らもつと大切な事ですよと言はんばかりの勿體ぶつた樣子で、ヒステリックに愛しながらその實はまことの無い女。それからまた、ひどく美しく冷やかで居ながら、時としてその顔の上を、世の中の與へて呉れる幸福よりももつと以上のものを摑み取らうと云ふ執念深い欲情が、さつと閃めく二三人の女。これは、さほど若くもなく氣儘で移り氣で思慮の淺い、また大して聰明でもない種類の女で、グーロフは戀が冷めて來るや否や、その美しさが却つて鼻につき出して來て、下着のレースまでが何となく鱗みたいに思はれるのであつた。

所がこれは、いつまでも初心(うぶ)な若さから來る不器用な感情や、角の取れないおづおづした風で、まるで誰かにいきなり扉をノックされたやうな當惑なのだつた。アンナ・セルゲーヴナ、つまり「犬を連れた奥さん」は、この出來事を何か知ら特別なこと、謂はば墮落でもしたかの樣に大層眞面目に思ひ惱んでゐるらしく、その樣子は妙に場所はづれな感じがした。すつかり沈み込んだ表情になつて、長い髮の毛を顔の兩側に垂らしたまま物倦げに考へを廻らしてゐる姿は、昔の畫にある罪の女そつくりだつた。

「いけませんわ。」と彼女は言つた、「私を尊敬して下さらなかつたのは、あなたが始めてですわ。」

卓子(テーブル)のうへに西瓜があつた。グーロフは一片れ切つて、緩りと喰べはじめた。お互に默つたままで少くも半時間は過ぎた。

アンナ・セルゲーヴナは人の心に觸れて來る女であつた。彼女の身のまはりには、年の行かぬ純眞な女性の氣高い淸らかさが漂つてゐた。卓子の上に燃えてゐる一本の蠟燭の光では、その顔は殆ど照らし出されてゐなかつたけれど、彼女の不機嫌なことだけは解つた。

「どうしてあなたを尊敬しないなんてことがあるものですか」とグーロフは言つた、「あなたは何を言つてるのか、自分でも知らないんですよ。」

「神樣、どうぞお許し下さいまし」彼女の眼は涙で一ぱいになつた、「怖ろしいことですわ。」

「言ひ譯をしやうつて言ふんですね。」

「何で私にそんな事が出來ませう。私はわるい賤しい女です。自分ながら蔑すんでをりますから、今さら言ひ譯なんか致しませんわ。私は夫をだましたのではなくて、自分をだましたのですわ。それも今に始つたことぢやなくつて、ずつと前からのことですわ。私の夫はそりや潔白な立派な男かも知れません。ですが、あの人は從僕なのですわ。夫が何をしてゐるのか、どんな勤めなのか私は存じません。ただ從僕根性なことだけは存じて居ますわ。私がお嫁に行つたのは二十の年でした。私は好奇心が一ぱいで、

何かもつといい事をとばつかり望んでゐましたの。御覽、もつとほかの生活があるわ、と私は獨り言ちました。すると、そんな生活がして見たくてならなくなりました。色々な變つた生活が。……好奇心が私を燃え焦したのですわ。……あなたにはこんな氣持はお解りになりますまいが、本當に私は我慢が出來なくなりましたの。もう自分がどうかなつてしまつて、抑へることなんか駄目なんですの。で、夫には病氣だと言つて、此處へ參りましたの。……そして、まるで氣狂ひみたいに目が眩んでしまつて、やたらに方々歩いてばかり居りましたの。……その擧句は、こんな、みんなに蔑すまれるやくざ女になつてしまひましたわ。」

グーロフは聽いてゐるのが堪らなかつた。この女の思ひがけない場外れな懺悔のいかにも純眞な口調が、彼の氣持を苛ら立たせた。もしその眼に淚が浮んでゐなかつたら、巫山戲てゐるか芝居をしてゐるのだと思つたに相違なかつた。

「私に一體」と彼が靜かに言つた、「どうしろと仰言るんです？」

彼女は顏を彼の胸もとに押しつけて匿した。

「お願ひですから信じて、私を信じて。……」と彼女が言つた、「私は潔白な淸らかな生活がしたいのですわ。惡いことは厭なのですわ。自分でもどうしていいのか解りませんの。よく魔がさしたと申しますのね。私も魔がさしたに違ひありませんわ。」

「澤山です、もう澤山ですよ」と彼は囁いた。

そして彼女の慴えきつてまじろぎもしない眼を凝と見つめて、接吻したり、靜かな調子で宥めたりし始めた。そのうちに段々と彼女も落ち着いて來て、もとの快活さを取り戻した。二人とも笑へるやうになつた。

やがて彼等が外に出たとき、海岸通には人影もなく、町は絲杉の蔭で死に絕えたやうであつた。海だけがまだ潮騷を立てて、岸に打ち寄せてゐた。小舟が一艘、波間に搖れてゐて、その上では小さな燈が明滅した。

彼等は馬車を見附けて、オレアンダへ出掛けて行つた。

「いま、階下の控室であなたの苗字か解りましたよ。黑板に、フォン・ヂーデリッツと書いてありました」とグーロフは言つた、「あなたの御主人は獨逸の方ですか？」

「いいえ、お祖父さんが確か獨逸人でしたわ。けれどあの人は正敎ですの。」

オレアンダに着くと、二人は會堂の傍のベンチに腰を掛けて、海を見下しながら默つてゐた。ヤルタは朝霧にかくれて殆ど見えなかつた。山の巓きに白い雲がかかつて凝と動かない。樹の葉のさやぎもせず、聞えて來るものは朝蟬の啼聲と、足下に打ち寄せる波の單調な鈍い響きばかりであつた。波の音は私達を待つてゐる永遠の安息や夢を語るのであつた。それはまだヤルタもオレアンダも無かつた昔も鳴り、今も鳴り、そして私達の死んだ後でも同じ無關心な鈍い響をつづけるに違ひない。この不斷の響き、私達人間の生き死にには何の關心もない響きのなかに、ひよつとしたら私達の永遠の救ひが、——地上

の生活の絶え間ない營み、絶え間ない完成の道の證しが祕められてゐるのかも知れない。明方の光線のなかで、ひとしほ美しさを增したうら若い女性と並び合つて坐つて、海や山々や横雲や、また果てしもない大空などの夢のやうなたたずまひを眺めてゐると、グーロフは自分の心が鎭まつて恍惚となつて行くのを感じた。そして、人生の最高目的とか、人間の價値とか云ふ問題を忘れ果てたとき、そして自分達が考へたり爲たりすることを除いたとき、この世界のものは皆本當に何と美しいのだらうと思つた。

誰やらが近づいて來た。きつと番人なのであらう。二人の姿を眺めて行つてしまつた。こんな枝葉のことまでが、何かしら神祕的で美しいものに思へるのであつた。フエオドシヤ通ひの汽船のは入つて來るのが見えた。朝燒けに照されて、燈はもう消してゐた。

「草のうへに露が下りてゐますのね」とアンナ・セルゲーヴナが沈默のあとで言つた。

「ああ、もう歸りませう。」

二人は町へ歸つた。

その後も、二人は毎日お晝には海岸通で顏を合せ、晝食も夕食も一緒に攝つて、散歩をしたり海に見惚れたりした。彼女はよく眠れないとか、動悸が激しいとか不平を並べて、しよつ中同じことばかり質問をして、終ひには、彼の尊敬のしかたが足りないと嫉妬や恐怖の餘り言ひ募つたりした。そして街の芝生や公園のなかで、四邊に人影が見えないと、彼はいきなり女を引き寄せて熱い接吻をした。見てゐる人はないかと四邊に氣を配りながらびくびくしてする眞晝の接吻だの、安逸な生活だの、炎暑だの、

海の匂ひだの、絶え間なく眼の前をちらちら行き交ふ着飾つた人々の姿だの、さうしたもののお蔭で彼はすつかり生き返つた樣になつた。彼はアンナ・セルゲーヴナに、彼女がどんなに美しく、どんなに蠱惑に滿ちてゐるかを本氣になつて言ふのであつた。そして熱い思ひに堪へられないで、一歩も彼女の傍を離れなかつた。彼女の方はと言ふと、よく物思ひに沈んで、彼が少しも自分を尊敬も愛しもして與れずに、ただ下らぬ女としか扱つて與れないと言つて訴へるのであつた。毎晩のやうに、夜がやや更けてから、二人はオレアンダや瀑布やへ馬車で出掛けて行つた。かうした遠乘りはいつも二人に、この上ない喜びと滿足を與へた。

彼等は夫の來るのを待つてゐた。けれど手紙が來て、それには眼が惡くなつたから早く歸つて來て與れと書いてあつた。アンナ・セルゲーヴナはそわそわし始めた。

「私が行つてしまふのはいい事ですわ」と彼女は言つた、「さういふ運命ですもの。」

彼女は馬車で發つた。彼も送つて行つた。停車場までは一日がかりであつた。やつと急行列車の中に坐つて、第二のベルが鳴り渡つたとき、彼女は言つた。

「さあ、もう一度だけお顏を見せて。……もう一度だけ。そら、斯うして。」

彼女は泣かなかつた。けれど、まるで病人のやうに憂鬱な樣子で、顏を顫はしてゐた。

「あなたの事は忘れずに何時までも思ひ出しましてよ」と彼女は再び言つた、「どうぞお大事に。私を怨まないでね。もうお目に掛りませんわ。だつて、お逢ひしてはいけませんもの。ぢや、お大事にね。」

汽車は速力を早めて出て行つた。その燈は見る間に消え失せて、一分間ののちには音も聞えなくなつた。それは、甘い睡みや狂氣のやうな生活を、一刻も早く斷ち切つてやらうと申し合せたかの樣であつた。グーロフはプラットフォームに一人取殘されて遠い闇に見入りながら、蟋蟀の啼き聲や電線の唸りを聽いてゐた。すると、まるで今しがた目が覺めたやうな氣持がするのであつた。また一つ戀の冒險が自分の生活にあつたのだ。それも今では終つて、思ひ出だけが殘つて居る。……彼の心は亂れて、悲哀に滿ちて來た。幽かな後悔も疼きはじめた。もう二度と逢ふことのないあの女も、自分と一緒に暮して決して幸福ではなかつたではないか。親切にもしてやつたし、心から愛してもやつた。それにせよ、自分の態度や言葉つきや愛撫のなかには矢張り、二倍も年上の幸福に甘へた男の、到底包み隱せない仄かな嘲笑ひや、粗暴な尊大さが翳るのをどうも仕樣がなかつたのだ。彼女はいつも自分を、善良で、すぐれた立派な男だと言つて呉れた。すると、又しても彼女の眼には本當の自分よりも立ち勝つて見えたのだ。つまりは知らず知らず彼女を瞞してゐたのだ。……

停車場の構内はもう秋の匂ひがしてゐた。うすら寒い夜であつた。

「俺も北へ歸らなければならない」とグーロフはプラットフォームを出ながら考へた、「もう歸る時だ。」

三

モスクワの家はもうすつかり冬らしくなつて、煖爐が焚かれてゐた。朝、子供達が學校の仕度をして

お茶を飲んでゐるときは、まだ眞暗であつた。でも、乳母は早目に燈を消してしまふのだつた。寒さがめつきり加はつた。初雪が降り、はじめて橇に乘る日に、眞白になつた地面や屋根を眺めるのは愉快であつた。呼吸が樂々とつけるやうになつた。そんな季節になると、妙に若い頃のことが思ひ出されて來た。年を經た菩提樹や白樺の霜のために白くなつた姿には、絲杉だの棕櫚の樹々に比べれば心に親しい何となく穩かな表情があつて、その傍に居るともう山や海のことを思ひたくなかつた。

グーロフはモスクワの人間だつた。彼は、或る晴れ渡つた寒さの冴えた日に、モスクワへ歸つて來た。で、毛皮の外套や温い手袋を身に着けてペトロフスカ通を歩いたり、土曜日の晩に鳴る鐘の音を聽いたりするうちに、ついこの間の旅行や、訪れた土地土地の魅力が心から消え失せて行つた。だんだんに彼はモスクワの生活に浸りはじめ、毎日三種類もの新聞をがつがつ讀み耽つては、いや私はモスクワの新聞は讀まぬ主義でして、などと涼しい顏をした。レストランや倶樂部に入り浸りになつたり、晩餐や祝宴に招待されたりするうちに、自分の家に有名な辯護士達とか俳優などの訪れて來るのや、學士倶樂部で教授連と骨牌を鬪はすのが、大いに誇らしく思はれて來た。彼はもう鹽漬料理を一人前きれいに平げることも出來た。……

一と月ほど經つた。すると、アンナ・セルゲーヴナの記憶も狹霧のなかに薄れて行つて、ほかの女達と同じやうに、あの心に滲み入るやうな笑顏を時たま夢に見るだけになつてしまつた。ところが、一と月以上過ぎて、眞冬になると、アンナ・セルゲーヴナと別れたのはつい昨日のことであつたかの樣に、

さまざまな事がはつきり記憶に浮び上つて來た。思ひ出がだんだんに強く燃えはじめた。書齋の宵の靜寂のなかに子供達の豫習をする聲が傳つて來たり、戸外から小唄やレストランで彈くオルガンが聞えて來たり、または煖爐のなかで吹雪が呻いたりすると、たちまち埠頭のこと、山に霧のかかつた朝明けのこと、フエオドシヤ通ひの汽船のこと、接吻のこと、ありとある記憶が甦つて來た。彼は何時までも部屋の中を歩き廻つて、回想しては微笑んでゐた。やがて回想が夢想に變つて行き、そのなかで過去が未來に混りあふのであつた。彼はアンナ・セルゲーヴナを夢にこそ見なかつたものの、彼女は影のやうに何處に居るときにも彼に蹤いて來てゐた。眼をつぶると、きつと彼女の姿がまざまざと現れた。前よりもずつと美しく、艶めかしく、そして若やいだやうに思はれた。彼には自分までが、ヤルタに居たときよりずつと風采が上つた樣な氣がした。彼女は來る夜も來る夜も、書棚から、煖爐から、部屋の隅から、彼を凝と見詰めてゐた。彼は彼女の氣息を聽き、衣裳のやさしくさらさらと鳴るのを聽いた。街に出ると、似てゐる女はないか知らと、女達の姿を眼で追ふのであつた。……

彼は自分の思ひ出を誰かに話したくつて堪らなくなつた。家では自分の戀の話などは出來ないし、家の外にも話相手はなかつた。隣近所の人に話す譯にも行かないし、銀行では尙更であつた。けれど、一體何を話さうと言ふのか知ら。本當にあれは戀だつたのか知ら。本當にあのなかには、何かしら美しい詩的なものとか、さもなければ心の糧になるやうなものがあつたか知ら。ただ、アンナ・セルゲーヴナとの關係の面白さだけのものなのではあるまいか。さう考へられて來たので、彼は餘儀なく戀や女のことを唯ぼんやりと話すことにした。誰一人その裏に氣の附いた人はなかつた。彼の妻が、濃い眉を動かしながら、かう言つただけであつた。——

「デミートリ、二枚目なんか似合はないことよ。」

或る晩更けてから、彼は遊び仲間の役人と一緒に學士倶樂部を出て來るとき、到頭我慢が出來なくなつて言ひ出した。——

「ねえ君、僕はヤルタで素晴しい美人と親交を結んだよ。」

役人は橇に乘つた。暫らく走つてから、彼は突然に振り返つて聲高に言つた。

「ドミートリ・ドミートリッチ！」

「何だね？」

「先刻は君の方が本當だつたよ。やつぱりあの蝶鮫は腐つて居たやうだ。」

こんな當り前の言葉であつたが、グーロフにはそれが堪らなく不愉快だつた。野卑で不潔な言葉に思はれた。何といふ野蠻な習慣だらう。何とまあ堪らない人達なのだらう。そして何といふ愚かしい夜、何といふ面白くもない日々だらう。氣狂ひじみた骨牌遊び、暴食、泥醉、くどくどと同じ事ばかりの話。役にも立たぬ仕事や、くどい長話で大切な時間や精力をすり耗らし、その擧句の果てに殘るものと言つたら、尻尾も羽根も拔けた人生なのだ、譯のわからぬ譫語なのだ。だのに、まるで癲狂院か留置所にでも叩き込まれたやうに、出て行くことも逃げ出すことも出來ないのだ。

グーロフはその夜は一睡もしなかつた。翌る日は一日ぢう頭痛がした。次の夜もよく眠れないで、寢床に腰掛けて考へ込んだり、部屋を隅から隅へと歩き廻つて明かした。子供の顏を見るのも厭であつた。銀行も厭であつた。何處に行きたくもないし、何を話したくもなかつた。

十二月になると、彼は休暇を利用して旅に出ることに決めた。妻には、或る青年の世話をするためにペテルブルグへ行つて來ると言ひ殘して、彼はS市に出掛けた。何をしに行くのか自分にもよく解らなかつた。アンナ・セルゲーヴナに逢つて話をしたい。それも出來ることなら緩りと何處かで會ひたい。

S市に着いた彼は、ホテルの一番上等な部屋を取つた。床には一面に鼠色の軍用羅紗が敷きつめてあり、卓子の上には帽子を高く差し上げ首の缺け落ちた騎馬武者のインキ壺が、埃で眞白になつてゐた。彼は色々のことを門番の男の口から訊き出すことが出來た。フォン・デーデリッツはスタロ・ゴンチャールナヤの自分の持家に住んでゐること、其の街はホテルからさう遠方でないこと、富裕で安樂に暮してゐること、自家用の馬車もあること、この町で誰一人知らぬ人はないこと。……門番はドルイドイリッチと呼んでゐた。

グーロフは緩りとスタロ・ゴンチャールナヤ街へ歩いて行つて、間もなく目指す家を探し當てた。相にく家の前には、灰色に塗つた長い板塀が釘で打ちつけてあつた。

「こんな板塀なんか逃げ出せるさ。」とグーロフは思つた。窓や板塀をぢろぢろ眺めながら。

今日は休日だから、夫は多分在宅なのに違ひない、と彼は思つた。なに構ふものか、ずんずん上り込

んで搔き廻してやれ、とも思つた。手紙を持たせてやればきつと夫の手には入つて、すつかり駄目になるにきまつてゐる。さうだ、偶然に賴るほかはないのだ。そこで彼は、街をぶらぶらしたり、板圍ひについて廻つて見たりしながら機會を待つてゐた。一人の乞食が門をは入つて行つて犬に吠えつかれた。それから一時間ほど經つと、ピヤノの音がかすかに漏れて來た。アンナ・セルゲーヴナなのに相違ない。やがて表玄關の扉が急に開いて、一人のお婆さんが出て來た。その後からはあの白犬が駈けて行く。グーロフは犬を呼ばうとした。すると急に動悸が打つて、胸騷ぎがして、どうしても犬の名が思ひ出せないのであつた。

歩き廻つてゐるうちに、段々と灰色の板塀が憎らしくなつて來た。そして、アンナ・セルゲーヴナはもう自分のことなどは忘れてゐるに違ひないと思つた時には、心があやしく顫へた。きつともう、外の男に夢中なのだ。それも朝から晩までこの呪はれた板圍ひを眺めて暮さなければならない若い女の身になつて見れば、無理もないではないか。彼はホテルに歸つてからも、何にも手には附かずに、何時までも長椅子に坐つてゐた。それから夕食を攝つて、ぐつすりと睡り込んだ。

「何といふ馬鹿げた、氣の落着かないことだらう」眼が覺めて、もう暗くなつた窓を眺めながら彼は思つた。夜になつてゐた。「何のためやら、いい氣持に睡り込んでしまつた。このよる夜中に、どうしやうと言ふのだ。」

まるで病院のみたいな鼠色の安毛布を掛けた寢臺の上に起き上つて、彼は落膽のあまり自分を嘲笑ふ

のであつた。

「そうら、これがお前の「犬を連れた奥さん」なのさ。……これがお前の戀の冒險(アヴァンチュール)なのさ。……まあご緩りなさいまし。」

その朝、停車場で、大きな字で書いたポスタアがいきなり彼の眼に跳びついたのであつた。一行目には「ゲイシヤ」としてあつた。彼はそれを思ひ出したので劇場へ出掛けた。

「あの女はきつと、初日は缺かさずに觀(み)るに違ひない」と彼は思つた。

劇場は大入りであつた。田舍町の劇場の御多分に漏れず、そこもシヤンデリヤの上には霞が棚引き、廊下はがやがや騷がしかつた。幕の明くまで一列目の所には、土地の伊達者達が手を背中に廻して立つてゐた。縣知事の棧敷(さじき)には、一番前に令孃が毛皮の襟卷をして坐つてゐた。知事の方は、垂帷(カーテン)の蔭に小さくなつてゐて手の先だけしか見えなかつた。幕が搖れて、オーケストラが長々と調子を合せはじめた。觀客がぞろぞろは入つて來て席に就いた。グーロフは眼を光らして探してゐた。

やつと、アンナ・セルゲーヴナがは入つて來た。彼女は三列目に坐つた。グーロフは彼女の姿をひと眼見たとき、まるで心臟が緊めつけられるやうな氣がした。自分にとつては、現在この世の中に彼女ほど近しく尊く、そして大切な人間はないのだといふ事が、はつきり了解された。大勢の田舍者のなかに紛れ込んで、下品な柄附眼鏡(ロルネツト)を持つて、ちつとも目立つた所の無いこの小さな女、その女が今では彼の全生活を滿たし、悲しみにつけ歡(よろこ)びにつけ自分の願ひ求めるたつた一つの幸福の姿になつてしまつてゐ

るのだ。稚拙なオーケストラや、やくざな俗惡なヴアイオリンの音色につれて、彼女の可愛らしさが夢のやうに彼の胸に湧き上つて來た。

アンナ・セルゲーヴナと一緒に、小さな頰鬚のあるとても脊の高い猫脊の男がは入つて來て、隣合せに席を取つた。一歩ごとに首を振つて、まるで絕えずぴよこぴよこお辭儀をしてゐるやうな風であつた。これが、あの晩ヤルタで、彼女が昂奮の餘り從僕と綽名をつけた夫なのだらう。本當に、その長い顏や、頰鬚や、少し禿げ上つた額などには、何となく從僕めいたへり下(くだ)つた所があつた。柔(やさ)しい微笑をしよつ中浮べて、ボタンの孔(あな)に學位章か何かをぴかぴかさせてゐるのまで、從僕の番號のやうに見えた。

幕間になると夫は煙草を喫(の)みに出て行つたので、彼女だけ席に殘つた。同じ平土間にゐたグーロフは近寄つて行つた。そして强いて笑顏を作りながら、聲を顫はせて言つた。——

「暫くでした。」

彼女は、彼の顏を見て、さつと蒼ざめた。自分の眼が信じられない風で、もう一ぺん怖る怖る振り仰いだ。扇と眼鏡(ロルネツト)をしつかり握りしめてゐるのは、卒倒しまいと一生懸命になつてゐるに違ひない。二人とも何も言へなかつた。彼女は坐つたままであつたし、彼は彼で、女の只ならぬ樣子にすつかり度を失つて、並んで坐つたものかどうか迷つてゐた。ヴアイオリンとフルートの調子を合せはじめた。すると急に、棧敷ぢうの眼が二人を見詰めてゐるやうな氣がして空恐ろしくなつた。突然彼女は立ち上つて急ぎ足で出口の方へ出て行つた。彼もそれに從つた。そして二人は呆(ほう)けた人間のやうに廊下から階段へ、

階段から廊下へと、昇つたり降りたりした。法官服や教授服や文官服の人々がみんな思ひ思ひの徽章を胸に着けて、二人の眼のまへにちらちらした。婦人連の姿や、帽子掛に吊下つた毛皮の外套が、やはり絶え間なくちらちらして、隙間風が喫ひさしの煙草の咽つぽい臭ひをまともに吹きかけた。グーロフは激しい動悸を感じながら考へた。

「ああ、情ない。あの人達は、あのオーケストラは、一體何事なのだらう。……」

この時不意に、あの晩停車場までアンナ・セルゲーヴナを送つて行つたときのことを思ひ出した。あの時は、これでお終ひだ、もう永遠に逢ふことはあるまいと思つた。それが、お終ひまではまだ何と遠いことだらう！

「雛壇御入口」と札の出てゐる狹い暗い階段の中途で、彼女はやつと立ち停つた。

「本當に喫驚りしましたわ」と彼女は息を切らせて言つた。その顔の色はますます蒼ざめて呆けたやうになつてゐた。「ああ、本當に喫驚りしましたわ。生きた氣持もしないのよ。何故あなたはいらしつたの？何故？」

「ですが、アンナ、察して下さい、察して下さい。……」彼は小聲で早口に言つた、「お願ひですから察して下さい。」

彼女は男の顔を見詰めた。怖れと、哀訴と、愛情を籠めて、凝と見詰めてゐた。彼の面影をしつかりと心に留めやうとして。

「私とても苦しかつたの」と女は彼の言葉には耳を假さずに續けた。「しよつ中あなたの事ばかり思ひ詰めてゐたの。あなたの事で胸が一ぱいでしたわ。どうかして忘れやう、忘れてしまはうと思つてゐるのに、何故あなたはいらしつたの？」

階段の上には中學生が二人、煙草をふかしながら下を見下してゐた。けれどそれには構はず、グーロフはアンナ・セルゲーヴナを引き寄せて、その額や頬や手に接吻しはじめた。

「何をなさるの、何をなさるの、」彼女は慴えて身を退さりながら言つた、「私達、二人とも氣が狂つたんですわ。今日ここから發つて頂戴。いいえ今すぐ發つて頂戴。……お願ひしますわ、手を合せてお願ひしますわ。……誰か來てよ。」

誰か下から昇つて來る跫音がした。

「どうしても歸つて頂戴ね」とアンナ・セルゲーヴナは氣急しげに囁いた、「ね、かうしませう、ドミートリ・ドミートリッチ。私が逢ひにモスクワへ參りますわ。今はこれでお別れにしませう。私の大事な、可愛いひと、お別れにしませう。」

彼女は男の手を强く握り緊めて、すばやく身を翻して降りて行つた。彼の方を何べんも振返りながら。その眼を見ると彼女が心から不幸なことが解つた。グーロフは暫くその跫音に耳を澄して立つてゐたが、やがて聞えなくなると、自分の帽子掛を探し出して劇場を後にした。

四

さうしてアンナ・セルゲーヴナはモスクワに逢ひに出掛けて來ることになつた。二た月か三月に一度、彼女はS市から出て來た。夫には大學の婦人科の先生に相談に行くと言つて。——夫は半信半疑だつたが、それでも何も言はなかつた。モスクワに着くと彼女は「スラヴイヤンスキー・バザール」に宿を取つて、すぐにグーロフの所へ赤帽子の使を走らせた。グーロフは待ち兼ねたやうに直ぐ逢ひに來た。モスクワぢうで誰もそれに氣附いたものはなかつた。

或る冬の朝、彼はこんな具合に彼女に逢ひに行つた。——(前の晩に使が來たのだつたが留守にしてゐた。)學校まで送つてやるつもりで娘を一緒に連れてゐた。その途中、濕氣の多い雪が大きな塊になつて降りしきつた。

「今朝は三度で温いのに、それでも雪が降るね」とグーロフは娘に言つた、「けれど温かないのは地面の上だけなのだよ。空氣の上の層では温度がすつかり異ふのだ。」

「パパ、なぜ冬は雷樣が鳴らないの?」

それも説明してやつた。彼は饒舌りながら全く別のことを考へてゐた。いま自分は逢曳に行く所だ。そして誰一人それを知つてゐるものはない。多分いつになつても知れずにゐるだらう。彼には生活が二

つあつた。一つは公然の生活で、これは知らうと思ふほどの人なら皆知つてゐる筈の、あの暫定的な眞實とそして虚僞とで一杯な、知人や友達のと似たり寄つたりの生活であつた。もう一つは、祕密のうちに流れて行く生活だ。そして、これはどうも何かしら奇妙な廻り合せか偶然のなす業なのであらうが、彼にとつて大切で興味のある不可缺のこと、彼が誠實で自己をあざむかずに濟むいはば自分の生活の核心とも言ふべきものは、却つて祕密にせねばならず、彼が己れを匿し眞實を隱す假着の役目をする虚僞——例へば銀行の勤務だの、倶樂部の爭論だの、「低級極まる種族」といふ警句だの、夫人同伴で祝宴に招かれて行くことなどの方は公然なのであつた。また彼は己れを以て他人を測つて、彼らのうはべを信じなかつた。誰にでも、夜の闇に蔽はれるやうに祕密にかくされて、彼等の本當の、最も興味のある生活が流れてゐるに相違ないと考へてゐた。人々は皆それぞれの私生活を祕密にしてゐるものだ。敎養のある人達が、私行上の祕密を尊重しろと言つて血眼になるのは、一つには多分これに依るのだらう。……

娘を學校に送り屆けて置いて、グーロフは「スラヴイヤンスキー・バザール」へ行つた。階下で外套を脱ぎ、階段を上つてそつと扉をノックした。アンナ・セルゲーヴナは、彼の大好きな灰色の衣裳を着て、旅の疲れと待ち遠しさとで窶れを見せながら、前の晩から待ち續けてゐた。蒼ざめた顏をして彼を見たまま、微笑みも出來ないでゐた。けれど、彼が部屋には入つてしまふと、いきなりその胸に顏を埋めた。まる二年逢はなかつたのであつた。接吻が長く長くつづいた。

「どうして居たの?」と彼が訊いた「別に變りはないの?」

「待つて、いますぐ話しますわ。……とても話せないわ。」

涙がこみ上げて來て話すことが出來なかつた。彼女はハンカチを眼に押し當てて、顏をそむけた。

「まあ、泣くだけ泣くがいい。坐つて待つてゐやう。」と彼は考へて、椅子に腰を下した。

やがて彼はベルを押して、紅茶を持つて來させた。彼がお茶を飮んでゐるあひだ、彼女は窓の方を向いて立つてゐた。……彼女は自分たちの生活の傷ましさ、悲しさに泣いたのであつた。二人は人の眼を忍んで、こつそりとしか逢へないのだ。まるで盜人のやうに！ 二人の生活はもう粉々に摧けてしまつてゐるのではないだらうか。

「さ、もうお止めなさい」と彼は言つた。

二人の戀がまだなかなかお終ひにならないだらう事は、彼にはよく解つてゐた。いつ終るなどといふ見當も附かなかつた。アンナ・セルゲーヴナはぐんぐん彼に牽き寄せられて來た。彼を尊敬してゐた。そんな彼女に、二人の戀は何時の日かは終らなければならないなどと告げるのは、無殘でとても出來なかつた。彼女はそれを聞いても決して本當にはしないだらう。

彼女に近寄つて行つて、愛撫したり冗談を言つてやらうと思つて、彼はその肩に手をかけた。その時彼は、不圖鏡の中の自分の姿を見た。

彼の頭髮はもう白くなりかけてゐた。この一二三年のうちに、自分ながら不思議なほど老けて醜くなつてゐた。彼の手をかけてゐる肩は溫かく、そしてかすかに顫へてゐた。この生命はまだ溫かくて美しい。

けれど、これも矢張り間もなく彼のと同じに枯れ凋みはじめるだらう。さう思ふと可哀想でならなかつた。何故この女は、自分をこれ程までに愛して與れるのだらう？ 彼はいつも女達には買ひ被られてゐた。女達は本當の彼を愛したのではなくて、生涯探ね求めて來た別の男の姿を想像の力で創り上げて、それを愛したのであつた。やがて彼女等が自分の思違ひに氣が附いたあとでも、やつぱり愛し續けて與れた。そして彼と一緒に居て幸福だつた女は一人もないのであつた。時の流れにつれて、彼は知り、會ひ、そして別れた。一度でも本心から戀をしたことはなかつた。何でも望みのままになつた。けれどただ、それは戀ではなかつた。

やつと今になつて、頭が白くなりはじめる今になつて、彼は戀を知つたのだ。生れてはじめての、本當の戀を。

アンナ・セルゲーヴナと彼は、お互に隔てのない親友として、夫として妻として、優しい友達として愛しあつてゐた。彼等には二人が互に運命によつて豫定されてゐた者に思へた。何故彼が妻帶をし、彼女が嫁に行つてゐるのか解らなかつた。それはまるで、一番ひの渡り鳥を捕へて雄と雌と別々の籠に養つて置くやうなものであつた。二人は過去の恥しいことをすつかり宥しあひ、總てを心の底から許しあひ、二人の愛がお互を生れ變らせたのだと信じた。

以前には、悲しい時は頭に浮び上つて來るままの色々な當て推量で自分の心を慰めてゐたものであつた。けれど今ではもう、そんな當て推量どころではなかつた。彼は深い哀憐の心を感じ、どうかして誠

實で優しくありたいと念じた。

「さあ、もうお止めなさい」と彼は言つた、「氣の濟むまで泣いたでせう？　もう澤山。……今度は話をしませう。そして、何か考へ出して見ませう。」

長い間、二人は相談してゐた。人の眼をかくれたり、嘘をついたり、別々の町に住んでたまにしか逢へない、この今の境遇を脱れることを話し合つた。この堪へられぬ枷から、どうしたら自由になれるだらうか。

「どうしたら？　どうしたら？」と彼は頭をおさへて言つた、「どうしたら？」

すると、もう少しの辛抱で解決の途が見出されるだらうと思はれて來た。その時こそは、新らしい、素晴しい人生がはじまるのだ。旅の終りまではまだ遙かに遠いこと、そして一ばん複雑な、一ばん困難な途が、今やつと始まつたばかりなことを、二人ははつきりと感じ合つた。

ヨヌイッチ

一

縣廳のあるS市にやつて來た人が、どうも退屈だとか單調だとか言つて澪すと、土地の人達はまるで言譯でもするやうな調子で、いやいやSはとても立派な町だ、圖書館も劇場も倶樂部もみんな揃つてゐるし、舞踏會も催されるし、それにもしお望みとあれば、智的で和氣藹々たる家庭とも交際が出來ると言ひ返すのであつた。そして最も教養ある聰明な家庭の見本として、トゥルキン家の名を擧げるのであつた。

この家族は大通りの知事官邸の近くに邸宅を構へてゐた。主人のイヴン・ペトローヴイチ・トゥルキンは美しい栗色の髪と頬鬚をもつた肥滿した男で、慈善の目的でよく素人芝居などを催した。すると自分では老將軍の役を買つて出るのであつたが、その咳嗽のし振りがとても滑稽であつた。一口噺や謎々や諺などを、殆ど無盡藏なほど知つてゐるし、冗談や洒落の大家で、いつも腑に落ち兼ねると云つた風な、眞面目では饒舌れぬと云つた風な、おどけた顔をしてゐた。その妻のヴェーラ・ヨシーフオヴナは鼻眼鏡をかけた瘠せぎすの愛嬌のある奥さんで、自分で小説などを書いてはそれをお客様に朗讀して聞かせるのを得意とした。それから娘のエカテリーナ・イヴーノヴナは妙齡の令孃で、ピヤノを彈奏した。一口に言へば、この家族の人達はみなそれぞれに才能を有つてゐたのである。トゥルキン一家はお客を大いに歡迎して、快活なさつぱりとした樣子で、自分たちの才能を公開するのであつた。その石造りの邸

は廣々としてゐるので夏は涼しく、窓の半分ほどは樹木の欝蒼と生ひ茂つた古い庭に面してゐた。春になればその庭で小夜鶯が歌をうたつた。お客が坐つてゐると厨の方からは庖丁の響が聞え、玉葱を揚げる臭ひが中庭までただよつて來た。——それはいつも、豐富で美味な晩餐の前觸れであつた。

で、醫師のドミートリ・ヨヌイッチ・スタルツェフが地方醫を拜命して、Sから二里半ほどのヂャリージに居を定めるや否や、もう周圍の人々は彼に、知識階級の一人として是非ともトゥルキン家と交際を結ばなければ、と勸めるのであつた。ある冬の日に、彼は往來でイヴン・ペトローヴイチに紹介された。天氣のことや、芝居のことや、コレラのことや、先づそんな話をした上で矢張りお招きを受けた。やがて春になつて、丁度昇天節の日に、スタルツェフは一通り診察を濟ましてから遊びがてら町へ買物に出掛けた。まだ自分の馬車がなかつたので、彼はぶらぶら歩いて行つた。こんな歌をうたひながら、——

にがい泪を、知らない頃は……

町で夕食をしてから、彼は公園を散歩した。するとひとりでに、イヴン・ペトローヴイチの招待のことが思ひ出された。で、ひとつトゥルキン家を訪問して、どんな連中なのか見てやらうと思ひ定めた。

「今日は、どうぞ」とイヴン・ペトローヴイチが上り口に出迎へて言つた、「本當にようこそお出掛けでした。こちらへ、どうぞ。ひとつ荊妻にお引合せしませう。」

彼は醫師を自分の妻に紹介しながら、饒舌りつづけた。――

「ねえ、ヴェーロチカ、私はこの方にかう申上げて居るんだよ、――自分の病院に引つ籠つてゐる如何なる羅馬法權なんぞあるものでないとね。宜しく閑暇を以て社稷に報ずべきだつてね。ねえ、さうぢやないか、お前。」

「どうぞお掛け遊ばして」とヴェーラ・ヨシーフォヴナがお客を自分の身近に坐らせながら言つた、「あなたは私にお心を寄せて下さいますわね。宅は燒餅屋さんのオセロなんですのよ。ですけれど、私たち見附からないやうに、こつそり致しませうね。」

「この甘つたれの雛つ子めが！……」と、イヷン・ペトローヴイチは優しく呟きながら、妻の額際に接吻した。それからまたお客の方へ向いて、「あなたは實によい時にいらしつたものです。丁度これが大長篇を書き上げましてね、今日はその朗讀の日なのですよ。」

「ジヤン」とヴェーラ・ヨシーフォヴナは夫に佛蘭西語で言つた、「お茶をさう言つて下さいましな。」

スタルツェフは、エカテリーナ・イヷーノヴナにも引合はされた。大層お母さん似の、瘠せぎすな愛嬌のある十八のお孃さんであつた。顏附きはまだ子供子供してゐたが、さすがに細つそりした腰のあたりに風情が漂ひ、娘らしい胸は美しく健康さうな發達を見せて樂しい春を物語つてゐた。みんなでお茶を飲んだ。ジヤムだの蜂蜜だの乾菓子だの、それから舌の上に載せると溶けるやうなとてもお美味しい餅菓子などが出た。夕暮になると段々にお客が集つて來た。イヷン・ペトローヴイチはその一人一人に、

例のおどけた眼附きをして言つた。

「今日は、どうぞ。」

やがて一同は頗る眞面目な顏附きをして客間に坐り、ヴェーラ・ヨシーフォヴナが朗讀を始めた。書き出しはかうであつた。――「寒さは嚴しくなりまさり、……」窓が開けひろげてあつたので、厨からは庖丁の響きが聞え、玉葱を揚げる臭ひが漂つて來た。……ふかふかしたソファに腰かけてゐるのはとても氣持がよかつた。やがて客間の薄暗のなかに燈が愛想よく瞬きはじめた。そして今、街路からは人聲や笑ひのさざめきが聞えて來、中庭からは紫丁香花の匂つて來るこの夏の夜に、寒さが嚴しくなりまさり、沈み行く太陽の冷たい光が、ただ一人淋しく雪の荒野の道を行く旅人の姿を照してゐる有樣を理解するのは、甚だ困難なことであつた。ヴェーラ・ヨシーフォヴナは朗讀を續けて行つた。年若い端麗な伯爵夫人が田舍の領地に學校を建て、病院や圖書館を設立する。やがて彼女は旅の畫家と戀に落ちる。――そして、さまざまな繪そらごとを朗々と讀み上げて行く。けれど、それを聽いてゐると樂しい氣持になれた。素晴しい平和な考へが心に浮んで來た。とても立ち上る氣にはなれなかつた。

「拙ではないやうですね……」と、イヷン・ペトローヴイチが小聲で言つた。

すると、魂を何處やら遠い遠い所に飛ばしてゐた一人の客が、聞えるか聞えないかの聲で答へた。――

「いや、御尤もです。……」

一時間たち、二時間たつた。近所の公園ではオーケストラや合唱が始まつた。ヴェーラ・ヨシーフォ

ヴナが帳面を閉ぢたあとでも、ものの五分ほど一同は默り込んで、唱歌隊の歌つてゐる「木屑」の歌に耳を傾けてゐた。この歌は、今の小説には出て來なかつたけれど、人生には存在することを傳へて來るのであつた。

「御作は雜誌などに御發表でせうか？」とスタルツエフはヴエーラ・ヨシーフオヴナに訊いた。

「いいえ」と彼女は答へた、「どちらへも發表は致しませんの。書いては戸棚に藏つて置きますの。發表なんぞ致さなくても、御飯は戴いて參れますもの。」といふ説明であつた。

すると何故かみんなが溜息をついた。

「さあ今度は猫ちやんの番だ。何か彈いて御覽。」とイヷン・ペトローヴイチは娘に言つた。

グランド・ピヤノの蓋を上げて、豫て用意の譜本が開かれた。エカテリーナ・イヷーノヴナはピヤノの前に坐つて、兩手でキイを叩いた。それから又すぐに、もう一度力まかせに叩いた。もう一ぺん、また一ぺん。彼女の肩も胸もびりびりと打顫へた。けれど彼女は執念深く一個所ばかりを叩き續けた。ピヤノの中にキイを叩き込んでしまふまでは、どうしても止めない心算と見えた。客間は雷鳴で一ぱいになつた。床も天井も家具も、一齊にどよめき渡つた。……やがてエカテリーナ・イヷーノヴナは難しい一節に取掛つた。長たらしく單調で、つまりその困難さの故に面白い一節なのである。スタルツエフは耳を傾けながら、高い崖の上から石が轉がり落ちて來る有樣を思ひ描いた。ごろごろと雨霰のやうに落ちて來る。彼は、一刻も早くやんで吳れればいいと念じた。しかしそれと同時に、額に垂れかかる髮を拂ひもせず、緊張しきつて薔薇色になつたエカテリーナ・イヷーノヴナの、强さうな潑剌とした姿が大いに氣に入つた。一と冬をヂヤリージで病人と百姓の中に埋れて暮したあとで、この客間に坐つて、この若い優美なそれに恐らくは淸淨なのに異ひない生き物を眺め、喧ましくて退屈な、けれど勿論敎養のある物音を聽いてゐるのは、とても愉しい新鮮な氣持であつた。……

「よおし、猫ちやんや、今日は何時にない上出來だつたよ」と、娘が彈奏を終へて起ち上つたとき、イヷン・ペトローヴイチは兩眼に淚を浮べながら言つた、「死ね、デニース、これ程のものはまたと書けまいぞよ！」

一同は彼女を取り圍んで、近來こんな音樂は聽いたことがないと、口々に賞めそやした。彼女は微かに笑みを浮べながら默つてその褒め言葉を聽いてゐた。その顏には一ぱいに、勝利と書いてあつた。

「素敵でしたよ、全く素晴しい。」

「素敵ですな」とスタルツエフも大勢に順應した。それから彼はエカテリーナ・イヷーノヴナに訊いた、「どちらでお稽古なさいました？　音樂學校でしたか？」

「いいえ、音樂學校にはこれからは入らうと思ひますの。今はマダム・ザヷローフスカヤに附いて居りますわ。」

「こちらの女學校を御卒業ですか？」

「まあ、飛んでもない！」とヴエーラ・ヨシーフオヴナが引き取つて答へた、「先生がたを宅までお招き

致したのですわ。女學校にしましても專門學校にしましても、どうも餘り面白くない影響を受けますやうで御座いますものね。――娘の育ちます間は矢張り母親の影響だけを受けるやうに致さなければいけませんわ。」

「だつて私、音樂學校には行きますわよ」とエカテリーナ・イヴーノヴナが言つた。

「いいえ、いけません。猫ちやんはママが大好きでせう。猫ちやんはパパやママを困らせはしないことね。」

「厭、厭ですわ。私行きますわ。どうしても行きますわ。」とエカテリーナ・イヴーノヴナは甘へて强情を張つた。そして足をばたばたさせた。

晩餐になると、今度はイヴン・ペトローヴイチが才能を發揮する番であつた。彼は片々の眼で笑ひながら、一口噺をやつたり洒落を飛ばしたり、滑稽問答を出して自分で解いて見せたりした。彼は自分の頓才に長年の修練を積んで作り上げた一種獨特の奇妙な言葉を使つた。打ち見るところ、それは既に習慣になりきつてゐるらしかつた。彼は「大々的な」とか「拙でない」とか「千萬御禮を」とか言ふのであつた。……

まだそれだけではなかつた。滿腹して心の滿ち足りたお客たちが、玄關に集つて外套やステッキを探してゐると、丸々した頰のパヴルーシヤ（この家ではパーヴアと呼んでゐた）といふ十四の五分刈頭の從僕が、皆の世話を燒いて廻つた。

「おい、パーヴア、ひとつ瀆つてお眼にかけろ。」とイヴン・ペトローヴイチが言つた。

パーヴアは見得を切つた。片手を高くさし上げ、悲劇調で叫んだ。

「ても不運な女、死ぬがよい！」

すると一同くすくすと笑ひ出した。

「大したものだ」とスタルツエフは往來に出て考へた。

レストランに寄つて麥酒を飮み、それからヂヤリージへ步いて歸つた。途々こんな歌をうたひ續けて。――

うれし物倦し、そなたの聲も……

二里半の道を步いてから寢床には入つた。少しも草疲れたやうな氣はしなかつた。それ所か、まだ五六里は步いてもいいと思つた。

「拙ではない……」と彼は、眠りに落ちながら思ひ出し、そして微笑んだ。

二

スタルツエフはトウルキン家へ行きたくてならなかつたけれど、病院の仕事が忙しくてどうしても拔

け出せなかつた。勞働と孤獨のうちに一年以上も流れた。すると突然に町から、青い封筒の手紙が届いた。……

ヴエーラ・ヨシ・フオヴナは久しい以前から偏頭痛に惱んでゐた。此頃では毎日のやうに猫ちやんが音樂學校へ行くと言つて脅かすので、發作が益々頻繁になつて來た。町の醫者たちが入れ替り立ち替り呼び附けられた末に、到頭地方醫の番になつたのであつた。ヴエーラ・ヨシーフオヴナはとても哀れつぽい調子で、どうぞこの苦しみを助けると思召して、いらしつて下さいと書いてゐた。スタルツエフは出掛けて行つたが、それからと云ふものはトウルキン家の定連になつてしまつた。……彼は實のところ、少しはヴエーラ・ヨシーフオヴナの助けになつたに相違なかつた。彼女は彼のことを、驚嘆すべき名先生だと言つてお客仲間に吹聽した。けれど、本當を言へば、彼がトウルキン家へ出掛けるのは、もう偏頭痛のためではなかつた。……

或る休日のこと、エカテリーナ・イヴーノヴナが例の長い惱ましいピヤノのお稽古を濟ませた後で、みんなは食堂に坐り込んでお茶を飲んでゐた。イヴン・ペトローヴイチは相變らず皆を笑はせてゐた。するとその時ベルが鳴つた。お客様だ。彼は出迎へに玄關へ立つて行つた。スタルツエフは、この混雜に乘じて、ひどくどぎまぎした調子で、そつとエカテリーナ・イヴーノヴナに囁いた。

「お願ひです。私を苦しめないで下さい。お庭へ行きませう。」

彼女は何のことだか解らないので、ちよつと肩を搖すつたが、それでも起ち上つて庭へ出て行つた。

「あなたは毎日三時間も四時間もピヤノのお稽古をなさるのです」と彼女の後からついて行きながら彼が言つた、「それが濟むとママと一緒に坐つていらつしやる。それぢやお話することも出來ません。十五分で結構ですから、私の話を聽いて下さい。」

もう秋が近く、古い庭は靜寂に滿ちて、黑ずんだ落葉が小徑に横はつてゐた。黄昏れるのも早かつた。

「もう一週間もお目に掛りませんでしたね」とスタルツエフが續けた、「私は本當に惱んでゐるんですよ。ここに掛けませう。そして私の言ふことを聽いて下さい。」

紅葉の老木が枝を擴げてゐる下にベンチが置いてあつて、其處は庭のなかでも心地のよい場所であつた。二人はベンチに掛けた。

「で、何のお話でせう?」とエカテリーナ・イヴーノヴナは愛想のない事務的な口調で訊いた。

「一週間もお目に掛りませんでした。あなたのお聲を聞くのも久し振りです。私はあなたのお聲が聞きたくつて堪らないのですよ。もつと何か話して下さい。」

彼女の新鮮であどけない眸や頰を見てゐると、彼は恍惚りとして來た。簡素な飾り氣のない衣裳がよく似合つて、それまでが何となく非常に優美で、心に觸れて來るやうな氣がした。しかも、そんな無邪氣な樣子でゐながら、頭の方は年に似合はず隨分に聰明で進んでゐるやうであつた。彼女とならば文學の話や美術の話や、色々な話をすることが出來た。自分の生活や人々のことを訴へることも出來た。尤も彼女は、眞面目な話の最中にいきなり笑ひ出して、家へ駈け込んでしまふこともあつた。

彼女は殆どすべてのS市の娘たちと同じく、非常に讀書家であつた（一體S市の人間は殆ど讀書をしなかつた。娘達とユダヤの青年が居なかつたら、圖書館は閉鎖してもいいと迄言はれてゐた。）これも大いにスタルツエフの氣に入つた。彼は會ふたびに、此頃何を讀みましたかと訊ねるのであつた。そして彼女がその話をしはじめると、うつとりして聽き惚れてゐた。

「お會ひしなかつたこの一週間に、あなたは何をお讀みでした？」と彼は訊いた、「ね、話して下さい。」

「ピーセムスキーを讀みましたわ。」

「で、何を？」

「『千人』ですわ。」と猫ちやんは答へた。

「ピーセムスキーつて言ふ人は隨分可笑しい名だつたのね。アレクセイ・フエオフイラアクトイチですつて！」

「あなたは、何處へいらつしやるのです？」彼女がいきなり立ち上つて家の方へ行きかけたので、彼は喫驚りして叫んだ、「是非、聽いて頂きたいことがあるのです。……たつた五分間でいいから此處に居て下さい。お願ひです。」

彼女は立ちどまつた。そして何か言ひたげな風をしたが、そのまま默つて不器用な手つきで一葉の紙片を彼の掌に押しつけると、家の中に駈け込んでしまつた。そしてまたもやグランド・ピヤノに向つた。

「今夜十一時に、墓地の」とスタルツエフは讀んだ、「デメッチの石碑の傍にいらつしやい。」

「さて、これは餘り利口だとは言へまい」と彼は自分に歸つてから考へた、「おまけに墓地とは！ 何故だらう。」

これはどうしても猫ちやんが馬鹿にしてゐるのに相違なかつた。逢曳の場所なら、どこか街の中でも公園でもよささうなものを、所もあらうにずつと町外れの、しかも夜更けの墓地を選ぶなどは、どうしても眞面目とは受け取れなかつた。溜息をついたり、手紙を貰つたり、墓地をうろついたり、今時では中學生でさへ笑ひ出すやうな馬鹿げた眞似をするのが、苟もちやんとした紳士であり、賢明な地方醫である彼に相應しいことであらうか。このロマンスは一體何處へ行くつもりなのか。友達があとで知つたら何と言ふだらう。……スタルツエフは倶樂部の卓子のまはりをぐるぐる廻りながら、さう考へた。けれど、十時半になるといきなり其處を飛び出して、墓地へ出掛けた。

彼にはもう二頭曳の馬車もあつたし、天鵞絨の胴着姿のパンテレイモンと言ふ馭者もゐた。月明りの、靜かな溫かい晩であつた。それも何處となく秋らしい溫かさであつた。町外れの屠殺場のあたりで野犬が吠えてゐた。スタルツエフは町境のとある橫町に馬車を殘して、自分ひとり徒歩で墓地をめざした。

「誰にだつてみんな、妙なところはあるものさ」と彼は考へた、「猫ちやんだつて妙な娘だ。解るものか、ひよつとしたら、巫山戲てゐるのぢやなくて、本當にやつて來るかも知れないのだ。」

彼はこの微かな空しい希望をつないでゐた。つまり彼女に陶醉してゐたのであつた。

五町ほど野道を行つたとき、墓地が遙か彼方に眞黑な帶になつてあらはれた。それはまるで、森林か

大きな庭園のやうに見えた。やがて眞白な石の垣や、門があらはれた。……月の光で門柱の銘が讀みとれた、――『……の時は近づけり。』スタルツェフは小門をくぐつた。すると先づ眼にうつつたのは、廣い並木路の兩側に立ち並んだ十字架と石碑の眞白な列りと、そしてそれやポプラの樹立やが地に曳く黑黑とした影であつた。あたりは一面に白と黑の遠景で、夢みるやうな樹々がその枝を白い物影のうへに垂れてゐる。ここは野原よりも明るく思はれた。生き物の手に似た紅葉の葉が、黄色い砂路にも墓石のうへにも鋭い影を描き出してゐて、石の碑銘ははつきりと讀み取れるのであつた。最初のうちスタルツェフは、生れ落ちてから始めて眼にし、そして二度と再び見る機會はないに違ひないこの光景に、茫然として立ちすくんでゐた。それは何に譬へやうもない世界であつた。月光の搖籃なのでもあらうか、月の光が美しく樂しげに照りわたり、生の氣配はひそりともしなかつた。ポプラの曳く黑い影に、また墳墓のうへに、何か知ら神祕のものの姿が、幽寂な永遠の生を約束してゐるかのやうに感じられた。墓石にも、凋んだ花にも、秋の朽葉の香に混つて、免罪と悲哀と安息が息吹いてゐた。

沈默はあたりを罩めてゐた。星影が遙かな夜空からこの深い靜寂を見まもつてゐた。スタルツェフの靴音だけが、思ひがけぬ鋭い響を四邊に傳へるばかりであつた。やがて寺院で時の鐘を撞ちはじめた。それを聞くと彼には、自分が死んで、永遠に此處に埋められたもののやうに思はれて來た。さうかと思ふと不意に、誰かに凝と見詰められてゐるやうな氣もした。いや、これは安息でも靜寂でもあるまい、――これは底知れぬ虚無から來る憂愁、または壓しつけるやうな諦め心なのだ、と彼は不圖考へた。……

デメッチの記念碑は小さな禮拜堂のやうな恰好をして、天頂には天使の像がついてゐた。何時のことだつたか、伊太利人の歌劇團がS市に立寄つた折、歌姫の一人が死んでここに葬られた。そしてこの記念碑が建てられた。町ではもう憶えてゐる人もない。けれど入口に附いてゐる御燈が、月の光を反射して、まるで燃えてゐるやうに見えた。

人影はなかつた。まつたく、この眞夜中に誰が來るだらう。けれどスタルツェフは待つて居た。月の光に情熱を温められでもしたやうに、彼は心を燃やしながら待つてゐた。彼は接吻や抱擁やを思ひに描きながら、半時間ほど碑の傍に坐つてゐたが、やがて帽子を片手に側路をぶらぶらしはじめた。待ち續けながら彼は思ふのであつた、――一體この墓地には、幾人の婦人や娘たちが、曾ては美しく魅惑に滿ちて、戀をし愛撫に身を任せて、夜毎に情炎に燃やしてゐた身を、ひつそりと横たへてゐることだらう。本當に、自然といふものは何と意地惡く人間を嘲弄ふものなのだらう。それを思ふと腹立たしくなつて來る……此處まで考へたときスタルツェフは急に、いやいや俺はどうあつてもこの戀を手に入れてやるぞ、と叫びたくなつた。すると彼の眼にうつるのは、もはや大理石の片れ端ではなくて、月の光に仄白く浮び上つた美しい肉體であつた。それが羞ぢらふやうに、樹陰に身をかくすのであつた。彼はその肌の温かさを感じた。そして堪らなく苦しくなつて來た。……

月が雲にかくれたので、四邊は一時に暮が下りたやうに暗くなつた。スタルツェフはやつとの事で門に辿りついた。それから、馬車を殘して置いた横町を探し出すのに小半時もかかつた。

「草臥れたよ。足が棒みたいになつちまつた」と彼はパンテレイモンに言つた。そして、ほつとして幌馬車に乘りながら思ふのであつた。

「やれやれ、肥りたくはないものだ。」

三

翌る日の夕方、彼は結婚の申込みをしにトゥルキン家へ行つた。けれど都合の惡いことに、エカテリーナ・イヴァーノヴナは自分の部屋に籠つて、髮を結はせてゐた。彼女は倶樂部で催される舞踏會に出掛けるのであつた。

　また長いこと客間に坐つて、お茶を飮んでゐなければならなかつた。沈み込んでゐる客の樣子を見ると、イヴァン・ペトローヴィチはチョッキの隱しから紙片れを取り出して、獨逸人の執事が寄越した滑稽な手紙を讀みはじめた。それは「御領地内の閉鎖具の破損甚だしく、なほ墻壁も頽唐仕候」といふ文面であつた。

「持參金は相當に呉れるだらう」とスタルツェフは聞き流しながら考へてゐた。

　前の晩一睡もしなかつたので、彼はふらふらしてゐた。まるで何か甘つたるい睡眠劑でも飮まされた後のやうな氣持であつた。彼の心は靄のやうなものにとざされて、溫かく浮き浮きしてゐた。それと同時に頭のなかでは、冷やかな重苦しい腦髓の一片が考へてゐた。

「あまり深入りしないうちに止めた方がいいぞ。お前の太刀打出來る女だと思ふか？　甘やかされ放題の我儘娘で、晝の二時までも眠るんだぞ。それにお前は役僧の倅で、たかが田舍醫者ぢやないか。……」

「それがどうした」と彼は思つた、「一向に構はないぢやないか。」

「それだけぢやない。あの娘と結婚すれば」と腦髓が續けた、「あれの親類は、お前に田舍の勤めをやめて町へ出て來いと言ふだらう。」

「それがどうした」と彼は思つた、「町なら町でもいいさ。持參金で結構やつて行けるだらうさ。……」

　やつと、エカテリーナ・イヴァーノヴナがは入つて來た。舞踏會のデコルテを着けて、生き生きと可愛らしい樣子であつた。その姿を見ると、スタルツェフは恍惚りしてしまつて、物を言ふどころではなく、ただまじまじと見詰めて笑顏を作るだけであつた。

　彼女は左樣ならと言つた。彼も此處に殘つてゐる用はないので、患者が待つてゐるから歸らなければ、と言つて起ち上つた。

「それは致し方もありませんな」とイヴァン・ペトローヴィチは言つた、「ではお出掛け下さい。ですが序でに猫ちゃんを倶樂部まで送つて戴けますかな？」

　庭は眞暗で、雨がぽつぽつ降り出してゐた。パンテレイモンの嗄れた咳嗽をたよりに、馬車のある場所がわかつた。馬車の幌を掛けた。

「わしは淋しく御留守番。そなたはべちやくちやお出掛けと」とイヴァン・ペトローヴィチは娘を馬車に

連れ込みながら、歌ふやうに言つた、「こなたもべちやくちやお出掛けと。……さあ出發！ 左樣なら、どうぞ！」

馬車は動き出した。

「昨夜私は墓地へ行きましたよ」とスタルツェフははじめた、「あなたは意地わるな薄情な方ですね。……」

「まあ、墓地へいらしつたんですつて？」

「ええ、行きましたとも。そして二時近くまでもお待ちしてゐました。ひどい目に逢ひましたよ。……」

「たんと酷い目にお逢ひなさいましな。冗談の解らないやうな方は。」

エカテリーナ・イヷーノヴナは、自分に思ひを寄せてゐる男を見事に擔いでやつたのが大層滿足であつた。どうして皆こんなに私に夢中になるのだらう、と思つてひとりでに笑ひ出した。その途端、馬車は倶樂部の門を急に曲つたので、車がひどく傾いた。エカテリーナ・イヷーノヴナは喫驚りして、叫び聲を立てながら彼に寄りすがつた。彼はその胴のまはりを確り抱きとめた。もう我儘が出來なくなつて彼女の唇や頤に燃えるやうな接吻をしながら、強く強く抱き緊めた。

「もう澤山ですわ。」と彼女は素氣なく言ひ放つた。

次の瞬間、彼女はもう馬車の中には居なかつた。そして、煌々と燈のともつた倶樂部の玄關に立つてゐた巡査が、パンテレイモンを荒々しく怒鳴りつけた。

「何だつて愚圖愚圖してるんだ、この間拔けめ。出せ、出せ。」

スタルツェフは一旦家へ歸つたが、間もなく戻つて來た。借着の燕尾服を着込んで、こちこちの白ネクタイを結んでゐた。そのネクタイがともすれば無樣に擴がつて、カラアをはみ出さうとするのを氣にしながら、彼は眞夜中の倶樂部の客間に坐り込んで、熱心にエカテリーナ・イヷーノヴナを搔き口說いた。

「いやはや、戀をしたことのない人間と言ふものは、實に譯の解らないものですね。まだこれ迄に、本當の戀の描寫をやつた人はないやうです。實際、この優しい歡ばしい、そして惱ましい感情を描き出すなんて、とても出來ることぢやありませんからね。それに、一度でもこの感情を味つたとなると、もうそれを言葉で他人に傳へやうなんて氣はなくなつてしまふのです。序文だとか、描寫だとか言つて、そんなものが何の役に立ちませう。愚にもつかない美辭麗句が一體何になりませう。私の戀の思ひは涯しもないのです。……ね、どうかお願ひですから」とスタルツェフは到頭切り出した、「私の妻になつて下さい。」

「ドミートリ・ヨヌイッチ」とエカテリーナ・イヷーノヴナが、とても眞面目な顏をして、思ひに沈みながら言つた、「ドミートリ・ヨヌイッチ、私はそのお言葉をしんから有難いと思ひますわ。私あなたを偉い方だと思つて居りますわ。でも……」と彼女は起ち上つて、そのまま言ひ續けた、「でも、勘忍して下さいね、私はあなたの所へは參れませんの。ね、眞面目にお話ししませう。ドミートリ・ヨヌイッチ、あなたも御存じの通り、私は何よりも音樂が好きなんですの。音樂を氣狂ひのやうに崇拜して、自分の一生をあれに捧げる決心なのですの。私は藝術家になりたいんですわ。名聲や成功や自由や、それがみんな欲しいんですわ。けれどもあなたは、私にやつぱりこの町に住んで、この空虛な詰らない生活を續け

ろと仰言るんでせう？　私はもうとても我慢が出來ませんのよ。お嫁に行くなんて、考へてもぞつとしますわ。ね、許して頂戴。人間といふものは、高い輝かしい目的に向つて進んで行かなければならないのに、家庭の生活はきつと死ぬまで私を縛つてしまふに決つてゐますわ。ドミートリ・ヨヌイッチ、（彼女はかう呼んだとき、不圖『アレクセイ・フェオフィラクトイチ』を思ひ出したので、ちらと微笑んだ。）ドミートリ・ヨヌイッチ、あなたは善良で聰明で尊敬すべき方ですわ。あなたは誰よりも御立派な方ですわ。……」彼女の眼には涙がきらきらした。「私はしみじみと、あなたのお心が解りますのよ。……でも、でも、私の氣持も解つて下さいますことね。」

　そして彼女は、泣顔を見せまいとするやうに、くるりと身を飜して客間を出て行つてしまつた。

　スタルツェフは今までの落着きのない動悸が、見る見るうちに鎭まつて行つた。倶樂部を出ると、往來で先づこちこちのネクタイを捥ぎ取つて、それから胸一ぱいに深い息を吸ひ込んだ。少しばかりは氣恥しい氣持もした。まさか拒絶されやうとは豫期してゐなかつたから、自尊心も疼いてゐた。あんなに長いあひだ夢み、惱み、そして憬れてゐた結末が、こんな愚かしいことになつてしまつたとは、とても信じることは出來なかつた。まるで素人芝居のけちな臺本にでもあるやうな。……彼は自分の感情が、自分の戀が、痛ましくてならなかつた。すぐにも歔欷がこみ上げて來さうだつたし、またパンテレイモンのがつしりした脊中を、傘で力任せに毆りつけてやりたくもあつた。

　三日ほどの間は、何にも手につかなかつた。食事もせず、睡りもしなかつた。しかし愈々エカテリーナ・イヴーノヴナが音樂學校に入學するため、モスクワへ出立したといふ噂が耳には入つてからは、やつと安心して元通りの生活を續けることが出來た。

　その後でも時たま、墓地を當てどもなくさまよつたり、燕尾服を探しに町中を馳け廻つたりした事を思ひ出すと、彼は懶るさうに伸びをしながら言ふのであつた。

「やれやれ、何とも御苦勞なことだつた！」

四

　四年の歳月が流れた。スタルツェフはもう町でもなかなかの大先生であつた。毎朝、ヂャリージの患者を濟ませると、馬車に乘つて往診に町へ出掛けた。それも、もう二頭曳ではなく、鈴のついた三頭曳を乘り廻して、歸宅するのはいつも夜遲くであつた。以前よりは見違へるほど肥滿して、それに喘息の氣味なので、彼はもう歩きたがらなかつた。パンテレイモンも矢張り肥つて來た。肥れば肥るだけ、彼は情無さうに溜息をついて、辛い運り合せを滾すのであつた。あまり馬車に乘り過ぎたため、身體が弱つたのである。

　スタルツェフは色々な家庭に出入するにつれて、大勢の人達と知り合ひになつたが、誰とも別に親密にはならなかつた。町の人達の話振りや、人生觀や、それ所か彼等の姿を見ただけでさへ、彼は怖氣をふるつた。さういふ人達は、骨牌や食事の相手にするには實に溫厚で賢明な君子であるが、一旦彼等に

何か齒に合はぬ話——例へば政治や科學の話を持ちかけたら最後、たちまちに戸迷ひして飛んでもない哲學論を振り廻しはじめるのであつた。さうなつたら先づ尻尾を卷いて退却するほかはなかつた。それは經驗を積むにつれて彼にも段々と解つて來た。或る時、こんな事があつた。さる自由主義派の先生に向つて、有難いことに人類は段々と進歩して行くから、この分ならその中に旅券も死刑も無くなりませう、と話した所が、その先生はぢろりと甚だ迂論臭さうな一瞥を呉れて、かう問ひ返したものである。——

「さうなるとつまり、大道で斬捨御免といふ事にもなりませうか？」

またこんな事もあつた。何かの集會の席で、夕食だかお茶だかの後に、人間は働かなければいけません、働かないで生きて行くのは不都合ですな、と言つた所が、一同それを自分達に向つて放たれた非難の矢と勘違ひをして、大いに立腹しはじめ、忽ち喧しい爭論が捲き起つた。

その癖に、これらの人達は仕事と云つたら斷じて何もしないし、また何事にも興味がないのだから、假に話さうにも話し掛ける術がなかつた。で、スタルツエフは出來る限りは話を逃げて、彼等とは一緒に食事をしたり、ヴイントと云ふ骨牌を鬪はせるだけにしてゐた。他人の家庭へ誕生日か何ぞのお祝ひに招かれた樣な時には、ただ坐り込んで皿の中を見詰めたなり、默りこくつて口を動かしてゐた。そんな席での話と來たら、どれも詰らない、偏頗な、愚かしい事ばかりで、聞いてゐるだけでも氣がくしやくしやして來たが、それでも凝と默り込んでゐた。あまり皿を睨んだまま默りこくつてゐるもので、仕

舞ひには「横柄な波蘭土つぽ」といふ綽名を貰つた。無論、波蘭土人ではないのだが。

彼は芝居や音樂會などの娯樂からも遠ざかつてゐた。その代りヴイントにはすつかり凝つてしまひ、毎日のやうに三時間もこれに耽つた。また彼にはもう一つの樂しみがあつて、それが知らず知らず段々と大きくなつて行つた。つまりそれは、晩になるとその日に稼いだお札を衣嚢から引つ張り出して見ることであつた。香水だの、酢だの、麝香だの、肝油だの、そんな色々の臭ひのする黄色や綠のお札が、日によると七十留も衣嚢に詰まつてゐることがあつた。それが幾百かになると、彼は『相互信用銀行』へ持つて行つては預金した。

エカテリーナ・イヷーノヴナが居なくなつてから四年の間、彼は二度しかトウルキン家を訪問しなかつた。それも、相變らず偏頭痛の療治をしてゐるヴエーラ・ヨシーフオヴナに招かれたからであつた。毎年夏になると、エカテリーナ・イヷーノヴナは歸省したけれど、彼は一度も會つたことがなかつた。何故となく、さう云ふ都合になつた。

さうして、もう四年も經つてしまつた。或る靜かな、ぽかぽかする朝のこと、病院へ一通の手紙が屆けられた。ヴエーラ・ヨシーフオヴナからで、近頃はお顔を見ないので淋しくてならない、この惱みを和げてやる思召しで必ずお來駕下さい、なほ今日は私の誕生日です、といふ文面であつた。お終ひの所に追て書きとして、「ママと一緒に私からもお願ひ致します。——ネ」とあつた。

スタルツエフは暫く考へてゐたが、やがて夕方になるとトウルキン家へ出掛けた。

「やあ、今日は、どうぞ」とイヴン・ペトローヴィチが片々の眼で笑ひながら彼を出迎へた、「ボン・ジュルは。」

ヴエーラ・ヨシーフオヴナは白髪がふえて、すつかり老け込んでゐた。彼女は態とらしくスタルツェフの手を握つて言つた。

「ねえ先生、あなたはもうこの私なんぞどうでもお宜しいのでせう？ ちつともお見えになりませんのね。私がこんなにお婆さんになつたからでせう。でも、そら、若いのが參つて居りましてよ。この方はどうやら、私よりも幸福になれさうですのね。」

その猫ちやんはと言ふと、以前よりも瘠せて顔色も蒼ざめてゐたが、ずつと美しくなり均齊も取れて來てゐた。けれど、もう猫ちやんではなくなつて、エカテリーナ・イヴーノヴナだつた。以前の新鮮さも、子供つぽいあどけなさもなかつた。眸にも身振りにも何か別のものが加はつてゐた。トウルキン家に歸つて來て居ながら、何となく居心地の惡いやうな、おづおづした遠慮が見えてゐた。

「幾夏、そして幾冬振りでせう！」と彼女はスタルツェフに手をさし伸べながら言つた。激しく動悸が打つてゐるらしかつた。そして凝と探るやうに彼の顔を見詰めながら續けた、「何てお肥りになつて！ それに日に燬けて、お丈夫さうになつて。でも、ちつともお變りになりませんのね。」

今でもやつぱりいいお孃さんだと彼は思つた。とてもいいお孃さんだと思つた。けれど何か知ら足りないもの、さもなければ餘分なものがある樣な氣がした。――それを、明らかにこれと言つて名指すことは出來ないけれど、とに角彼の以前のやうな感情の動きを妨げる何かがあつた。蒼白い顔の色も氣に入らなかつた。見慣れぬ表情も、弱々しい微笑も、聲も、氣に入らなかつた。暫くすると彼女の衣裳も、掛けてゐる肱付椅子までが厭になつて來た。危ふく彼女と結婚しやうとしたときの思出にも、何かしら意に滿たぬものの影があつた。彼は四年間も苦しみ通しに苦しんだ自分の戀を、夢想を、希望を顧みて、果敢ない氣持になつて行つた。

お茶と甘つたるいお菓子が出た。それからヴエーラ・ヨシーフオヴナが小説を朗讀した。あらゆる縮そらごとを讀み立てて行つた。スタルツェフは耳を傾けながら、彼女の眞白になつた美しい髪を眺め、そしてお仕舞ひを待つてゐた。

「才能がないといふのは」と彼は考へた、「小説の書けない人のことではない。書けてもそれが匿せない人のことなのだ。」

「拙でないですな」とイヴン・ペトローヴィチが言つた。

それからエカテリーナ・イヴーノヴナがピヤノを彈いた。長々と騒々しく。彈奏が濟むとみんなでお禮を言つて、口々に賞めそやした。

「やれやれ、買はないでいい事をした」とスタルツェフは心の中で考へた。

彼女は庭へ誘はれるのを待つてゐる樣子で、凝と彼を見詰めてゐた。けれど彼は何も言ひ出さなかつた。

「さあ、お話を致しませうよ」と彼女は寄つて來て言つた、「いかがお暮しですの？　お仕事の方はいかがですの？　この二三日、私あなたの事を考へて居りましたのよ」と彼女は神經質に言葉を繼いだ、「お手紙を差上げやうと思ひましたの。自分でヂャリージへお訪ねしやうかとも思ひましたの。お訪ねすることに決めて、またあとで思ひ返しましたの。……だつて、あなたがどう思つて下さるか解りませんもの。今日あなたのお出でになるのを、本當にお待ちして居りましたわ。ね、お庭へ參りませうよ。」

二人は庭に出て、四年前と同じやうに紅葉の老木の蔭にあるベンチに腰掛けた。あたりは暗かつた。

「ねえ、いかがお暮しですの？」とエカテリーナ・イヷーノヴナが訊いた。

「お蔭様で、どうにかやつて居ます」とスタルツェフは答へた。

それ以上、彼は何も考へ出せなかつた。暫く默つてゐた。

「私、何だかそわそわして居りますけれど」とエカテリーナ・イヷーノヴナは言つて、兩手で顏を蔽ひかくした、「お氣になさらないで下さいましね。歸つて來て色々な方にお會ひ出來るのは嬉しいんですけど、何となく落着きませんの。澤山に思ひ出がありますのね。私たち夜が明けるまで、のべつに斯うしてお話しして居られることとばかり思つてをりましたの。」

彼女の顏や、きらきらする眼が、彼のすぐ近くにあつた。彼女は暗い中に坐つてゐると、部屋に居るときより若く見えたし、以前のあどけない顏附か歸つて來たやうにも見えた。實際また、彼女はあどけない穿鑿好きな眸をして、彼を見詰めてゐるのであつた。――その昔、自分に燃えるやうな思ひを寄せた男、その愛情、そして失意。……彼女はその顏をしげしげと眺めて、その心の中を讀みとらうとするかのやうであつた。彼女の眼は昔の戀への感謝の思ひに輝いてゐた。彼の方でも昔を思ひ出してゐた。墓地をうろついたこと、そして夜明け近くにくたくたになつて家に辿り着いたこと、そんな細々したことまでが思ひ出された。すると急に悲しくなつて、今更に昔の日が惜しまれた。

「倶樂部の夜會にお送りして行つたのを憶えてお出でですか？」と彼は言つた、「あの晩は雨が降つて、眞暗で……」

彼の心はだんだんに燃え立つて來た。人生の愚癡が滯したくなつた。……

「いやはや」と彼は溜息をしながら言つた、「私がどうして暮してゐるかとお訊ねでしたね。この世の中はどう暮すも何もありはしませんよ。ええ、ありませんとも。年をとる、肥る、身體が弱つて來る、それだけなんです。月日がどんどん經つて行く。……晝間は生活に追はれ、夜は夜で倶樂部へ出掛けて我慢のならぬ骨牌仲間や、醉つぱらひや、がやがや連中のお附合ひです。何のいいことがあるものですか。」

「でも、あなたにはお仕事がおありですわ。人生の氣高い目的が。……あなたは病院のお話をなさるのが、あんなにお好きだつたでは御座いませんか。あの時分、私は自分ながら可笑しくなるほど、ピヤノの大家だと思ひ込んで居りましたのね。今ではどちらのお孃さんもお彈きになりますし、私だつてつまり皆さんと同じやうに彈いて居りましただけの事で、特別の才能なんぞありはしなかつたのですわ。私がピヤノを彈くのは、ママが小說を書くのと同じことですわ。そりや、あの時分は私あなたのお氣持が

解りませんでした。それが、モスクワへ參つてから、よくあなたの事を思ひ出すやうになりましたの。あなたの事ばかり思つて居りましたの。地方醫になつて、苦しんでゐる人達を助けて、社會に奉仕するのは、何といふ幸福なことでせう。何といふ幸福でせう！」とエカテリーナ・イヷーノヴナは熱心に繰返した、「私、モスクワであなたの事を考へるたびに、とても理想的な氣高い方に思へて……」

スタルツエフは、自分が毎晩衣嚢から引き出しては滿足さうに眺めるあのお札のことを思ひ出して、索然として胸の炎が消えた。

で、彼は立ち上つて家の方へ行きかけた。彼女はその手をおさへた。

「あなたは私がこれ迄お目に掛つたなかで一番お立派な方ですわ」と言葉を繼いだ、「これからも逢つてお話して下さいます？　ね、約束して下さいまし。私はピヤニストではありませんわ。もう自分のことで迷ひなんか致しませんわ。あなたのおいでの所ではもう彈きませんし、音樂のお話も致しませんわ。」

家へは入つてから、ラムプの光で彼女の顏や、自分に注がれる憂鬱な、感謝に滿ちた、訴へるやうな眸を見ると、スタルツエフはまた不安な氣持になつて思ふのであつた。

「ああ、あの時貰つてしまはないで、いい事をした。」

そして別れを告げはじめた。

「夜食も上らないでお歸りとは、そんな羅馬法權はありますまい」とイヷン・ペトローヴイチは彼を送つて來ながら言つた、「それは何とも垂直極まることですよ。ぢや一つ、演（や）つてお眼にかけろ。」と玄關に出たとき、彼はパーヴアに言つた。

パーヴアはもう子供ではなく、口髭を生やした青年になつてゐた。見得を切つて手を高くさし上げ、悲劇調で叫んだ。

「ても不運な女（やつ）、死ぬがよい。」

スタルツエフは身顫ひが出た。馬車に乘つてから、昔はあれほどに懷しく大切なものに思つた暗い家や庭を、あらためて眺め直した。ヴエーラ・ヨシーフオヴナの小說も、猫ちやんの騷々しいピヤノもイヷン・ペトローヴイチの頓智も、パーヴアの悲劇の見得も、何もかも一ぺんに思ひ返した。そして、町で一番の才能ある家庭がこんな有樣なのなら、その町といふのは一體どんなものなのだらうと考へた。

三日たつと、パーヴアがエカテリーナ・イヷーノヴナの手紙を持つて來た。

『あなたはちつともお出でになりませんのね。何故ですの？』と書いてあつた、『もう私共をお見限りなのではないかと心配になります。本當に心配ですの。そんな事は考へただけでも怖ろしくてなりません。私を安心させて下さいまし。お出でになつて、何も心配することはないと一言仰言つて下さいまし。どうしてもお話しなければならないことが御座いますの。――あなたのE・T・』

彼は讀み終へて暫く考へた後でパーヴアに言つた。

「今日はとても忙しくて伺へないからと申し上げてお呉れ。さうさな、三日ほどしたら伺ひませうつて。」

三日たち、一週間たつたが、彼はやつぱり行かなかつた。トウルキン家の前を通りかかつた事もある

が、その時も一分間でも立寄つた方がいいと思ひ、また思ひ返し、……やめてしまつた。

彼はその後も終にトゥルキン家を訪れなかつた。

五

何年か過ぎて行つた。スタルツェフは益々肥滿して脂ぎつて來た。息をするのも苦しさうで、歩くときは頭をがくりと後へ投げて歩いた。その彼が、ぶくぶくした赭ら顔で、鈴のついた三頭曳（トロイカ）に乘り、パンテレイモンも矢張りぶくぶくした赭ら顔で猪首をちぢめて馭者臺に坐り、まるで枯木のやうな兩手を眞直に突き出しながら、「右側あるうけ」と通行人を怒鳴りつける有樣は、實に一幅の繪であつた。さながら乘つてゐるのは人間ではなくて、何か邪宗の神樣のやうに見えた。

彼は今では町で押しも押されぬ大先生で、息をつく暇もなかつた。もう立派に領地もあり、町には持家が二軒もあつて、今度はもつと有利な三軒目の家を探してゐた。例の『相互信用銀行』で競賣に出た家のことを耳にすると、彼は遠慮會釋もなくその家に上り込んで、着るや着ずの姿で彼の方をびくびくと見上げてゐる女子供には目も呉れず、一々扉からステッキを突つこんで言ふのである。――

「ここが書齋だね。ここが寢室だね。ここは何だ？」

さう言ひながら苦しさうに息をついて、額の汗を拭ふのだつた。

堪らないほどに忙しかつたが、それでも地方醫の職をやめやうとは言ひ出さなかつた。貪慾の俘にな

つてしまつた彼は、一日ぢう方々を飛び歩いてゐた。ヂヤリージでも町でも、人々は彼のことを『ヨヌイッチ』と約めて呼んでゐた。――「ヨヌイッチは何處へお出掛けかな？」とか「ヨヌイッチに診（み）て貰はうか？」と言つた具合であつた。

咽喉がすつかり脂づいてしまつた所爲（せゐ）か、彼の聲は變つて細い甲高い聲になつてゐた。性格も變つて、怒りつぽい氣難し屋になつた。患者を診察するときでも大抵は不機嫌であつた。苛立たしげに杖の先で床をコツコツ叩いて、聞きづらい聲で叫ぶのだつた。――

「私の訊くことだけに返事をして下さい。お饒舌りはせぬ事。」

彼は孤獨であつた。生活が退屈で堪らなかつた。何の興味もなかつた。

ヂヤリージに住むやうになつて此のかた、樂しかつたことと言へば、猫ちやんへの戀だけであつた。そして、それも恐らくは最後のよろこびであつた。毎晩彼は倶樂部へ出掛けて行つてヴイントを鬪はせ、それが濟むと今度は一人きりで大きな卓子（テーブル）に坐つて夜食をした。すると一番老練な給仕のイヷンが出て、十七番の赤葡萄を注いだ。倶樂部では番頭もコックも給仕も、みんな彼の好き嫌ひを知り拔いてゐて、御意に背くまいと一生懸命になつてゐた。やり損つたら最後、彼は憤然と色を作（な）して、杖の先で床をコツコツ始めるのであつた。

食事の最中に、彼は時たまには振り向いて、何かの話に割り込んだ。

「それは何のお話ですな？　え？　誰のことですな？」

たまに隣の卓子(テーブル)でトウルキン家の話が出るやうなことがあると、彼はかう訊ねるのであつた。――

「それはどのトウルキンですかな？　あの、娘さんがピヤノを彈きなさる家ですかな？」

彼のことはこれでお仕舞ひである。

トウルキン家の方はと言ふと、イヷン・ペトローヴイチは老けもせず變りもせず、相變らず洒落や笑ひ話をやつてゐる。ヴエーラ・ヨシーフオヴナも元通りに、熱心なそして例のさつぱりした調子で、自作の小説をお客様に讀んで聽かせる。猫ちやんは毎日グランド・ピヤノを四時間も彈奏する。彼女は目立つて老け込み、病身になつて、秋になるときまつて母親と一緒にクリミヤへ出掛ける。イヷン・ペトローヴイチは二人を停車場へ送つて行く。汽車が動き出すと、涙を拭いて叫ぶ。――

「左様なら、どうぞ！」

そしてハンカチを振る。

一

頸の上のアンナ

一

結婚式のあとでは鳥渡した茶菓さへ出なかつた。新夫婦は三鞭酒の盃を擧げて、それから直ぐ旅行服に着替へると停車場へ乘りつけた。陽氣な結婚舞踏會や晩餐や、音樂や舞踊の代りに、彼等は五十里も隔つた修道院に參詣に出掛けるのであつた。多くの人々はこの企てに贊意を表してゐた。モデスト・アレクセーイチは既に官職も高いし年齢も相當進んだ方だから、騷々しい婚禮などは全く似合はしくないだらう、と言ふのである。全く、五十二歳にもなる立派な官吏が、やつと十八になつたばかりの少女と結婚したのだから、音樂を聽いたつてただ退屈なだけであらう。また、モデスト・アレクセーイチはなかなか信條のはつきりした人だから、結婚生活にあつても先づ宗教と道徳を第一に据ゑると言ふ自分の氣持を小さな花嫁に會得させる目的で、この修道院行きを選んだのであらう、と言ふ人もあつた。

停車場には見送人がつめかけて來た。同僚たちや親戚の人々が手に手に三鞭酒の盃を持ち、汽車が動き出して「ウラア」を叫ぶ時や遲しと待ちかまへてゐた。絹禮帽(シルクハット)と教授服に身をかためた花嫁の父親のピョトル・レオンチイッチは、もう醉ひが廻りすぎて蒼い顏になつてゐたが、やはり手に三鞭の盃を持つたまま絶えず車窓を覗き込んで懇願するやうな聲で言ふのであつた。

「アニュータ！　アーニャ！　もう一言だけだよ、アーニャ！」

アーニャが車窓から顏を乘り出すと、彼は葡萄酒の匂ひをぷんぷんさせながら娘の耳に何やら囁き込

むのであつた。何を言つてゐるのか一言も解らなかつたが、とに角娘の顏や胸や手の上に十字を切つて、息をはづませ眼を潤ませるのであつた。すると、アーニャの弟で二人ともまだ中學生のペーチャとアンドリューシャとは、父親の服を掴つて後ろへ引き戻しながら、當惑さうに囁いた。

「お父さん、もういいですよ。……お父さん、駄目ですつたら。……」

汽車が動き出すとアーニャには、自分の父親が手のなかの酒を揺りながら溢しながら、いかにも人の善い殘念さうな、そして濟まなさうな顏をして暫く追ひかけて來るのが見えた。

「ウラア、ア、ア」と父親は叫んだ。

新夫婦は二人きりになつた。モデスト・アレクセーイチは仕切車(クペエ)のなかを見廻し、手荷物を網棚の上に載せてから、微笑を浮べて小さな妻の向ひ側に腰を下した。この官吏は中背で相當に肥滿しむくんだ身體つきで、その頗る榮養のよささうな顏には長い頬鬚を蓄へ、口髭はなかつた。よく剃りの當つたまん圓るな線のくつきりした頤は、足の踵によく似てゐた。彼の顏で一番の特徴と言へば矢張り口髭のないことであらう。その青々と剃りの當つた裸の皮膚には、脂ぎつてまるで果漿(ジェリイ)のやうに波をうつ兩頬が續いてゐた。甚だ威嚴のある身の科(こな)しで、敏捷に身體を動かすことはないが、それかと言つて態度はあくまで物柔かであつた。

「僕は今こんな事を思ひ出すんだがね」と彼は微笑みながら言つた、「五年前のことさ、コソロートフといふ男が聖アンナ二等賞を貰つたので閣下の所へ御禮を申上げに行つた。すると閣下はかう言はれたの

だよ、――『これで君にはアンナが三つになつた譯ぢやね。一つは釦の孔に吊つてあるし、あとの二つは頸つ玉にな』と、かうなのさ。それと言ふのがつまり、丁度その時コソロートフの奥さんが歸つて來た所だつたからさ。この奥さんと言ふのがね、矢張りアンナと言ふとても浮氣者で手に負へない驛馬だつたんだよ。まあ僕も、今にアンナ二等賞を貰ふ時には、閣下からこんな事を言はれないで濟むやうにしたいものだね。」

彼はその小さな眼で微笑んでゐた。彼女も微笑した。けれどそれと同時に、この男は一分間ごとにあの厚ぼつたいべとべとした唇で自分に接吻するかも知れない、そしてもう自分にはそれを拒絶する權利はないのだと思ふと、心の波立つて來るのをどうもしやうがなかつた。彼のぶくぶくした身體の物柔かな動作までが、彼女を慴えさせるのであつた。怖ろしくもあり、厭らしくも思へた。彼は起ち上つて、頸から勳章を外し、それから上衣とチヨッキを脫いでピジヤマに着替へた。

「まづこれで良しと」彼は言ひながらアンナの隣に坐り込んだ。

彼女は結婚の式が辛らくて堪らなかつたことを思ひ出した。牧師やお客樣ばかりでなく教會のなかのあらゆる眼が、さも憐れむやうな眼附で彼女を眺めながら、こんなに可愛らしい美しい娘が一體何故あんなに年の違ふ面白くもない紳士の所へ嫁くのだらう、と考へてゐるやうに思へてならなかつた。まだ朝のうちには、萬事これでうまく運んだと思つて、飛び立つほどの嬉しさを感じてゐたのだが、それが結婚式になり、かうして汽車に乘つて居る今になると、何だか取り返しのつかぬ事をしてしまつたやう

な欺かれたやうな、笑はるべき身の上になつてしまつたやうな氣がして來た。かうして自分は金持のお嫁さんになつた。けれどお金は自分が持つてゐる譯ではない。婚禮の衣裳も借金でこしらへたのだ。そして先刻、停車場に見送りに來た父親や弟達の顏には、懷中に一文もないのだとさうありありと書いてあつた。今晩の食事は大丈夫かしら？ そして明日の食事は？……こんな風に思ひはじめると彼女には、父親や少年達が今お腹を空かしながら、まるでいつか母親のお葬式が濟んだ晩そつくりの寂しさを感じながらぽつねんと坐つてゐる光景が眼に浮んで來るのであつた。

「ああ、私はとても不幸せだわ」と彼女は考へた、「なぜ私はかうも不幸せなんだらう？」

女を扱ふことに慣れない、素行の正しい男に通有のあのおづおづした樣子で、モデスト・アレクセーイチは時々思ひ出したやうに彼女の胴のあたりに觸つたり肩を輕く叩いて見たりしてゐた。彼女の方では、お金のことを考へたり、母親の臨終のときのことを思ひ出してゐた。

母親が亡くなつた後では、中學校で習字と圖畫の教師をしてゐた父親は酒に親しみはじめ、忽ち一家は貧困に責められるやうになつた。男の兒たちの長靴もゴム靴もなくなるし、父親は仲裁裁判所に引き出されるし、擧句の果てには執達吏がやつて來て家財の明細書を作つた。……何といふ恥辱だらう！アーニヤは酒癖の惡い父親の世話もしなければならず、弟達の沓下の破れも繕はなければならず、市場へ自分で物菜を買ひに行かなければならなかつた。その途中などで人々が自分の美貌や生々しい優美な物腰などを賞めて呉れると、みんなの眼が自分の安物の帽子や、墨で塗りかくしてある靴の孔に注がれ

てゐるやうに思へて、消え入りたいやうな氣持がした。そして夜は夜で、もう直きにお父さんは病弱のためきつと中學を免職される。そしてもうそんな生活に堪へられなくなつてお母さんの後をお追ひになるに違ひない、と言ふやうな絶えまない恐怖に苛まれて涙の乾くひまもなかつた。知り合ひの婦人達がそれを見兼ねて、アンナにいいお聟さんを探してやらうと色々奔走して呉れた。やがてのことに、年も若くはなく美しくもないが、その代りお金のある、つまり此のモデスト・アレクセーイチが見附かつたのである。彼は銀行に十萬ほど預金があり、人に借してはあるがとに角親譲りの領地もあつた。非常に身持ちの正しい男だから、所謂閣下にも受けがよかつた。その上、アンナが聞いた所では、父親のピョートル・レオンチイッチを首にしないやうにと、校長やさもなければ視學官に宛てた手紙を、閣下に一筆書いて貰ふことも造作はないといふ話であつた。……

彼女がこんな事を一々思ひ出してゐたとき、急に窓の外にがやがやと人聲がして、それに混つて音樂が聞えて來た。汽車が中間驛に停つたのであつた。プラットフォームの向ふの人混みのなかで、手風琴だの安つぽいきいきい言ふ胡弓だのを賑かに弾いてゐた。それから、月光の流れる別莊の屋根や高い白樺やポプラの樹立の方からは、軍樂隊の演奏が響いて來た。別莊の人々が舞踏會を催してゐるのであらう。

プラットフォームには、天氣の好い日には此處へ新鮮な空氣を吸ひに出掛けて來る都會の人々や避暑客などが、ぞろぞろと歩いてゐた。その群れの中には、此處の別莊全體の持ち主であるアルトイノフと

いふ富豪の姿も見られた。これは脊の高い肥つた色の淺黒い男で、眼の飛び出たその顏はアルメニヤ人に似てゐた。彼の服裝は異樣であつた。襯衣（シャツ）の前を開けはだけて胸を露はにし、拍車のついた長靴を穿き、肩からは黒のマントを垂らして、それをまるで婦人の長裾のやうに地面に引きづつてゐた。ボルゾイ種の犬が二匹、尖つた鼻面を地につけながらお伴をしてゐた。

アーニャの眼にはまだ涙が光つてゐた。けれど彼女はもう母親のこともお金のことも、それから自分の結婚のことも考へてゐるのではなかつた。彼女は賑やかな笑ひ聲を立てながら、知り合ひの學生達や士官達と握手をはじめて早口に言ふのであつた。

「今晩は、皆さん。御機嫌はいかがですの？」

彼女は昇降口の方へ出て行つて、そこで月光を全身に浴びながら、自分の新調の素晴しい衣裳や帽子が皆に見えるやうな恰好で立つた。

「何故こんなに長く停車するんですの？」と彼女は訊ねた。

「この驛で交換なんですよ、」と誰やらが答へた、「郵便列車を待つてるんです。」

彼女はアルトイノフが自分を眺めてゐるのに氣附くと、急に媚を含んだ瞬きをはじめ、そして高聲で佛蘭西語を饒舌りはじめた。第一には自分の聲がとても綺麗に響きわたるため、第二には音樂が聞え月が池水に映つてゐるため、それからあの有名な甘やかされ放題のドン・ジュアンのアルトイノフが好奇の眼で貪るやうに自分を見詰めてゐるため、最後には誰もかもが陽氣にはしやいでゐるために、彼女は

急に浮々した氣持になるのであつた。そして汽車が再び動き出して士官達がお別れの擧手をした時には、彼女はもう、遙かの樹立の蔭あたりから後を追ひかけるやうに傳はつて來る軍樂隊の調べに合せて、ポルカを小聲で歌つてゐた。そして彼女は仕切車（クペエ）に歸つて來たが、その時は旣に、何がどうならうとも自分がきつと幸福な女になれるだらうことを、この中間驛の人々に證明して貰つたやうな氣になつてしまつてゐた。

新夫婦は修道院で二日を送つて、都會に戻つて來た。二人は官舍に住んでゐた。モデスト・アレクセーイチが役所に出掛けた後では、アーニャはピヤノを彈いたり、淋しさに泣いて見たり、寢椅子に横になつて小說を讀んだり流行雜誌の頁を飜したりして時を潰した。夕食になるとモデスト・アレクセーイチは盛んにぱく附きながら、政治だの敍任、轉勤、賞與だのの話をやり、人間は働かなければならぬとか、家庭生活は快樂ではなく義務なのであるとか、塵も積れば山嶽となるとか、自分は宗敎と道德を第一義としてゐるとか、そんな具合に話すのであつた。そしてその拳でナイフをまるでサアベルのやうに握りしめて言ふのであつた。

「人はおのおのその義務がある筈だよ。」

アーニャはそれに耳を澄してゐた。怖ろしい話なので食べることも出來ずに、大槪は空腹のままで食卓を立つた。

夕食が濟むと夫は午睡をして雷のやうな鼾を立てた。その暇に彼女は里を訪問した。すると父親と少

年達は何となく改まつたやうな眼附で彼女を眺めるのであつた。その樣子はまるで、つい今まで彼女の噂をして、金に眼が眩んで愛してもゐない退屈極まる男の所に嫁つたと非難してゐたかのやうに思はれた。姉娘のさらさら言ふ衣裳や、腕環の輝きや、さういつた風の奥樣めいた容子を見るのが、彼等には何となく氣詰りであり輕い反感さへも唆られるのであつた。彼女が訪ねて來ると彼等はきまつて當惑して、話の緒に困るのであつた。とは言へ彼女に對する愛情が薄らいだといふ譯でもなく、今でも矢張り姉娘の姿の見えない食事が物足らなくてならないのだつた。

彼女は里の人々と一緒に坐つて、野菜スウプや、オートミールや、ヘツトで揚げた馬鈴薯の妙に蠟燭臭いのを食べた。ピョートル・レオンチイチは顫へのとまらない手でヴオトカを注いで、それを大急ぎで貪るやうに、わざと厭な顏をしながら飮み乾した。それから立て續けた二杯、三杯と乾して行つた。……すると、瘠せつぽちで大きな眼をした顏色の惡いペーチヤとアンドリューシヤが酒壜を引つたくつて、お祈りのやうに言ふのであつた。

「駄目ですよ、お父さん。……お父さん、もう澤山ですつたら。……」

アーニャも矢張り心配して、もう飮まないで下さいと口をあはせて賴んだ。すると父親は見る見る激怒して來て、拳で卓子を叩いた。

「この俺は誰にも監督されたうはないぞ」と彼は叫んだ、「餓鬼どもも、そこの女つ子も、叩き出してしまふぞ。」

けれどその聲音には弱氣と善良さが籠つてゐたので、誰一人怖がつては居なかつた。

夕食の後では、この父親はいつも一生懸命に身じまひをした。頤に剃刀傷のついた蒼白い顔をして、鶴のやうな瘠せ首をぐいと伸ばしながらたつぷり半時間は鏡の前を動かずに、おしやれをするのであつた。眞黑な口髭に櫛を入れてぴんと癖をつけ、香水を胸に振りかけ、ネクタイを蝶形に結び、手袋をはめ、絹禮帽（シルク・ハット）をかぶり、さてそれから家庭教師に出掛けて行つた。休みの日には一日ぢう家に居て油繪を描いたり、または齒の拔けたやうな音色で吼える手風琴を鳴らしたりした。彼は何とかして素晴しい音色を絞り出さうと苦心しながら、それに合せて歌つた。でなければ再た男の子たちを怒鳴りつけるのだつた。

「この根性曲りの碌でなしめが！　また樂器を壞し居つたな！」

アーニャの夫は毎晩のやうに、同じ官舍に住んでゐる同僚たちと骨牌（かるた）をやつた。その骨牌が始まると、器量のわるい上に惡趣味なおしやれをした、そして料理女みたいに粗野な士官夫人たちが一間に寄り合つて、自分たちの御面相にも劣らず不體裁で惡趣味な色々の蔭口がはじまるのであつた。

或る晩のこと、モデスト・アレクセーイチはアーニャを連れて芝居へ行つた。幕間になつても夫は彼女を一歩も自分から離さないで、彼女と手を組んで廊下や休憩室を歩いて廻つた。そして誰かと挨拶を交すや否や、もうアーニャの耳に囁くのであつた、「あれは參事官だよ。……閣下の氣受けは……」とか或ひは、「なかなかの財産家だよ。……家作もあるし……」などと。食堂の前を通つたとき、アーニャは

何か甘いものが食べたくてならなかつた。彼女はチョコレートや林檎のパイが大好きなのであつたが、自分にはお金がないし、と言つて夫に言ひ出すのも遠慮だつた。夫は梨を取り上げて、それを指で捏ね廻しながら、はきはきしない口調で訊ねた。

「これはお幾らですな？」

「廿五錢でございます。」

「ほほう。……」と彼は言つて梨を元の場所に戻した。だが何も買はずに食堂を出るのも具合が惡いので、彼はゼルツェル鑛泉を一壜買つて自分一人で飲み乾してしまつた。すると忽ち彼の眼には涙が溢れて來た。アーニャにはこの時ほど夫が憎らしく思へたことはなかつた。

やがて夫は急に顏中を眞紅にすると、彼女に向つて早口に話し掛けた。

「あの年寄りの婦人にお辭儀をして呉れ。」

「だつて私、あの方存じませんわ。」

「どうだつていいぢやないか。あれは地方理財局長の奧さんだぞ。さ、お辭儀をしろと言ふに！」と彼は執拗に言ひ張つた、「まさかお前の頭が轉げ落ちもしまい。」

アーニャはお辭儀をした。彼女の頭は本當に轉げ落ちはしなかつたが、その代りとても辛い心持がした。彼女は何一つ抗らはずに夫の言ひなりになつてゐた。けれど心の中では、自分が底なしの大馬鹿女になり下つて、夫の虚僞を見て見ない振りをしてゐるのが堪らないほど口惜しかつた。

彼女はこの男が金持だと言ふからこそ嫁に來たのであつた。所が彼女の懷中は嫁入り前よりも乏しいのであつた。前にはあの貧乏な父親でさへ二十錢銀貨は吳れたものである。それが今では一文も無いのだ。默つて取ることもねだることも彼女には出來なかつた。夫の前に出るとびくびく怖れてばかり居たからである。彼女には自分がもうずつと昔からこの男に對する恐怖の念を抱き續けてゐたやうに思へた。

彼女がまだ子供だつた頃には、世の中で一番强い恐怖は女學校の校長で、しよつ中自分を粉微塵にしてしまはうと身構へてゐる機關車か黑雲のやうに思へて一刻もその怖ろしさを忘れることが出來なかつた。もう一つの同じ位强い恐怖は、顏を見たこともない『閣下』で、その人は二六時中彼女の家庭の噂の中に姿を現はし、どう言ふ譯かみんながひどく怖れてゐた。まだほかにも、この二つに比べれば小さな恐怖が十ほどあつたが、その中には口髭を青々と剃つて、頗る嚴格で頑迷な女學校の先生達も入つてゐた。そして最後にこの規律正しいモデスト・アレクセーイチであるが、その顏までがどうやら女學校の校長に生寫しであつた。

アーニャの想像のなかでは、これらの恐怖のさまざまな姿が到頭一つに合はさつて、それが一匹の怖ろしい巨大な白熊の姿に現じて、例へば自分の父親のやうな心の弱い罪人(つみびと)たちを脅やかしてゐるやうに思はれた。で、この白熊が自分を粗々しく無撫したり、怖ろしさで氣が遠くなりさうな汚らはしい抱擁をするやうな時にも、その機嫌を損じまいと言葉の端々にまで氣を配りながら、心にもない笑顏を作つたり强いて滿足らしい身振りを取り繕はなければならなかつた。

後にも先にも一ぺんきりであつたが、父親のピョートル・レオンチイッチが或る不義理な借金の片を附けるためにやつとの思ひで彼に五十留(ルーブリ)の借財を申込んだことがあつた。だがそのために、どんなに辛い思ひを忍ばなければならなかつた事だらう！

「解りました。御用立てしませう」とモデスト・アレクセーイチは考へ込みながら答へた、「ですが前以てお斷りして置きますが、あなたが酒をよされぬ限りこの上二度ともう御援助は致し兼ねますな。苟も職を官途に奉ずる男子として、あなたのやうな薄志弱行は實に恥づべきことですよ。この樣なことは三歲の兒童も心得て居ることで私から申し上げる迄もないですが、立派な才能を天から與へられながら、そしてもしこの惡癖がないならばどんな高位高官にも昇れたやうな人間が、ただこの惡癖あるがために徒らに身を滅した實例は實に多いのですな。」

そんな具合にひねくつて廻した物の言ひ方がまだまだ續くのであつた。——「多事益々辯じましてですな……」とか、「これを以てこれを觀れば……」とか、「只今申上げた事に鑑みて……」とか。……一方可哀相なピョートル・レオンチイッチは消え入りたいほどの侮辱を我慢しながら、酒を浴びたい强い慾望を感じるのであつた。

時たま、相變らずの破れ靴に糸の透いたズボンをはいて、アーニャの所へお客に來る少年達も、矢張りお說敎を謹聽しなければならなかつた。

「人間はみな義務を持つて居なければならんね」とモデスト・アレクセーイチは彼等に言つて聽かせた。

その癖、お金はちつとも與れないのであつた。彼は金の代りに指環や腕環やブローチやを買つてアーニャに與へた。かう言ひながらである。

「これはね、暗い日にはとても引き立つて見えるんだ。」

そして屢々妻の衣裳箪笥の錠を開けさせて、中のものが完全かどうかを檢閲するのであつた。

二

そのうちに冬になつた。まだ降誕祭までに大分間のあるうちから田舍新聞には、來る十二月廿九日貴族會館に於て冬期舞踏例會「相催され候」といふ廣告が出てゐた。毎晩の骨牌（かるた）が濟むと、モデスト・アレクセーイチはきまつて頗る昂奮した面持で同僚の夫人連とひそひそ話を始めては、時々心配さうにアーニャの方を振向くのであつた。それから何やら考へ込みながら部屋の中を長いこと行つたり戻つたりしてゐた。が到頭、或る晩大分更けてから、彼はアーニャの前に立ち停つてかう言つた。

「お前はひとつ自分で夜會服を縫はなければならんね。解つたかな？ ただ頼むからマリヤ・グリゴリエヴナやナターリヤ・クジミニーシナに相談をしてお與れ。」

そして百留（ルーブル）だけ與れた。彼女はそれを受取つた。けれど夜會服を誂へる段になつても彼女は誰とも相談しないで、ただ父親だけに話して自分の母親だつたらどんな衣裳で舞踏會に出たらうかと一生懸命に想像して見た。亡くなつた母親は自分も最新流行の衣裳を着けてゐたが、アーニャのことにも氣を配つて彼女をまるで人形のやうに優美に着附けるのであつた。その上に佛蘭西語の會話や、マズルカを立派に踊ることも教へ込んだ。（彼女は結婚する前五年間もさる高貴の家の家庭教師をしてゐたのであつた。）で、アーニャも母親と同樣に、古衣裳を見違へるやうに新しく仕立て直したり、手袋をベンジンで洗つたり、寶石の賃借りをすることなどを心得てゐたし、また矢張り母親と同じく、眼を器用に瞬いたり、舌たるい物言ひをしたり、優美な科（しな）を作つたり、もし必要とあれば恍惚りとなつたり、悲しげな眸をしたり、さては謎めいた眸を送ることなど、何でも自由自在に出來た。その上に彼女は父親からは、黑髮と黑い瞳と、神經過敏と、しよつ中おしやれをする癖を承け繼いだのであつた。

舞踏會に出發する半時間まへ、モデスト・アレクセーイチは妻の姿見の前でうまく頸の勳章を吊るすために、上衣もまだ着ずに彼女の部屋には入つて來た。すると忽ち妻の美しさとそのエーテルみたいに新鮮な衣裳の輝きに魂を飛ばせてしまつて、如何にも滿足らしく頰鬚に櫛を入れながら言つた。

「これは何と素晴らしいことになつたものだ！ それでこそ俺の令夫人だよ、アニュータ！」そして不意に莊重に聲を落しながら續けた。「この通り俺はお前を幸福にしてやつたな。だから今日はお前がこの俺を幸福にして與れなければならん。どうか頼むから今晩のうちに閣下夫人の御意を得て與れな。さうなつたら占めたものだ。夫人のお取なしで俺は祕書官首席になれるぞ。」

彼等は舞踏會へ出掛けた。そして金ぴかの門衞連が嚴めしく車寄せに控へてゐる貴族會館に着いた。玄關の廣間は帽子掛けや、毛皮の外套や、紐でくるのに忙しい從僕や、頸筋を思ひきつて露はにした

衣裳を着け、扇で透き間風を防いでゐる貴婦人たちで充滿してゐた。瓦斯燈と軍服の匂ひがした。

夫と腕を組みあはせて階段を昇つて行きながら、アーニャは樂の調べを聞き、無數の燭火の煌めきを浴びた自分の全身を大鏡のなかに認めた。すると忽ち彼女の心には歡喜が眼をさまし、いつかの月明の夜の中間驛で感じたのと同じ幸福の豫感が燃え上つて來た。彼女は自分がもはや娘ではなく令夫人なのだと感じ、そして知らず知らずに亡くなつた母親の形見である歩み振りや物腰を眞似ながら、さも自信ありげに誇らしげに進んで行つた。そして生れて始めて自分が富貴であり自由であることを感じるのであつた。夫が一緒に居ることさへ少しも氣詰りではなかつた。廣間の閾を跨ぐや否や、年の違ふ夫が傍に居ることが自分の引け目になる所が、それが却つて得も言はれぬ强烈な神秘の影を生み出して男心を妖しくそそるものであることを、本能的に見破るのであつた。

大廣間にはもう樂の音が漂ひ、舞踏がはじまつてゐた。官舍の生活に泥んでゐた身には、ここの燭火も色彩も音樂も物の響きもあまりに印象が烈しすぎた。アーニャは廣間を一瞥して思はずには居られなかつた、――「まあ、何て素晴しいんでせう！」その人々の群のなかには、以前に夜會やピクニックで顏見知りになつてゐた人々の姿も一ぺんに見分けがつくのであつた。士官たちや、教授たちや、辯護士や、官吏や、地主や、「閣下」や、アルトイノフや、それからまた思ひきつて頸筋を露はにした燦びやかな衣裳を着け、美しいのも醜いのも等しく既に貧者のために商賣を試みやうと、慈善バザアの賣店や接待所の中に得意げに坐り込んでゐる上流の貴婦人達の姿も見られた。

金總肩章(エポレット)を着けた偉大な體格の士官が、不意に地面から涌き出たやうに彼女の眼の前に現はれて、アーニャをワルツに誘つた。それは彼女がまだ女學生時代にスタロ・キエフスカヤ街の或る邸で紹介された男であつたが、今では名さへも思ひ出せなかつた。アーニャは忽ち夫の傍から舞ひ立つて行つた。すると彼女には自分がまるで帆船に乘つて荒海に漂ひながら岸邊に佇む夫をぐんぐんと離れて行くやうな氣がした。……

彼女は頰を燃やしながらワルツだの、ポルカだの、カドリイルだのを實に見事に踊りこなして行つた。男の手から手へと絕えず移りながら、樂の音と騷音に眩暈をさへ感じながら、のべつに露西亞語と佛蘭西語を混ぜあはせながら、甘へた物言ひをしながら、笑ひ聲を立てながら、彼女はもう夫のことも誰のことも何事も忘れ果ててゐた。彼女は自分が疑ひもなくあらゆる男達の賞嘆の的になつてゐるのを感じてゐた。固(もと)よりさうなければならぬことだと思つた。彼女は昂奮のあまり息をはづませて、苛立たしげに扇を掌に握り緊めながら激しい渴きを感じた。すると、ベンジンの臭ひのするよれよれの燕尾服に身を固めた父親のピョートル・レオンチイッチが寄つて來て、桃色の氷菓(アイスクリーム)の皿を差し出した。

「今晩のお前は女神さまのやうだよ」と彼は惚れ惚れと娘を眺めながら言つた、「お前を急いで嫁になぞ出すでなかつたと、しみじみ口惜しうてならんわ。……嫁に行つたとて何になつたな、え？　そりやお前が俺共の爲を思うて嫁つて與れたことはよう知つとるさ。……ぢやが」と彼はぶるぶる顫へる手で札束を引きずり出しながら續けた、「いま俺の所には家庭教師の禮金を貰うてある、今日ならばお前の亭主

に貸してやつてもよいぞ。」

彼女は父親に氷菓の皿を返した。すると忽ち誰やらに引き攫はれて遠ざかつて行つた。遠ざかりながら彼女は相手の男の肩越しに、父親が寄木の床の上を滑りながら一人の婦人を抱きかかへて、廣間を鳥のやうに舞ふ姿をちらと認めた。

「何て優しいお父さんだらう、白面（しらふ）のときには」と彼女は考へた。

やがてマズルカになつて、彼女はまたあの偉大な士官と組んだ。彼は態度が重々しいばかりでなく、その身體までが軍服を着た獸の屍のやうに重かつた。彼は肩を胸ごと左右に搖すぶりながら、やつとの事で歩を踏んでゐた。もう踊るのが厭でならなかつたのであつた。その彼のまはりを、彼女の匂やかな胸や露はな頸筋が挑むやうに絡はり舞つてゐた。彼女の眼は負けぬ氣で燃え立ち、その身體の動きは熱情に火照（ほて）つてゐた。彼は段々に白けた氣持になつて來て、やがて彼女の方へまるで王様のやうに寛仁な様子で兩手を差し伸べた。

「ブラヴォ、ブラヴォ！」と周圍の人達が叫んだ。

そのうちにこの偉大な士官も次第に激情にそそられ始めた。彼は生き生きと昂奮の色を見せながら、もう全く彼女の魅力に征服されてしまひ、向きになつて輕々とまるで青年のやうな足どりで踊りはじめた。すると彼女の方では鳥渡肩を搖すつたきりで、さながら自分は女王様であり相手は奴隷に過ぎないと言つた風な、狡るい眼眸になるのであつた。今ではもう大廣間ぢうの人の眼がこの二人に注がれて、

他の人達は茫然と自失してただ羨望の眼で二人を眺めてゐるやうに見えた。

やがて一曲が終り、堂々たる士官が彼女に禮を述べかけたときに、周圍の人々は遽かに飛び退つて、男達などは滑稽なほどびよんと身體を眞直に立て兩手を兩脇につけた。……それは閣下が燕尾服の胸間に星を二つも燦めかせながら、彼女の方へ歩み寄つて來たのであつた。確かに閣下はほかならぬアーニヤを眼ざして進んで行くのであつた。何故なら彼は眞直ぐに彼女を凝視し、蜜のやうな微笑を浮べ、その上に彼が可愛いい女を見るときに必ずやるあの舌嘗めずりをまでしてゐるではないか。

「いや、お目にかかれて甚だ欣幸ですぢや」と彼ははじめた、「ぢやが、あんたの御良人は怪しからん人物ですな。この様な寶玉を今の今まで隱匿して居つた廉で、俺（わし）は禁錮を申渡さなければなりますまい。いや、實は家内に頼まれたのぢやが……」と彼はアーニャに胸を貸しながら續けた、「まあ一つ應援をして下さい。……うむ、……どうでも美人投票をやつて一等賞をあんたに捧げなけりやなるまい……亞米利加でやるやうにな……ふむ、……矢張り亞米利加人どもはなかなかに……いや、俺の家内があんたを待ち焦れて居りますぢや。」

彼女は賣店の方へ引つ張つて行かれた。そこには一人の老婦人が坐つてゐたが、顔が頗る下脹れに失して居るため、何だか口に石でも含んでゐるのではないかと思はれた。

「ねえ、御加勢下さいましな」老婦人は鼻聲で唄ふやうに言つた、「綺麗な方々はみんな慈善バザアの方で働いてお居でなのに、あなただけ遊んでいらつしやる法はありませんわ。なぜ加勢をして下さいませ

んの？」

彼女は賣店をアーニャに讓り渡して行つてしまつた。で、アーニャは銀のサモワルとお茶碗の傍に坐つた。すると忽ち活潑な商業が開始された。彼女はお茶一杯について一留以上も請求したのに、例の偉大な士官は三杯も飲んだ。眼の飛び出た富豪のアルトイノフも喘息でぜいぜい言ひながらやつて來た。その服裝はもう、彼女が夏の時に見た異樣な姿ではなくて、みんなと同じに燕尾服を着用してゐた。寸時もアーニャから眼を離さずに彼は三鞭酒を一杯飲んで百留札を投げ出した。やがてお茶を一杯飲みに來て、また百留札を拂つた。それも絶えず喘息に苦しみながら一言も物を言はずにであつた。……アーニャはお客を呼び寄せてはお金を取つた。もうその時には、自分の微笑や眼眸がこの男達の心に呼び醒すものは、大きな滿悅以外の何物でもないことを彼女は確信してしまつてゐた。音樂や舞踏や崇拜者たちに取り卷かれながら、この樣な騷がしい燦然とした高笑ひに滿ちた生活を送るためにのみ自分が創造されたのだと悟つた。そして昔、自分を今にも壓し潰さんばかりの勢で眼の前に押し寄せて來た恐怖の力などは、今では可笑しくてならなかつた。彼女にはもう誰一人怖ろしくはなかつた。ただ心殘りと言へば、この大成功を一緒になつて喜んで吳れる母親の居ない事だけであつた。

もう酒が廻つて蒼い顔になつたピョートル・レオンチイッチが、それでもまだ確り（しつか）した足取りで賣店にやつて來て、コニャックを一杯賴んだ。アーニャは父親が何か飛んでもない事を言ひ出しはしまいかと思つて顔を赧らめた。（それ所か、こんな貧乏相な平凡な父親を持つてゐる事までが恥しくてならなかつたのである。）けれど彼は飲み乾すと、一言も物を言はずに例の札束から十留札を一枚投げ出して、そのまま謹嚴さうに歩み去つた。それから暫らくして後、彼女は父親が大圓舞（グラン・ロン）に加はつて踊つてゐるのを見た。その時はもうふらふらになつてゐて、相手の迷惑さうな樣子も構はず何やら大聲を出してゐた。するとアーニャは、父親が三年前に矢張り舞踏會でこの樣にふらふらになつて何やら叫んでゐた擧句の果てには、一人の警部のお世話になつて寢床迄擔ぎ込んで貰ひ、翌る日になると校長から免職するぞと散々に油を絞られたことを思ひ出した。だがこれは何といふ場外れな回想なのであらう！

賣店のサモワルに火が消えて、くたくたになつた美しい慈善者達が收入を例の口に石を含んだ老婦人に渡したとき、アルトイノフはアーニャの手をとつて廣間へ連れて行つた。そこには慈善バザアで働いた人達だけの夜食の仕度が出來てゐた。食事をしてゐたのはせいぜい二十人位なものだつたが、ひどく騷々しかつた。閣下が乾杯の辭を述べてゐた。

「本日のバザアの對象でありました所の貧しき食卓の賑はひの爲に、今ここに此の壯麗なる食堂に於て皆樣と杯を擧げますことは、甚だ其所を得たものと考へるのであります。」

旅團長も乾杯の辭を述べた。

「砲兵隊の砲と雖も三舍を避くるであらう所の威力のために！」

そして皆手を伸ばして婦人たちと盃を打ち合はせた。とても、とても陽氣であつた。

アーニャが取卷き連中に送られて歸宅したときはもうすつかり明るくなつてゐて、料理女たちは市場

へ出掛けてゐた。醉つて、はしやいで、新らしい感動で胸を一ぱいにして、疲れ切つて、――彼女は衣裳を脫ぐとすぐ寢床へもぐり込み、そのままぐつすり寢入つてしまつた。……

晝間の二時になると小間使が彼女を起して、アルトイノフ樣が御訪問で御座いますと取次いだ。彼女は大急ぎで着物を着て客間へ出て行つた。アルトイノフが歸つて暫くすると、閣下が昨夜の慈善バザア賛助のお禮にやつて來た。例の蜜のやうな眼附で彼女を眺めたり舌舐めずりをしたりしながら、彼女の手に接吻をして、またお邪魔に上りますと述べて辭去された。その後でも彼女は呆れたやうな恍惚り(うつと)としたやうな風で客間の眞中に立ち盡して、この樣な驚嘆すべき生活の變化が何故かう一ぺんにやつて來たのか、とても信じられないやうな顏をしてゐた。

その時、夫のモデスト・アレクセーイチがは入つて來た。……その彼までが、平生高位顯官の前に出ると必ず持ち出すことに決めてゐるあの媚びるやうな、甘い奴隷的崇敬の表情をして彼女の前に立つのであつた。最早何を言つてやつても別條ないことの確信が出來た彼女は、滿足と怨恨と輕侮の念を一つに籠めて一語一語はつきりと切り離しながら言つた。

「此處にいらしつては厭！　お馬鹿さん。」

その後のアーニャは每日每晚ピクニックだの散步だの芝居だのと引つ張り出されるので、一日として身體の明いた日はなかつた。歸宅はいつも曉方近くになつた。彼女はそのまま客間の床に臥し倒れてしまふのであつた。そしてこの事を後になつてから、私花の下で夢を見ましたのよと吹聽した。勿論お金

は澤山に要るのだつたが、今ではもうモデスト・アレクセーイチがちつとも怖くないので、夫の金を遠慮なく撒き散した。それも別に賴んだり願つたりする譯ではなく、ただ勘定書をつき出したり、または「この者に二〇〇留お渡しの事」とか「即刻一〇〇留お拂ひの事」とか言ふ書付を使に持たせてやるだけであつた。

復活祭が來るとモデスト・アレクセーイチは聖アンナ二等賞を貰つた。彼がお禮を申上げに行くと、閣下は新聞を傍に下ろし安樂椅子にふかぶかと坐り直した。

「これで君にはアンナが三つになつた譯ぢやね」と彼は自分の白い手と櫻色の爪を眺めながら言つた、「一つは釦の孔に吊つてあるし、あとの二つは頸つ玉にな。」

モデスト・アレクセーイチは不謹愼な笑ひ聲を立てぬ用心に指を二本唇に當てがひながら答へた。

「は、そして只今は小ヴラヂーミルの出生をひたすらに待つばかりで御座います。畏れながら閣下に名付け親を願ひ上げたく。……」

彼は實はヴラヂーミル四等賞のことを匂はしたのであつた。そして早くも心の中で、この奇策縱橫の巧妙な洒落を後で方々に吹聽してやらうと思ひめぐらしてゐた。彼はかう言つた巧みなことをもつと何か並べたかつたが、その時閣下は再び新聞に顏を埋めて、頭を縱に振つてしまつた。……

アーニャの方は二六時中トロイカを乘り廻して、アルトイノフと一緒に狩獵に出掛けたり、一幕物に出演したり、晚餐に招かれたり、ますます家を明けることが多くなつて行つた。二人は夕食の卓をさへ

共にすることがなかつた。

ピョートル・レオンチイッチは愈々酒量が増して來た。金は一文もないし、あの手風琴はとつくの昔に借金の穴埋めに賣り拂はれてゐた。少年達は父親を決して一人では外出させなかつた。行倒れにならぬやうにと、彼等はいつも父親の後をついて廻つた。そして、馬丁が飛ぶやうに側を走り、馭者の代りにアルトイノフが馭者臺に坐つた二頭曳に乘つて、アーニャがスタロ・キエフスカヤ街を疾走して來るのに出會ふと、ピョートル・レオンチイッチは絹禮帽（シルクハット）を脱いで何か大聲を上げさうにするのであつた。そしてペーチヤとアンドリューシャが父親の手を引つ張りながら、お祈りのやうに言ふのであつた。

「駄目ですよ、お父さん。……お父さん、もう澤山ですつたら。……」

アリアドナ

オデッサからセバストポールへ向ふ汽船の甲板で、圓い小さな顎鬚を蓄へた、顔立ちの整つた一人の紳士が煙草を喫ひに私の傍へやつて來て話しかけた。

「あの甲板室（デッキ・キャビン）のところに坐つてゐる獨逸人たちを御覽ですか？　どうも獨逸人や英吉利人が寄ると、話と言へば大抵羊毛の相場とか、收穫のことか、さもなければ自分たちの身の上話にきまつてゐるやうですが。所でわれわれ露西亞人が寄ると、ただ女の事とそれから高尚な議論しかしないのは、何う言ふ譯でせう。それもまあ主に、女の話ですがね。」

この紳士とは旣に面識があつた。その前夜、外國から歸つて來る汽車も同じであつたし、ヴォロチスクでは、稅關の檢査を受けるとき、彼が婦人服の一ぱい詰つた旅行鞄や行李の山の前に、道連れの一人の婦人と一緒に立つてゐるのを見たし、また何か絹の裂れ端で關稅を拂はなければならないのを、道連れの婦人が盛んに言ひ抗つて、仕舞ひには誰とかに訴へてやるからと敦圉（いきま）いたとき、彼が傍でどんなに當惑して、はらはらしながら眺めてゐたかも知つてゐた。それからオデッサへの途中では、彼が婦人用の仕切車（コンパートメント）へ、お菓子だのオレンヂだのを運んで行くのも見た。

空氣はやや濕つぽく、少し船が搖れるので、婦人達は船室に引つ籠つてゐた。圓髯の紳士は私と並んで腰を下して、語り繼いだ。

「左樣、露西亞人が寄ると、高尚な問題と女の話しかしませんね。私共は大いに知識的で尊大に構へてゐるため、話といへば眞理一點張りで、高尚な問題しか論じられないのでせうね。露西亞の俳優は巫山

戲けることを知らず、ヴォドヴィルをまで深刻に演じるんです。われわれにしても其の通りで、何か詰らぬ話題に遭遇しても、必らず最高の見地からでなければ論ずるといふことをしません。これはつまり、濶達さとか、純朴さとか、天眞爛熳さの缺けて居るせゐですね。また、女のことを吾々がよく話すのは、つまり吾々が女性に不滿を抱いてゐるからだと、私には思へます。吾々は女を餘りに理想的に見過ぎるため、從つてとても實行出來ぬほどの過大な要求をするのです。所が吾々の受け取るものはことごとに期待に反するものなので、その結果が不滿となり、失望となり、苦悶となるのです。それに、苦痛を抱く者に限つて、得てその苦痛を口にしたがるものですからね。こんな話を致して、御迷惑ではないでせうか？」

「いや、少しもそんなことは。」

「では、ひとつお近附の御挨拶を致させていただきます。」と相手はちよつと腰を上げながら言つた、「イヷン・イリイチ・シヤモーヒンと申します。モスクワで地主のやうな事を致して居ります。……御尊名はよく存じ上げて居ります。」

彼は坐り直して、柔和な純朴な眸で私の顏を見詰めながら續けた。

「女性についての斯樣な涯（はて）しのない議論は、マックス・ノルダウのやうな凡庸な哲學者にかかつたら、色情狂の一種だとでも說明することでせう。それとも、吾々が農奴を所有してゐるからだとか何とか申すかも知れませんが、私は全く別の意見を持つて居ります。繰返して申しますが、吾々が女性に不滿な

のは　つまり吾々が理想家であるためです。吾々は、吾々や吾々の子孫を生んで具れる所の女性が、吾吾よりも、いや世界の何者よりも高尚であらんことを欲します。吾々は青年の頃には、愛するもの總てを詩化し崇拜するものです。愛と幸福とは、吾々にあつては同義語です。吾々の露西亞では、戀愛によらぬ結婚を侮蔑し、肉情を嘲笑し、唾棄すべきものとさへしてゐます。そして、最大の人氣を博する小說や物語と言へば、どれも必らず、女性は美であり、詩的であり、高尚なものと決つてゐます。そして露西亞の人間が由來ラファエルの聖母像(マドンナ)に夢中になつたり、婦人解放論に熱中したりするのも、決して附け燒刃でないことだけは斷言出來ます。けれど、ここに困つた事には、吾々が結婚するか、或ひは女性と關係を結ぶ段になると、兎角するうちに二三年は過ぎて行きますが、すると忽ち吾々は欺かれたやうに感じ、幻滅を味つてしまひます。またほかの女性と一緒になります。そして又もや幻滅です。又もや身の毛のよだつ思ひです。とどの詰りが、女性といふものは嘘つきで、淺薄で、虛榮で、偏頗で、無知で、無慈悲なもの、——一口に申せば、吾々男性よりも高尚な所か、實にお話にならぬ程低劣極まるものと、思ひ込むやうになります。そして、吾々心の滿されぬ者、欺かれた者にとつては、そこらへ出掛けて、どんなに手酷い目に逢つたか愚痴を滾(こぼ)して廻るほかは何もない譯です。」

シヤモーヒンが話してゐる間に、私は、露西亞語とそれから四圍の露西亞風の情景が、大いに彼を樂しませてゐるのを見て取つた。恐らくそれは、外國にゐて強い鄕愁を味つて來たからであらう。露西亞人を褒め立てて、無類の理想家だとまで禮讚しながら、一方外國人の惡口を言はない所が、私には好感

が持てた。同時にまた、彼が心中少からぬ不平を抱いてゐて、女性論などより、實は大いに自分自身の事が語りたいらしいことも氣どられたので、この調子では先づ何か懺悔みたいな、長物語を聽かさなければなるまいと覺悟をきめた。

やがて私達が葡萄酒を一本持つて來させて、お互に一杯飲み乾した時、彼は案の定次のやうな話を始めた。

「ウエルトマンの何とか云ふ小說に、一人が『つまりそれだけの話なんだね』と言ふと、もう一人が『いや、これが話なんぢやない、話には入るほんの序の口さ』と言ひ返すのがありましたね。私がこれ迄に申したことも、矢張りほんの序の口なので、實は自分の最近のロマンスがお話ししたいのです。またこんなことを伺つて失禮ですが、もしや御迷惑ぢやないでせうか？」

私が迷惑ではないと答へると、彼は話し續けた。——

お話の場面はモスクワ縣の、ずつと北寄りの或る郡です。是非申し上げて置きたいのは、そこが素晴しい自然に惠まれた土地だといふ事です。私共の莊園はとある急流の高い岸にあります。俗に申す凹凸地で、夜晝なく水のせせらぎがしてゐます。まあ御想像下さい、廣々した古い庭園や、可愛らしい花壇や、蜜蜂の家や、野菜畑や、下には川が流れ、その岸に葉を繁らせた柳の樹は露が一ぱいに降りると、まるで灰色に色が變つたやうにぼおつと艶消しになつて見えます。もう一方の側には牧場があつて、その牧場の向ふの丘陵には底知れぬ松林が暗く連つてゐます。松林には紅茸が見え隱れに香を放ち、密林

の奥には大きな鹿が棲んでゐるのです。私は死んで、棺のなかに抛り込まれた後でも、太陽が痛いほど眼に射し込む朝まだきや、または、庭のうちそとに小夜鶯や水鷄の鳴きかはし、村からは手風琴の哀調が田畠を超えて聞え、家の中のピヤノの響き、川のせせらぎ、――まあ一口に申せば、聽きながらつい泣き出すか大聲に歌ひ出したくなる、この樣な音樂に滿ちた美しい春の夕暮を、きつと夢に見るに相違ありません。

私共の耕地は大して廣くもありませんが、牧場の上り高が森林と併せて、年に二千留位（ルーブル）にはなります。私は一人息子で、父も私も內輪な人間ですから、この金高に父の恩給を加へれば別に不足はないのでした。大學を出て三年ほどは、私はこの田舍に引つ込んで、莊園の管理をしたり、その中に何かに選擧して呉れないかと心待ちにしたりして暮して居たのですが、一番肝腎なことは、或る非常に美しい、恍惚りとなるやうな娘に私が熱烈な戀をしてしまつた事です。

その娘といふのは、私共の近隣のコトローヴイチと申す零落した地主の妹でした。この地主は、その領內に鳳梨（アナナス）や、美事な桃や、避雷針や、それから中庭には噴水まで持つてゐるかと思ふと、財布には一文もないといふ男でした。仕事といつたら何一つしも、出來もしない、まあ茹でた蕪みたいにぐにやぐにやした人間なのです。類似療法（ホメオパテイ）で百姓達を療治したり、降神術に凝つたりしてゐました。その癖、神經の細かい柔和な男で、馬鹿ではないのですが、私としては、靈魂と話をしたり靈氣療法で百姓婆さんを療治したりするやうな人間に、好意は持てません。一つには、知識的に解放されてゐない人間といふ

ものは概して解らず屋でして、彼等と話すのは非常に困難ですし、二つには、彼等は愛といふことを知らず、女性にも沒交渉で、かうした不可思議千萬な性質は吾々敏感な人間にとつて甚だ不愉快なものですからね。彼の外見も私は嫌ひでした。彼は頭の小さい、小さなきらきらと光る眼と白い浮腫（むく）んだやうな指をもつた、皮膚の蒼白い、脊の高い肥つた男でした。彼のは握手ぢやなくて、人の手を捏ね廻すのです。そして始終何かしら詫びを言つてゐました。人に物を賴むときにも「御免下さい」、人に物をやるときにも「御免下さい」なのです。

今度はその妹の事ですが、彼女は全く別のオペラの登場人物なのです。申し上げて置きますが、私は幼年時代や少年時代にはコトローヴイチと知合ひではありませんでした。それは私の父がNで教授を勤めてゐた關係で、私達は長い間地方へ行つて居りましたからです。ですから、私が彼等と知合ひになつた時には、娘はもう二十二で、もうとつくに學校は出て、彼女を交際社會に連れ出して呉れた金持の伯母さんと一緒に、二三年モスクワで暮して來た後のことでした。引き合はされて、はじめて言葉を交はした時、先づ何よりも私の心を擊つたのは、彼女の珍らしい美しい名です。それは、アリアドナと云ふのでした。實に彼女に適（ふさ）はしい名でした。髮は栗色で、とても瘠せぎすな、とても華奢な、嫋やかな、それでゐて調和の取れた、非常に物腰の淑やかな娘で、典雅な、極度に氣品の具はつた顏立をしてゐました。彼女の眼は、やはりきらきら光る眼でしたが、兄のがまるで氷砂糖みたいに冷やかな甘つたるい光なのとは反對に、彼女の眸には青春の美と矜持が光を放つてゐました。知合ひになつた其の日に、私

はすつかり征服されてしまひました。ほかにどうも仕樣がなかつたのです。この第一印象は、今日なほありありとその幻像を殘してゐるほど强烈なものでした。私は今になつても、自然かあの娘を創造したとき何か宏大な驚嘆すべき目論見を抱いてゐたのではあるまいかと、よく考へて見るのです。

アリアドナの聲や、その步き振りや、帽子や、それればかりでなく彼女がよく白楊魚（かはぎす）を釣りに行つて川岸の砂上に殘す小さな足痕までが、私の胸に生活のよろこびや烈しい渴望を呼び起すのでした。私は彼女の顏や容姿の愛らしさから、その心の姿を判じて見るのでした。そしてアリアドナのちよつとした言葉の端、ちよつとした微笑にも心を飛ばせてしまつた私は、どうしても彼女の心の高尙さを想像しない譯には行きませんでした。彼女は人懷こく、お話が好きで、快活で、さつぱりした娘でした。詩のやうに神を信仰し、死についても詩的な考へ方をしてゐました。心のなかにさまざまの豐富な陰影（ニユアンス）を持つてゐるので、そのため彼女の缺點でさへ何か特異な可愛らしい性質に見えるのでした。例へばです、彼女は新しい馬が欲しいとします。だがお金はありません。ねえ、これは實に困つた事ではありませんか。何かを賣るか抵當に入れればいい譯ですが、管理人が若し何にも賣ることも抵當に入れることもならぬと頑張つたら、傍屋（はなれ）の亞鉛（トダン）屋根を剝がして工場へ拂ひ下げるか、收獲の繁忙期なのに農馬を市場へ引つ張つて行つて、二束三文の値段で賣り拂はなければなりません。かうした抑制のない欲望のために、彼女は時々莊園ぢうを絕望の底に陷れるのでしたが、彼女がそれをとても美妙な言ひ廻しで說明するので、結局はまるで女神樣かケーザルの妻みたいな具合に、我まま一杯に振舞へる事になつたのでした。

私の戀は顏色に出るほどでしたので、ぢきにみんなに、父にも近隣の者にも、百姓たちにまで知れ渡つてしまひました。みんなは私に同情して異れました。私が小作人に火酒（ヴオトカ）を振舞つてやつたりすると、彼等はお辭儀をしてから申すのです。――

「コトローヴイチのお孃樣がお貰へになりますやうに。」

アリアドナも、私が戀してゐることは知つてゐました。彼女は馬に乘つたり二輪馬車に乘つたりして、よく私共を訪ねて來て、時によるとまる一日私や父と遊んで行くこともありました。老父とは大變仲好しになつて、父は自分の氣慰みにしてゐた自轉車の乘り方を、彼女に敎へたりしました。こんなことを憶えてゐます、――或る夕方、二人が自轉車で散步に出やうとしたとき、私は彼女が乘るのを手傳つてやりましたが、そのときの彼女の愛らしさと言つたら、ちよつとその身體に手が觸つただけで、もう火傷したやうな氣がしましたつけ。それから或る時などは、父と彼女が美事ないい調子で、並び合つて甃石路を走らせてゐると、管理人を乘せて向ふからやつて來た黑毛の馬が、出逢ひ頭に道傍に跳ね退きましたが、それもやはり、馬が彼女の美しさに擊たれたからだらうと、私には思はれるのでした。私の思ひや崇拜の氣持は先方にも通じて、彼女の心をうごかしました。彼女もやはり、私のやうに無我夢中になつて、私に同じ愛をむくいたいと思ひ詰めるやうになりました。ねえ、實に詩的ぢやありませんか。

けれど彼女は、私のやうに本氣になつて戀をすることが出來ませんでした。といふのは、彼女の性質が冷めたくて、もうかなり無邪氣さを失つてゐたからです。彼女の心にはもう一人の惡魔が棲んでゐて、

それが夜晝となく、お前は美人だ、まるで女神樣のやうだと囁いてゐたのです。彼女の方でも、自分が何のために創造され、何のために生命を與へられたのか、はつきりした考へはないので、ただ自分の未來に大きな富や高い身分を思ひ描いて、舞踏會だの、競馬だの、金ぴかのお仕着せだの、贅を盡した客間だの、自分のサロンだの、そこへ群り寄つて來る伯爵や公爵、大使、さては有名な畫家や俳優などが、みんな自分を崇拜し、自分の美貌や裝ひに恍惚となる、と言ふやうなことばかり夢みてゐたのです。……

このやうに、吾が身の榮達を渴望して、絕えずそれ一つだけを思ひ詰めてゐると、人間はだんだん冷たくなるものですが、アリアドナもそんな風で、私にも自然にも音樂にも冷やかでした。さうかうしてゐる中に時は遠慮なく經つて行くのに、大使達は一向に登場しません。アリアドナは相變らず降神術の兄さんと一緒に暮してゐましたが、家運は傾くばかりで、衣裳や帽子を買ふ代もなくなつて、自分の貧乏を隱すために色々と嘘や逃口上を並べなければならなくなつて來ました。

まるでお誂へ向きのやうな話ですが、彼女がまだモスクワの伯母さんの所で暮してゐたとき、マクトウエフとかいふ公爵が、彼女に言ひ寄つたことがあつたのです。この男は金持でしたが、お話にならぬ詰らない人間なので、彼女は一言のもとに撥ねつけたのでした。それが今になつて見ると、何故撥ねつけたのか知らと、後悔の蟲に苛まれ出しました。丁度百姓が、油蟲の浮いたクヷス酒を忌々しさうに顏を脹らして睨みながら、それでも矢張り飮んでしまふやうに、彼女も公爵のことを思ひ出すと極つて氣むづかし氣に眉を顰めながら、それでも矢張り私に向つてかう言ふのでした、——

「あなたはどう仰言るか知れないけど、爵位といふものには、何となく言葉に云へないいい所があるものね。……」

彼女は爵位や派手な身分を夢想してゐる癖に、同時に私も離したくはなかつたのでした。よしんば大使達を夢想してゐるにせよ、人間の心は石ではないのですから、青春を惜む氣持も出やうといふものです。アリアドナは一生懸命に戀をしやうとして、戀をした振りをしたり、また私に戀の誓ひをしたりさへしました。ですが私は、敏感な神經質な男です。本當に戀されてゐるのなら、遠く離れてゐても、誓ひの言葉はなくとも、私はそれを感じます。で、彼女の場合には、私はまともに吹きつけて來る冷たい風を感じました。彼女が戀を語るのを聽いてゐると、まるで金物細工の鶯が歌つてゐるやうな氣がしました。アリアドナも自分に火藥の足りないことは知つてゐて、とても惱んでゐました。彼女の泣くのを見たのも一再ではありません。ある時などは、どうでせう、いきなり私に抱きついて接吻するのです。それは夕暮の川岸でしたが、私はその眼附から、彼女が私を愛してゐるのでなくて、ただ自分自身を驗して見たいばつかりに抱きついたに過ぎないことを見て取りました。さうして見たらどうなるか知ら、といふ好奇心なのですね。私はとても厭な氣持になりました。私は彼女の手をとつて、がつかりして言ひました。

「そんな愛のない愛撫は、僕には堪りませんよ。」

「あなたは變な方ね。」

と彼女は悲しさうに言つて、向ふへ行つてしまひました。

さてかうして二年も經つて、私が彼女と結婚でもしたのなら、このお話もそれでお終ひと言ふ譯でしたらう。ところが神樣には、私達のロマンスを別の趣向に仕組む方が御都合がよかつたものと見えます。で、私達の地平線に新しい人物が現はれました。アリアドナの兄さんの所に、ミハイル・イヴーヌイチ・ルブコフといふ彼の大學時代の友達が、暫く滯在することになつたのです。愛敬のある男なので、馭者や從僕の間では「面白え旦那」だといふ評判でした。中脊の、痩せ細つた、頭の禿げた男で、顏は善良な市民によくある型で、味はないが一寸見られる蒼白い顏附、それに手入れの行屆いた硬い口髭を蓄へ、頸の上には鵞鳥のやうな皮膚に何やらぶつぶつと吹出物があつて、大きな結喉をしてゐました。巾の廣い黒い打紐のついた鼻眼鏡をいつも掛けてゐました。それから舌縺れがして、ラ行の發音出來ないので、例へば「何々する」といふのを「何々すぶ」と話すのでした。彼はしよつ中陽氣で、何でもかでも一人で可笑しがつてゐました。二十の時に飛んでもない馬鹿げた結婚をして、持參金にモスクワのヂェヴィチイ邊に家作を二軒貰ひましたが、その修繕をしたり、風呂場を建增ししたりしてゐるうちに破產に頻したので、今では細君と子供四人が「東洋館」に間借りして、貧乏暮しをしてゐる譯ですが、彼はとにかく扶養の義務があるので、と云ふのも彼には可笑しいのでした。彼は三十六で、細君はもう四十二でしたが、これも彼には可笑しいのです。母親といふのは貴族氣取りの大風な自惚れ屋で、嫁をてんで相手にせず自分は犬や猫の一個聯隊を引き連れて別居して居ましたが、これにも月に七十五留の仕送りを

せねばならず、それに自分が食道樂で、晝食はスラヴイヤンスキー・バザール、夕食はエルミタージュと云ふ調子ですから、自然とてもお金が要るところへ、伯父といふのが年に二千留しか呉れないので、とても足りやう筈のありやうはなく、で彼は一日ぢう、諺通り「舌を垂らして」モスクワぢうを駈け廻つて、金策に奔走するのですが、それも彼にはやはり可笑しいのです。

彼がコトローヴイチの所へやつて來たのは、自然の懷に抱かれて、家庭生活の息抜きをするためだと、自分で言つてゐました。夕食にも、晝食にも、散歩のときにも、彼は私達に自分の細君のことや、母親のことや、借金取のことや、執達吏のことを話して、彼等を嘲笑するのでした。自分のことも嘲笑して、借金をする才能のお蔭で澤山の愉快な知合ひが出來たと斷言しました。彼がしよつちう笑つてばかり居るので、私達まで笑ひ出しました。彼が居るお蔭で、私達の生活振りまで變つて來ました。私は魚釣りとか、夕暮の散歩とか、茸狩りとか、どつちかと云ふと靜かな、まあ田園詩風な遊びの方が好きだつたのですが、ルブコフはピクニツクとか花火とか、獵犬を引つ張つて狩に行くとか、そんな方が好きでした。彼は週に三度もピクニツクを企てるのでしたが、するとアリアドナはとても眞面目臭つた、神來の聲でも聞いたやうな顏附をして、紙片れに牡蠣だとか三鞭酒だとかお菓子だとか書き並べて、私をモスクワへ派遣するのでした。勿論、私が金を持つてゐやうがゐまいが、そんな事は訊きもしません。さてピクニツクに行くと、乾盃です、高聲です、そしてまたもや、細君がどんなにお婆さんか、母親の所にどんなぶくぶくした狆ころがゐるか、借金取は如何に愛すべき人達であるか、などといふとても嬉し

い話が始まるのでした。……

ルブコフは自然が好きでしたが、それもずつとこれ迄に見慣れて來たものとしてで、本質的に言へば彼自身などよりは比較にならぬほど低級で、ただ自分に快樂を與へるために創造されたものと看做してゐました。とても素晴しい風景の前に立ちどまるやうな時にも、「ここでお茶でも飲んだらさぞいいだらう」と、そんな風に言ふのです。或る日、アリアドナが日傘（パラソル）をさして向ふから來るのを見て、彼はその方を顎でしやくつて言ひました。

「あの人は瘠せてゐますね。そこが氣に入りましたよ。私はどうも肥つた女は嫌ひでね。」

この言葉は私の胸にこたへました。私は彼に、私の前では女のことをそんな風に言つて呉れるなと賴みました。彼はきよとんとして私を見詰めながら、言ひました。

「私が瘠せたのが好きで、肥つたのは嫌ひだと言つて、それが惡いんでせうかね。」

私は何とも答へませんでした。その後何日でしたか、とても上機嫌で、ほろ醉ひ加減のときに、彼は言ひました。

「私は、アリアドナ・グリゴリエヴナがあなたに思召しがあることを、ちやんと知つてますよ。あなたが愚圖愚圖して居られるのが、とんと合點が行きませんね。」

これを聞くと私は厭な氣持になつたので、いささか度を失ひながら、自分の戀愛觀や女性觀を述べてやりました。

「私には解りませんね」と彼は嘆息しました、「私の考へでは、女は女であり、男は男なんです。よしんばあなたの仰言るやうに、アリアドナ・グリゴリエヴナは詩的で高尚な女だとしても、と言つてあの人が自然の法則の外にあつていいと言ふことにはなりませんよ。あなただつて、もうあの人が夫か戀人の入用な年頃になつて居ることはお解りでせう。私だつて女性を尊敬することにかけては、あなたに引けはとりません。ただ、或る種の關係が詩を追ひ出してしまふなどとは考へませんね。詩は依然として詩であり、戀人は依然として戀人です。丁度農村經濟と同じことですよ。自然の美しさは依然として美しさであり、森や畠の上り高は依然として上り高ですからね。」

私とアリアドナが白楊魚（かはぎす）を釣つてゐると、ルブコフはすぐ傍の砂地に寢轉んで、私をからかつたり、生きる法を講義したりするのでした。

「ねえ先生、あなたがロマンス無しで生きて行けるのを見ると、全く不思議でなりませんね」と言ふのです、「あなたは若いし、美男子だし、なかなか乙だ。一口に言へば何處へ出しても恥しくない人なのに、坊さん暮しをしてるんですからね。ああ、二十八の老人なんて全く我慢がなりませんよ。私はあなたより十も年上なのに、一體どつちが若いでせう。アリアドナ・グリゴリエヴナ、どつちです？」

「勿論、あなたよ。」とアリアドナが答へました。

私達が默り込んで浮子（うき）ばかりに氣を取られてゐるのに厭々した彼が、家に歸つてしまふと、彼女は腹立たしげに私を眺めながら、かう言ふのでした。

「本當にあなたは、男ぢやなくて、まるでお粥みたいだわ。男つて言ふものは、夢中になつたり、氣狂みたいになつたり、過ちをしたり、苦しんだりするものだわ。あなたが無作法をしたり圖々しい事をしても女は許すけど、小利口なのは許さないものよ。」

彼女は本氣になつて憤つて、言ひ續けました。

「物に成功するには、はきはきと大膽にやらなければ駄目よ。ルブコフはあなたほど綺麗ぢやないけど、ずつと面白味があつて、何時も女に成功するでせうよ。と言ふのも、つまりあの人があなたみたいぢやなく、男だからよ。……」

その聲には何となく薄情な響が籠つてゐました。

或る日、晩餐のとき、彼女は私の方は向かずに、もし自分が男だつたらこんな田舍にくすぶつては居ないで、方々旅行して廻つて、冬などは何處か外國で、例へば伊太利で暮したい、と言ひ出しました。ああ、伊太利！　そこへ私の父が、みすみす火に油を注すことになるとも知らず、のべつ幕なしに伊太利のことを、——どんなに素晴しい所で、如何に秀麗な大自然に惠まれ、如何なる博物館があるかなど、饒舌つたものです。アリアドナの心には急に、伊太利へ行つて見たいといふ欲望が燃えはじめました。「行くんだわ！」と、眼をきらきら輝やかして、拳でとんと卓を叩きさへしました。

それからは來る日も來る日も、伊太利の話が始まりました。伊太利へ行つたらどんなにいいだらう、ああ、伊太利、おお伊太利、と言つた調子です。そしてアリアドナが肩越にちらと私を眺める時の冷め

たい片意地な表情から、彼女がもう伊太利を、そのサロンを、高貴な外國人や漫遊客たちを、すつかり征服し盡したやうに空想してゐて、今ではもう彼女を押し止めることは出來ないと私は悟りました。私はもう少し待つて見てはどうか、二年ほど出發を延期してはどうかと忠告して見たのですが、彼女はさも厭さうに眉を顰めて言ふのでした。

「あなたは分別臭くて、まるで百姓婆さんみたいね。」

ルブコフはと云ふと、出發に贊成なのでした。費用なんかは極く僅かで濟むし、自分も家庭生活の息拔きをするために、伊太利へなら喜んで出掛けやうと言ふのでした。私は、實際のところ、まるで中學生みたいな純朴な態度をとつてゐました。嫉妬どころではなく、何か知ら怖ろしい異常な事が持ち上るに相違ないといふ豫感がしたので、出來る限りは彼等を二人きりにして置くまいと骨を折りました。すると二人は一緒になつて私をからかふのです。例へば、私が部屋へは入つて行くと、二人はたつた今接吻したばかりのやうな素振りをして見せたりするのです。

所が、どうでせう、或る朝のこと、肥つちよの生つ白い降神術の兄さんが私を訪ねて來て、二人だけで話したいことがあると言ふのです。彼は意志の薄弱な男で、教育もあり感情も纎かな癖に、自分の眼の前の卓に他人の手紙が置いてあると、どうしてもそれを讀まずには居られない性でした。今度も、段段聞いて見ると、不圖アリアドナへ宛てたルブコフの手紙を讀んでしまつたと言ふのです。

「この手紙で見ると、あれは近い中に外國へ出掛けるつもりらしいんです。ねえ、あなた、私はすつかり

動顛してしまひましたよ。お願ひですから私にその譯を話して下さい。私には何が何やら解りません。」

話しながら、辛らさうに息を吐いて、私の顔へまともから牛鍋臭い息を吹きかけました。

「こんな手紙の祕密にあなたを引つ張り込んで申譯ないことです、」と彼は言ひ續けました。「ですが、あなたはアリアドナの親友で、あれはあなたを尊敬して居ります。きつとあなたは何か御存じでせう。あれは出掛けたいと言ふのですが、それが一體誰とだと思ひます？ルブコフさんも矢張りあれと一緒に行く氣なのです。御免なさい、ですがルブコフさんも妙な人ですね。あの人はちやんと細君もあり子供もあるのに、口說き文句を並べて、アリアドナの事を『私の可愛いい』なんて書いてゐるのです。御免なさい、ですが奇怪千萬なことで。」

私は寒氣がして來ました。手も足も痺れてしまつて、胸の上に三角の石を載せられたやうな痛みを感じました。コトローヴイチはぐつたりとなつて安樂椅子に沈み込み、兩手を鞭みたいに垂れてゐました。

「私にどうしろと仰言るんです」と私は訊きました。

「あれに言つてやつて下さい。說き伏せてやつて下さい、……まあ考へて下さい、あれにとつて、ルブコフが何だと言ふのです？ あれの配偶(つれあひ)ですか？ ああ堪らない、怖ろしいことです、飛んでもないことです。――」と彼は頭を抱へながら續けました、「あれにはマクトゥエフとか、まだそのほかにも、立派な相手があるのです。公爵はあれを崇拜してゐるのです。つい此間、先週の水曜日にも、公爵の亡くなられたお祖父さんのイラリオン様が、アリアドナは孫の嫁になるぞよと、さう二二が四みたいに確かに仰言いましたよ。そりやもう、確かに。お祖父さんのイラリオン様はもう亡くなつてゐますが、吃驚(びつくり)りするほど賢い方でした。私共は每日あの方の靈を呼び出して居りますので。」

この話を聞いた日は、一晩ぢうまんじりともせずに、いつそピストル自殺でもしやうかと考へました。朝になつてから、私は手紙を五度書いて、五度とも破(やぶ)いてしまひました。それから穀倉へ行つて泣きました。それから父に金を貰つて、別れも告げずに高架索へ旅立つてしまひました。

勿論、女は女であり、男は男であるには相違ありませんが、今の時代、ノアの洪水以前のやうに、萬事簡單に考へていいものでせうか。そしてまた、複雜な心の働きを與へられた教養ある人間として、私は自分の女性に對して感じる牽引を、ただその身體の恰好が私のと異ふといふ一事で說明してしまつていいものでせうか。ああ、そんな事はとても怖ろしくて出來ません。私はかう思ひたいのです、――人間精神と云ふものは、大自然と爭鬪して來たと同時に、肉情をも敵として、これと爭鬪して來たものであると。そして假令、人間精神はまだ肉情を征服しきれないでゐるとしても、少くも肉情を、友情と云ひ愛情といふ幻想の網でもつて捕へることは出來たと、私は思ふのです。少くとも私にとつては、それは最早犬や蛙に於けるやうな、單なる獸性の作用ではなくて、眞の愛であり、抱擁の一つ一つにも女性に對する心からの淸らかな感動と尊敬とが籠つてゐる筈です。實際、獸的本能に對する嫌惡といふものは、幾世紀幾百代に亙つて養はれて來てゐるものであつて、私はそれを血のなかに承けつぎ、今では私の本性の一部をなして居るのです。そして今、私が愛を詩化し過ぎてゐるとした所で、それは現代に於

ては、私の耳朶が動かず毛を被つてゐないと同様、自然であり必然であるではありませんか。私は文化人の大多數はこの樣に考へてゐると思ひます。何故なら、今日では道德的乃至詩的な要素の缺けた愛は、隔世遺傳の一現象として扱はれ、退化乃至は種々の風癲の徴候であると稱せられてゐるからです。斯樣に愛を詩化する結果として、吾々が愛する女性の裡に、屢々ありもしない美點を想像し勝ちなことは事實で、それでこそ吾々の絶えざる失敗、絶えざる苦惱は生れて來るのです。ですが私の考へでは、それもいいと思ふのです。詰り、女は女であり男は男であるとして自己滿足に陷るよりは、寧ろ苦んだ方がましだといふ意味です。

チフリスで、私は父からの手紙を貰ひました。それには、アリアドナ・グリゴリエヴナが一と冬を外國で過すため何日何日の日に旅立つたとありました。一と月振りで私は家へ歸りました。もう秋になつてゐました。アリアドナは毎週父に宛てて、香水の匂ひがぷんぷんする紙に書いた手紙を寄越しましたが、なかなか立派な文章でした。私は、女といふものは誰でも作家になれる、といふ意見です。伯母さんを說きつけて旅費として千留をねだるのに隨分苦心したとか、一緒に附いて行つて貰はうと思つて自分の遠縁に當る或る年寄の女を探すのにモスクワで大層暇を潰してしまつたとか、そんな事がとても細細と書いてありました。あまり描寫が細かすぎるので、却つてそれが作り事なのは見え透いてゐましたし、勿論道連れの婦人などないことは私にも解りました。その後間もなくして、私の所へも矢張り香氣馥郁とした名文の手紙が來ました。私の美しい聰明な愛の眼眸が見られないので淋しいと書いてありま

した。そして私が、彼女と同じく棕櫚の樹蔭に、オレンチの香氣を吸つて樂園に暮せるものを、田舍にくすぶつて空しく青春を朽ちさせてゐると言つて、優しく非難してゐました。署名の所には「あなたに見棄てられたアリアドナより」とありました。それから二日ほどして來た同じやうな手紙には、「忘れられた女より」とありました。私は遣る瀬ない氣がしました。私の方ではこんなに彼女を思ひ詰め、毎晩のやうに夢にまで見るのに、「見棄てられた」だの「忘れられた」だのといふのは、一體何事でせう、どういふ心なのでせう。その上に、田舍暮しの物寂しさや、長い長い夕暮時や、ルブコフに就ての不安な思ひや。……この眼ではつきり見られないといふ事が私を苦しめ、夜晝となく私に毒を注ぎました。私は到頭我慢が出來なくなつて、旅立ちました。

アリアドナは私をアバッチヤに呼び寄せました。私が着いたのは雨上りの晴れ渡つた溫かい日で、雨の滴はまだ樹々の枝にとまつて居ました。私はアリアドナとルブコフの泊つてゐる、まるで兵營のやうに巨きな「別館」に落着きました。

二人とも外出してゐました。私はそこの公園へ出掛けて、並木道を歩き廻つたのち腰を下しました。墺太利の將校が一人、露西亞の將校と同じ赤い筋のはひつたズボンをはいて、手を後に廻して私の傍を通り過ぎました。赤ん坊を乘せた乳母車が、濕つた砂地に車をきしらせながら通つて行きました。黃疸のよぼよぼ爺さんや、英吉利女の團體や、カトリックの坊さんやが通つて、また墺太利の將校がやつて來ました。フイウメから着いたばかりの軍樂隊が、喇叭をきらきらさせながら緩りと音樂堂へ上つて行

きました。それから音樂がはじまりました。

あなたはアバッチャへいらしつた事がおありですか？　あすこは汚ならしいスラヴ的な小つぽけな町で、一本しかない街路は厭な臭がぷんぷんするし、雨上りにはオーヴァ・シューズなしにはとても歩けません。ズボンを捲り上げて恐る恐る狹い往來を横切つたり、退屈まぎれにこちこちの梨を買つてやつた百姓婆さんに露西亞人と見られて、「四つチユ」とか「二ズー」とか言はれたり、さて何處へ行つてどうすればいいのかほとほと當惑して自問自答したり、擧句の果には矢張り私と同じやうに馬鹿を見た露西亞人たちに出食したときなどは、散々この地上の樂園のことを讀まされて大いに感激してゐたあとの事ですから、腹立たしくもあれば氣恥かしくもなりました。あそこには靜かな入江があつて、汽船だの、色とりどりの帆を上げた小舟が行き來してゐます。そこからはフイウメも見えますし、薄紫の靄に包まれた遠い小島も見えて、入江の岸にホテルだの「別館」だのがのさばつてさへ居なければ、その景色は繪のやうな筈なのですが、慾張りの小商人たちがあの途方もない俗惡な建物を、青々した濱一ぱいに建て並べたばつかりに、この樂園では先づ窓とか、露臺とか、白い卓子や黒い給仕人の服で一杯な遊歩場だけしか見られないのです。そこの公園といふのは、近頃外國の保養地にざらにあるのと同じものです。棕櫚の樹のぢつと押し默つたまま戰ぎもしない青葉や、並木路のいやに黄色な砂や、明るい緑色に塗つたベンチや、唸り聲を立てる軍樂の喇叭の閃めきや、そんなものは皆十分もたてば厭き厭きしてしまひます。まあ其處へ、何か知らの譯があつて、どうしても十日か十週間滯在を餘儀なくされた、と考へて見て下さい。こんな保養地の幾つかを、厭々ながら引き廻されてゐるうちに私は段々、美衣美食の金持連の生活が如何に不自由でけちけちしたものであるか、彼等の想像力が如何に貧弱で遲鈍であるか、彼等の趣味や慾望が如何に臆病なものであるかをしみじみと悟りました。實際、ホテルに泊る金がないので、行き當りばつたりに足を停めて、山の頂上から海の景色を心ゆくまで眺め、草に寢轉び已れの足で歩いて、森や村々を近々と眺め、その土地土地の風俗を觀察したり、その土地の歌を聞いたり、その土地の女と戀に落ちたりする老若の旅人の方が、何倍幸福だか知れません。……

公園に坐つてゐるうちに暗くなつて來ましたが、その夕闇に私のアリアドナが、まるで公爵夫人のやうに美々しく着飾つて、姿を現はしました。その後から、維納か何處かで新調したと見える、ゆつたりした服を身に着けたルブコフが蹤いて來ました。

「何故あなたは憤ぶんです？」と彼は言つてゐました、「私がわぶい事をしたとでも言ふんですか？」

私の姿を見ると、彼女は喜びの聲を上げました。もし公園の中でなかつたら、私の頸に抱きついたに相違ありません。彼女は私の兩手を固く握りしめて笑ひ出しました。私も笑ひましたが、感動のあまり泣き出しさうでした。質問が始まりました。村の生活や、私の父のことや、兄に會つて來たかとか、色色な事です。そして私に、自分の眼をぢつと見詰めさせて置いて、白楊魚や、多愛もない口喧嘩や、ピクニックのことをまだ忘れずにゐるかと訊くのでした。……

「本當にあの頃は何てよかつたんでせう！」と彼女は嘆息しました、「でも私達、此處だつて退屈してる

譯ではないのよ。とても澤山お友達が出來たのよ、あなた。明日になつたらあなたを或る露西亞人の家族に紹介して上げるわ。ただねえ、別の帽子をお買ひなさいよ」と私の様子をぢろぢろ眺め廻して、顏を顰めて言ひました、「アバッチヤは田舍ぢやなくてよ。ここぢや『しやんとして』(コム・イル・フォ)なくてはいけないわ。」

それからレストランへ行きました。アリアドナは始終笑つたり巫山戲たりして、私のことを可愛いい人とか、いい人とか、利口な人とか呼んでは、私が一緒にゐるなどとは自分の眼を信じられぬ程だと言ふのでした。そんな風で十一時頃までそこに居て、晩餐にもお互同志にも大いに滿足して別れました。

翌日アリアドナは私を例の露西亞人の家族に、「有名な大學教授の令息で、地續きの領地の人」と言つて紹介して吳れました。彼女はこの家族とは領地や收穫のことしか話さず、そして絕えず私のことを引合ひに出しました。彼女は大變富裕な地主に成り濟したかつたのですが、實際これは成功しました。彼女の振舞はまるで本物の貴族令孃のやうに立派でした。そりや血統から言へばそれに違ひありませんが。

「それに致しても、伯母さんは妙な方ですのね」と不意に彼女は私に微笑みかけながら言ひました、「少しばかりの諍ひで、メランへ行つておしまひになるなんて、何て方でせうね！」

その後で彼女と公園を散歩した時、私は訊きました。

「さつきあなたが言つた伯母さんて一體どんな伯母さんです？　まだどんな伯母さんがあるんです？」

「あれは助け舟の嘘なのよ」とアリアドナは微笑しました、「私が道連れの女の人もなしに來てゐると思はれてはなりませんもの。」

それからちよつと默つてゐたと思ふと、いきなり私へぴつたりと寄添つて言ひました。

「ねえ、あなた、ルブコフには仲好くして上げてよ。とても不幸な人なの。あの人のお母さんも奥さんも、そりや大變な人達なのよ。」

彼女はルブコフには他人行儀な言葉遣ひをしてゐました。寢に行くときにも、私にと同じに「お眠みなさい」を言ひますし、二人は異つた階の部屋に別れて住んでゐました。それで私は、萬事變りはなく、二人の間には何のロマンスもないのだと救はれたやうな氣持になりました。彼と顏を合せても氣が樂でした。三百留借して吳れと言はれた時にも、大喜びで借してやりました。

毎日毎日、私達はぶらぶらしてゐました。全くぶらぶらしてゐました。公園を歩いたり、食つたり、飮んだりでした。毎日例の露西亞人の家族と話しました。公園へ行けばきまつて黃疸の老人やカトリツクの坊さんや、小さな骨牌(かるた)を一組携帶してゐて、坐れる場所なら處構はず坐り込んで、神經質に肩を引つ攣らしながらペーシエンスの店を擴げる墺太利の將軍に出會ふことも、いつか段々と慣れてしまひました。音樂もしよつ中同じ物ばかりやつて居ました。田舍の家に居た頃でも、收穫の忙しい日などに遊び仲間と魚釣りをしたりピクニツクをしたりしてゐるのを百姓たちに見られると、私は恥しくてならなかつたものです。此處へ來てからも、下男や馭者や、道で出會ふ勞働者に、私は氣まりが惡くて堪りませんでした。彼等が私の顏を見て「何だつてのらくらしてゐるんだ」と心のなかで言つてるに相違ないと思はれました。毎日、朝から晩まで、この羞恥の感情を味ひました。怖ろしく不愉快な、單調な時で

した。變化といつたらそれこそ、ルブコフが私から今日は百ガルデン、明日は五十ガルデンと借り出して、金を手にするや否やまるでモルヒネ患者にモルヒネを與へたやうに急に元氣になつて、大聲で細君や自分や借金取のことを嘲笑し出す位のものでした。

　そこへ長雨が降り出して寒くなりました。私達は伊太利へ行きましたが、私は途中で父に電報を打つて、助けると思つて八百留ほど羅馬宛に送つて下さいと頼みました。私達はヴエネチヤにもヴオローニヤにもフロレンスにも足を停めましたが、何處へ行つても必ず恐ろしく高價なホテルに泊らされ、電燈代とか、チツプとか、煖房費とか、晝食のパン代とか、夕食を一般食堂で攝らぬ權利金とか、一々別に搾(しぼ)られました。私達はひどく澤山食べたものでした。朝は「生のままの珈琲(キャフェ・コムプレエ)」が出ました。一時の晝食には、肉や魚や、何かのオムレツ、乾酪、果物、葡萄酒でした。六時の夕食は八皿でしたが、皿の間(アントラクト)が長いのでその間私達は麥酒や葡萄酒を飲みました。八時過ぎになるとお茶です。夜が更けるとアリアドナは何か食べたいと言ひ出して、ハムだの卵の半熟だのを取り寄せました。私達もお相伴をしました。

　食事のない暇には私達は大急ぎで博物館や展覽會を駈け廻り、夕食や晝食に遲れやしないかとそればかり心配してゐました。畫の前に立つても退屈で、家に歸つて横になりたくてなりませんでした。草疲(くたび)れきつて、椅子を眼で探しながら、でも體裁上人の後について「實に美事だ！　實に氣分が出てゐる！」と鸚鵡の眞似をしました。私達はまづ滿腹した大蛇といつた風で、きらきらする物ばかりに目を惹かれ、商店の飾窓に催眠術をかけられました。贋物のブローチに眩まされたり、要りもしないがらくたを山程

も買ひ込みました。

　羅馬でも同じことでした。丁度雨が降り續いて、冷めたい風が吹いてゐました。脂つぽい晝食のあとでペトロ寺院を見物に行きましたけれど、お腹が一杯だつたせゐもあり、また多分天氣の悪いのも手傳つて、私達はちつとも感心しませんでした。それでもお互に美術に無關心だと攻撃し合つて、危ふく喧嘩を始める所でした。

　父の所からお金が屆きました。何でも朝のことでしたが、私が受取りに出掛けて行くと、ルブコフもついて來ました。

「過去がある以上、現在は滿足な幸福なものであり得ませんね」と彼が言ひました、「私は過去の大きな荷物を頸つ玉に載つけてゐるのです。それでも金さへあれば困りはしませんが、無いとなるとそれこそ二進も三進も行きません。……ねえ、どうでせう、私はもう八フランしかないのです」と聲を下げて言ひ續けて、「そこへ持つて來て妻には百留送り、母にもそれだけ送つて遣らなければなりません。それに此處に居なければならず。……アリアドナはまるで赤ん坊で、こんな相談にはてんで相手にならず、公爵夫人みたいにお金を撒き散すのです。昨日も何故時計なんか買つたんでせう？　そして一體、私達は何故いつまでも好い子になつてゐなければいけないのです？　早い話が、あの人と私が二人の關係を召使や知り合ひの眼から隱すためには、一日に十フランから十五フランも餘計にかゝるんです。私が別に部屋を取りますからね。それが一體何になるんでせう？」

私は尖つた石が胸の中を轉り廻るやうな氣がしました。もう何もかも判然(はつき)りしすぎる程解つてしまひました。身體ぢうが冷えきつてしまつて、すぐ樣決心がつきました。二人にはもう會ふまい、逃げ出して家へ歸つてしまはう。……

「女と仲好になるのは譯はないですよ」とルゴロフは言ひ續けた、「ただ着物を脫がせさへすれば好いんですからぬ。それから先はもう實に厄介で馬鹿げてゐて、お話しになりません。」

私が受取つた金を算へてゐると、彼は言ひました。

「あなたが千フラン貸して下さらないと、私は破滅しなければなりません。このあなたのお金は、私にとつて唯一の財源なんです。」

私がお金をやると、彼はすぐ樣元氣づいて、今度は伯父さんの事を、自分の住所を細君に隱して置けない頓痴氣野郎だと言つて嘲笑し出しました。ホテルに歸ると、私は荷物をまとめ、勘定を拂ひました。もうアリアドナに別れを告げるだけです。

私は彼女の扉をノックしました。

「おはひり(アントレェ)。」

彼女の部屋のなかは朝の亂雜さでした。卓子には茶器や、食べ殘しの卷パンや、卵の殼が散らばつて、強い香水の匂ひが息の詰まるほど籠つてゐました。寢床は亂れたままでした。二人で寢た跡が歷然としてゐました。アリアドナはといへば、寢床を出て間もないらしく、フランネルのブルーズを着て、髮は亂れたままでした。

私はお早うを言つてから、彼女が髮を搔き上げてゐる間、一分ほど默つて坐つてゐましたが、やがて身體ぢうを顫はせながら訊きました。

「何だつて……何だつて僕をわざわざ此處へなんか呼び附けたんです？」

彼女は私の氣持の察しがついたらしく、私の兩手を取つて言ひました。

「私はあなたに居て貰ひたかつたのよ。あなたは純潔人なんだもの。」

私は自分の昂奮や顫へてゐることが恥しくなりました。いきなり泣き出しさうな氣がしました。それ以上は一言も言はずに部屋を出てしまひ、一時間後には汽車に乘つてゐました。道中では何故かしらアリアドナが姙娠してゐるやうに想像して、彼女が厭でなりませんでした。すると汽車の中や停車場で見掛ける女までが何となく皆姙娠してゐるやうに見えて、厭でみじめでなりませんでした。まあ丁度、慾の皮のつつぱつた强慾者が、いきなり自分の持つてゐる金貨がみんな贋造なことを發見したやうなものですね。愛の力に暖められて私の想像があんなに長い間いつくしんで來た淸らかな優美な影像や、計畫や、希望や、思ひ出や、戀愛觀や女性觀やが、今となつては一齊に私を嘲り笑ひ、舌を出すのでした。「あのアリアドナが」と私は戰慄しながら自分に問ひました、「あの若い、とても美人の、知識的な娘が、元老院議員の娘ともあらうものが、あんな平凡で下らぬ俗物と關係しやうとは？」すると私が自分に答へました、「だが、何故ルブコフを愛してはいけないのか？ 私より何處が劣つてるといふのか？ ああ、

誰でも勝手に愛するがいい。だが、何だつて嘘を吐くのだ？　けれど、私に隱し立てをしてはいけない譯でもあるのかね？」と、まあそんな具合に、ぐるぐる廻つてゐるうちに、氣狂ひじみて來ました。

汽車の中はひどい寒さでした。一等に乘つたのですが、一つ腰掛に三人も坐らされ、窓には二重框もなく、外の扉は特別車に直かに續いてゐました。自分が足械でもはめられて、絞めつけられ、見棄てられたみじめな人間のやうな氣がしましたし、足も凍えさうでした。それと同時に、しよつ中あの今日見た彼女の惚々するやうなブルーズ姿と寢亂れ髮が思ひ出され、いきなり烈しい嫉妬の痛みに堪え兼ねて席を跳び上つたりして、あたりの人々から怪訝さうな氣味わるさうな眼付でぢろぢろ見られた程でした。

家へ歸つて見ると、深い雪にとざされ、寒さが零下二十度からになつてゐました。私は冬が好きです。好きな譯は、外がどんなにぴりぴりする樣な寒さでも、家の中は何とも言へぬ程に溫かだからです。澄みきつた寒さの嚴しい日に、羊皮の外套とフエルトの長靴を身に着けて、庭や脊戸で仕事をしたり、暑いほど火を焚いた自分の部屋で本を讀んだり、父の書齋で煖爐の前に坐つたり、田舍風の風呂に浸つたりするのは、實に愉しいものです。ただ家に、母も妹たちも子供たちも居ないとなると、冬の夕暮は何となく佗しいもので、とてもしんとして長く思はれるのです。暖かくて居心地がよければそれだけ、物足りなさも胸に迫つて來ます。私が外國から歸つて來たその冬は、夕暮がとても長くて、私は寂しさの餘り本も讀めない始末でした。日中は、庭の雪を掻いたり、鷄や仔牛に餌をやつたりして、どうかかうか過ぎて行きますが、日が暮れたとなると、いつそ消えて無くなりたい位でした。

以前はお客が嫌ひでしたが、今度はあべこべに大好きになりました。と云ふのは、きつとアリアドナの噂が出るからです。降神術者のコトローヴイチは自分の妹の噂をしによくやつて來ましたし、時には、私に劣らずアリアドナに參つてゐる親友のマクトウエフ公爵を連れて來ました。アリアドナの部屋に坐つて、彼女のピヤノの鍵を叩いて見たり、彼女の樂譜に見入つたりすることが、今では公爵の日課になつてゐました。さうせずには生きて行けないのです。一方、お祖父さんのイラリオンの靈は相變らず、晩かれ早かれ彼女は嫁になるぞよと豫言しつづけて居ました。公爵は私共の所へ來ると、大概は長居をして、晝食から夜更けまで默つて坐つてゐました。默つたまま麥酒を二三本空にして行くのですが、ただ時々、自分も話仲間だといふ證據に、突拍子もない時に悲しげな呆けたやうな笑ひ聲を立てました。歸るまへには何時も私を物蔭に引つ張つて行つて、小聲で言ふのでした。

「あんたが一番お終ひにアリアドナ・グリゴリエヴナに會はれたのは何日でしたかな。達者でゐますかな？　あちらになぞ居て退屈ではないでせうかな。」

春になりました。渡り鳥の獵がはじまり、それから春蒔きの穀物や苜蓿の播種がはじまります。憂鬱でしたが、もう春の憂鬱でした。失くした事は失くした事で諦めてしまひたくなりました。畠で仕事をしながら、雲雀の聲を耳にして、私は自分に問ひました、「もういい加減で、自分の幸福のことなど思ひ切つたらどうだ。そして妄念はさらりと捨てて、ただの百姓娘と結婚したらどうだ。」そこへ突然、忙しい盛りでしたが、伊太利の消印のある手紙が來ました。苜蓿も、蜜蜂の家も、仔牛も、百姓娘も、たち

まち煙みたいに消え失せました。アリアドナは、とても底無しの不幸に沈んだと書いて來たのです。私が彼女に救ひの手を差し伸べず、自分の美德の高みから見下ろしてゐて、危險の瞬間に見棄てたと言つて、私を非難して居ました。そんな文句がいらいらした大きな字で書いてあり、消しやインクの汚點が方々についてゐて、苦しみながら大急ぎで認めたことは明らかでした。どうぞ來て、私を救つて下さいと結んでありました。

又もや私は、錨を切られて漂つて行きました。アリアドナは羅馬で待つてゐました。私の着いたのは夜遲くでしたが、彼女は私の顏を見るや否や、咽び泣いて私の頸へかじりつきました。冬まへと少しも變らず、やはり若々しく綺麗でした。一緒に晩食をとつて、それからしらじら明けまで羅馬の街を乘り廻しました。彼女は自分の暮し振りばかり話してゐました。ルブコフは何處？と私は訊きました。

「あの人のことは言はないで頂戴」と彼女は叫びました、「あんな人、嘔き氣がつくほど厭だわ！」

「だつて、あなたは確かに愛してゐたらしいけど。」と私は言ひました。

「ちつとも。はじめの中は戀人に見えたので同情してやつたの。それだけの事よ。厚かましくつて、力づくで女を手に入れるの。まあそこがいい所なのね。でもあの人の話はよしませうよ。私の人生の頁の悲しい一頁なの。あの人お金の工面に露西亞へ歸つたわ。それが當り前だわ！　もう歸つて來なくてもいい、つて言つてやつたの。」

彼女はもうホテルにではなく、素人屋に二た部屋借りて、彼女一流の好みで冷やかに贅澤に飾り附け

てゐました。ルブコフが立去つて以來、彼女は知り合ひの人達から五千フランほども借り込んでゐましたから、私の到着は實際彼女にとつては救ひなのでした。私は彼女を田舍へ連れて歸るつもりで居たのですが、これは駄目でした。故郷が懷しいには懷しいのですが、散々嘗めさせられた貧乏の味や、不自由や、兄さんの家の錆びついた屋根やを思ひ出すと、厭で厭で身慄ひが出るのです。家へ歸らうと私が言ひ出すと、彼女は痙攣したやうに私の兩手を握りしめて言ふのです。

「厭、厭、あんな所、退屈で死んぢまふわ。」

そこで私の戀は愈々最後の段階に、つまり最後の四分の一に入りました。

「昔のやうな可愛いいあなたになつてよ。少しでいいから私を愛してよ」とアリアドナが私に凭りかかりながら言ひます、「あなたは氣難かし屋で、取越苦勞で、衝動に任せるのを可怕がつて、しよつ中結果ばかり考へてるのね。詰らないわ。ねえ、お願ひだから、どうぞ私に溫かくして頂戴。……淸らかな、貴い、可愛いいあなたが、私こんな好きなのよ。」

私は彼女の戀人になりました。とに角一と月ほどは、私は氣狂ひみたいになつて、ただ恍惚境に陶醉しました。若い美事な肉體をぢつと抱いてゐたり、それを享樂したり、眠りから目覺めるたびにその體溫を感じたり、そして、此處に彼女が、私のアリアドナが居ると思ひ出したり、――ああ、こんなことに慣れるのは容易なことぢやありません。ですが私は、とに角慣れて來て、段々と自分の新らしい境涯を自覺するやうになりました。先づ第一に、私はアリアドナが昔通り、やはり私を愛しては居ないこと

を知りました。が、彼女は本氣で戀がしたいのです。孤獨が可怕いのです。でも大切なことは、私が若くて健康で旺盛なことなのです。一般に冷たい人間がさうであるやうに、彼女もまた淫蕩な女でした。——私達はお互に熱情を籠めて愛し合つてゐる樣な振りをしてゐただけです。その後になつて、段々ほかの事も解つて來ましたが。……

私達は羅馬でもナポリでもフロレンスでも暮しました。巴里へも行きたかつたのですが、とても寒さうなので、また伊太利に引き返しました。何處へ行つても、自分達は夫婦であり、富裕な地主であると言つて廻りました。人々は喜んで私達と交際しましたが、アリアドナの成功振りは素晴しいものでした。彼女は畫の稽古をしてゐましたので、皆に畫家と呼ばれてゐましたが、それがどうでせう、とてもよく似合ふのです。そんな天分などは毛程もない癖に。……彼女は毎日二時か三時ごろまで寢てゐました。珈琲も晝食も寢床の中でやりました。夕食にはスープだの、伊勢蝦だの、魚だの、肉だの、アスパラガスだの、野禽だのを平らげます。寢床に入つてから今度は私が何か食べ物を、例へば燒肉などを持つて行つてやると、悲しさうな心配さうな顏をしながら矢張り平げてしまひます。それから夜中に目が覺めると、林檎やオレンヂを嚙りました。

この女の主要な、謂はば根本的な性質は、その驚くべき狡猾さです。彼女は何の必要もないのに、絕えず、さう、一分間だつて嘘を吐かずには居ないのです。それはまあ本能みたいなもので、雀がチユチユ言ひ油蟲が鬚を動かしたりするのと同じなんですね。彼女にかかつたら私も、下男も、門番も、店の

商人も、友達も、みんな瞞されてしまふのです。どんな話の時でも、どんな人に會つても、彼女が見得を張つたり嘘を吐かなかつたりしたことは一度だつてないのです。誰か男が私達の部屋へ入つて來やうものなら、それがボーイだらうが貴族だらうが、忽ち彼女の眼附も表情も聲も、身體の輪廓までががらりと變つてしまひます。あなたが、あの頃の彼女を一目でも御覽になつたら、私達ほど裕福な流行風な人間は伊太利ぢう探しても居ないとお思になつたに相違ありません。畫家や音樂家に逢はうものなら、もう逃しつこはありません、その素晴らしい天分を褒め上げて、出まかせの嘘八百を並べ立てるのです。「なんて御立派な天分でせう」と甘つたるい歌ふやうな聲を出します、「何だか怖ろしくなるほどですわ。きつと人間なんかはすつかり見透していらつしやるに異ひありませんもの。」

そんな事はみんな、相手に取り入るための、ちやほやされるための嬉しがらせなのです。毎朝目が覺めて先づ思ふことは「取り入る」といふ事なのです。これが彼女の生活の目的であり、意義であるのです。若しも私が、何處其處の街のしかじかの家に、お前を嫌ひだと言つた人がゐる、とでも言はうものなら、それだけで彼女は本氣になつて懊惱するでせう。彼女には毎日男を魅惑し、俘にし、氣狂にすることが必要でした。私が彼女の手のうちにあり、彼女の魔法にかかつて全くの痴人になり果ててゐることが、彼女には馬上試合に勝を得た中世の武士みたいな慰めだつたのです。私を征服しただけでは足りないと見えて、夜になるとまるで牡鹿みたいに寢そべつて、しよつ中暑がつてゐましたから毛布も掛けずに、ルブコフから來た手紙を讀むのでした。どうぞ露西亞に歸つて來て呉れ、さもないと追剝か人殺

しをして旅費を作つて出掛けるぞ、と脅し半分に懇願してゐるのでした。彼女は憎んでゐながらも、それでもこんな熱情的な奴隷みたいな文句を讀むと上氣してゐました。また自分の魅力については、彼女はひどく變つた考へを持つてゐました。もしも何か大勢人の集まる場所で、自分の素晴らしい身體つきや薔薇色の皮膚を見せてやれたなら、全伊太利を、いや全世界を征服出來るのに、と言ふのです。そんな身體つきや皮膚の色艶の話を聞くと私は厭な氣持になるのでしたが、それを見た彼女は、腹の立つやうな時になると、私を苦しめ焦らすために色んな下品なことを言ひ出すのでした。その果てには、或る日さる貴婦人の別莊へ招かれて行つた時などは、腹立ちまぎれにこんな事まで言ひました。

「そんな厭き厭きするお說教をやめないと、私この場で着物を脫いで、あの花の上に裸かで寢てやることよ。」

　彼女の寢姿や、物を食べる樣子を眺めたり、また一生懸命になつて嬌羞の稽古をするのを眼にしたりすると、私はかう考へるのでした、――神があれほどの美しさと優雅さと睿智を彼女に授けたのは一體何のためだらう？　まさか、寢床の中でごろごろしたり、食べたり、際限もなく嘘を吐いたりするためではあるまい。ところで、一體彼女は聰明でしたらうか知ら？　三本蠟燭や十三といふ數を怖れたり、呪ひや惡夢に顏色を變へたり、信心に凝り固つた婆さんのやうな口振りで自由戀愛や一般に自由と言ふことを解釋したり、ツルゲーネフよりはボレスラフ・マルケーヴィチの方が優れた作家だと斷言したりするのです。さうかと思ふと一方では惡魔のやうに狡猾で拔け目がなく、交際社會に出ると巧みに、高

等教育のある頭の進んだ人間のやうに見せかける術を知つてゐるのです。

　機嫌のいい時にだつて、召使に酷い事を言つたり、蟲をつぶしたりするのは平氣でした。鬪牛も好き、人殺しの記事を讀むのも好きで、嫌疑者が無罪放免になると腹を立てました。

　私とアリアドナがやつてゐた樣な生活は、隨分お金がかかりました。可哀想に私の父は、自分の恩給や田地の上り高をすつかり送つて呉れましたし、私のために不義理な借金をまでしてゐました。或る時など、父から「不　有」といふ返事が來ると、私は折返して絕望的な電報を打つて、領地を抵當に入れるやうに賴みました。暫くたつと、今度は二番抵當に入れて何とか金をこしらへて呉れと賴みました。その都度、父は一言も不平を言はずに私の言ひなりになつて、有りつたけの金を送つて呉れました。アリアドナは生活の實際的な方面は蔑すんでゐましたから、そんな事にはお構ひなしで澄してゐました。或る時など、彼女の馬鹿げた欲望の滿足のために千フランを投げ出して、まるで古木のやうに唸つてゐると、彼女は浮き浮きして "Addio Bella Napoli,"（さらば美はしのナポリよ）を歌つてゐました。段々に私の戀も冷めて來ましたし、そんな關係が恥かしくもなりました。私は姙娠だの出產だのといふ事は嫌ひですが、時時は赤ん坊のことを空想するやうになりました。赤ん坊はたとへ形式的だけにせよ、この私達の生活の言譯にはならうと思はれるのです。あまり自己嫌惡が募つてもいけないと思ひ、私は博物館や展覽會を觀に行つたり、本を讀んだり、食事を減らしたり、酒をやめたりして見ました。そんな具合に朝から晩まで己れを制御してゐると、妙に氣が樂になるものですね。

アリアドナの方でも私に厭き厭きして來ました。彼女がうまく征服した人間は生憎くみな中流の人達で、大使もサロンも依然として現はれませんでした。そこまで行くには金が足りないのです。彼女は口惜し涙を流しました。そして到頭、露西亞へ歸つてもいいわ、と言ひ出しました。で、今がその歸り途なのです。出發前の二三ケ月といふもの、彼女は兄さんと盛んに文通してゐました。何か人に匿れて企らんでゐるにきまつてゐます。だが何でせう。ただ神様だけが御存知です。私はもう、彼女の狡猾な擧動を一々穿鑿して見るのは御免です。私達は田舍へ歸るのではなくて、ヤルタへ行く所です。ヤルタから高架索へ行かうと思つて居ます。彼女は今ではもう、保養地でないと居る氣がしないのです。でもねえ、あなた、この保養地といふ奴が私には堪らないんですよ。息苦しくつて氣恥しくつて。私は田舍へ歸りたくつてならないのです。今こそ働いて、額に汗してパンを稼ぎ、これまでの過ちの埋合せをしたいのです。今こそ私は自分の身體に有り餘つた力を感じます。この力で働いたら五年のうちには領地が買ひ戻せさうな氣がします。所が、御覽のやうな混み入つた事情です。こゝはもう外國ぢやなくて、母なる露西亞ですから、正式の結婚のことも考へなければなりません。勿論今ぢや何の魅惑も殘つては居りませんし、昔の戀の跡形もありませんが、何はともあれ私は彼女と結婚する義務があるのです。」

自分の話にすつかり昂奮したシャモーヒンは、私と一緒に船室へ降りて行つてからも女性論を續けた。もう夜は更けてゐた。偶然に二人は同じ船室であつた。

「今のところでは、女性が男性に遲れてゐないのは田舍だけです」とシャモーヒンは言つた、「田舍では、女性は男性とひとしく思想し、感覺し、ひとしく文化の名に於て大自然と熱心に爭鬪してゐます。都會の女となると、そのブルジョアたるとインテリゲンチヤたるとを問はずもうずつと久しく遲れて居て、自分の原始の狀態に歸りつつあります。もう今では半ばは人獸です。そのお蔭で、これまで人間精神によつて戰ひ取られた幾多のものが、既に失はれてしまひました。女性は次第次第に消滅しつつあります。原始の雌がこれに取つて代りつつあるのです。此のインテリゲンチャの女性の落伍は文化のため眞に寒心に堪へません。その退歩運動に於て、女性は男性を引きずらうと努力し、男性の前進を遮りつつあるのです。これは疑ふべくもありません。」

私は反問した。――何故、問題を一般化するのか。何故、アリアドナ一人でもつて總ての女性を律するのか。既に女性の間には教化と兩性同權に向つての燃えるやうな追求が見られ、自分はそれを正義への追求と承知してゐるが、これこそは取りも直さず、退歩運動などといふ有らゆる揣摩臆測を斥けるものではないか、と。けれどシャモーヒンは、私の言ふことには殆ど耳を借さずに、疑はしげな微笑を浮べてゐた。これはもう熱心な確信的な女嫌ひで、その確信を覆すことはとても出來ない相談であつた。

「いや、もう澤山です」と彼は遮つた、「女性が私のうちに男性を見ず、自らに等しいものを見ず、ただ雄のみを見て、一生涯のあひだ唯々私に取り入る、いや、私を占有することにのみ氣を使つてゐる以上、權利だなどと言へた義理でせうか？　ああ、彼等をお信じになつてはいけません。彼等は實に、實に狡

猾です。吾々男性は、彼等の自由に就て奔走してやつて居ますが、彼等はてんで自由などは欲しくないのです。ただ欲しいやうな振りをしてゐるだけなのです。何ともお話しにならない狡猾極まる代物ですよ。」

　私はもう言ひ返すのも面倒だつた。睡くなつて來たので、壁の方を向いた。

「さうですとも」と、うとうとし掛けた耳に聞えて來た、「さうですとも。そして、總べては吾々の教育の罪です。都會に於ける女性の教育なり教化なりは、その本質に於て、女性を人獸に仕立て上げる、言ひ換へれば雄に取り入つて雄を征服する、といふ事に歸するのです。さうですとも。」とシヤモーヒンは溜息を吐いた、「宜しく少女たちを少年と共に教育し、つまり共學させて、いつも一緒にして置かなければいけません。女性が男性と同樣に自らの不正を自覺出來るやうに教育してやらなければいけません。さもないと、女性は常に自ら正しいものと考へます。先づ、男性は彼等の騎士でもなく情人でもなくて、あらゆる點で同等な隣人であることは、お襁褓の時代から娘に吹き込んでやるのです。論理的に普遍的に思想することを教へ、決して彼等の腦味噌の目方が男性より輕いとか、それ故に科學や藝術や、一般に文化の問題に無關心でゐていいなどと思ひ込ませてはなりません。靴屋やペンキ屋の見習小僧は大人よりも腦味噌は少いに關らず、働き苦しんで立派に生存競爭の一員ではありませんか。また、姙娠出產などといふ生理學に賴る考へ方も棄てなければなりません。何故なら、先づ第一に女性は每月子供を生むのではありませんし、第二に總ての女性が子供を生むとは限りませんし、第三に普通の田舍の女は出產の前日までも野良に出てゐて何の障りもないからです。次に日常生活も全く同權でなければなりません。もし男性が婦人に椅子を勸め、落したハンカチを拾つてやるなら、彼女もやはり同じ事を返さなければいけません。良家の令孃が私に外套を着せかけて吳れ、或ひは水のコップを取つて吳れたとしても、私は何の異存もありません。……」

　私はぐつすり寢入つてしまつたので、それ以上は聞かなかつた。

　翌る朝、セバストポールに近くなつた時は、じめじめした厭な天氣であつた。船は搖れた。シヤモーヒンは私と一緒に甲板室に坐つて、何やら物思に耽つて默り込んでゐた。お茶の知らせの鐘が鳴ると、外套の襟を立てた男たちや、睡さうな蒼ざめた顏をした婦人連れが降りて行つた。一人の若い美しい婦人が、——それはヴオロチスクで稅關の役人に食つてかかつたのと同一人物だつたが、シヤモーヒンの前に立ち停つて、氣儘な甘やかし放題の赤ん坊のやうな表情で言つた。

「ジヤン、あんたの小鳥は船醉ひだつたのよ。」

　それから、私のヤルタ滯在中、この美しい婦人が步調のとてもいい馬に跨つて疾驅して行くのも、その後から二人の士官が遲れまいと喰附いて行くのも見た。また或る朝は、フリジヤ帽にブラウスといふ姿で海岸に坐り、ぐるりと取卷いて感服してゐる大勢の人々を前に、油繪具で寫生をしてゐるのも見た。私も彼女に紹介された。彼女は強く強く私の手を握り緊めて、さも恍惚（うつとり）としたやうに私をうち見ながら、お作を拜見して大層嬉しう御座いましたと、甘つたるい歌ふやうな聲でお禮を言つた。

「信用なすつてはいけませんよ」とシャモーヒンが囁いた、「あなたのものは一頁だつて讀んで居ないんですから。」

ある日の夕暮近く、海岸通を散歩してゐると私はシャモーヒンに出逢つた。彼はザクースカだの果物だのの大きな包を兩手に抱へてゐた。

「マクトウエフ公爵が來たんですよ」と彼は嬉しさうに言つた、「昨日、降神術の兄さんと一緒に來たんです。あの時兄さんと文通してゐた譯が、やつと解りました。ああ、有り難い」と空を仰ぎ包を胸に抱きしめながら續けた、「これであの女が公爵と意氣投合すれば、それこそ自由ぢやありませんか。その時こそ私は田舍の父の所へ歸れるぢやありませんか。」

そして駈け出して行つた。

「私は靈魂を信じはじめましたよ」と、また振返つて叫んだ、「お祖父さんのイラリオンの靈は、やつぱり言ひ當てたと見えますね。ああ、さうなつて吳れたら！」

この出逢ひの翌日に私はヤルタを發つたので、シャモーヒンのロマンスがどういふ結末を告げたかは知らない。

嫁資

私は自分の生涯のうちに大きな家、小さな家、石造の家、木造の家、古い家、新しい家、實に數知れぬ家を見て來た。けれどその中で一軒の家が、特別にはつきりした記憶を私に留めてゐる。

その家は手早に言つてしまへば家なのではない。まあ小屋である。小つぽけで、一階建で、窓は三つしかなくて、その恰好は頭巾を被つた小つちやな佝僂婆さんに恐ろしく似通つてゐる。瓦葺きで、屋根の上に剝げちよろけの煙出しを突き出し、壁を白い漆喰で塗つてあるこの家は、桑の樹やアカシヤや白楊樹の繁みのなかに溺れてゐる。今の持主の祖父や曾祖父がそれを植ゑたのである。

つまりその家は青々とした葉の繁みに隱れて見えなかつたのであるが、と言つてそれが町の家でなかつたといふ譯ではない。その家の廣々した庭は、ほかの家のやはり廣い青々した庭に隣接して居て、立派にモスクワ街の一部をなしてゐるのである。だがこの街路を車で通る人は誰もなかつた。人通りにしてもごく稀であつた。

その家の鎧戸はいつも鎖してあつた。住み手には光が欲しくなかつたからである。光は彼等に不用であつた。窓は決して開かれたことがなかつた。その家の住み手たちは新鮮な空氣を好まなかつたからである。桑の樹やアカシヤや蕁麻の間に住み通してゐる人々は自然に對して冷淡なものである。自然の美しさを味ふ力は避暑の人々にだけ與へられた特權なので、その殘りの人達はさう言つた美しさに對しては一生を蒙昧の深い淵に暮すのである。人々は豐富に有つてゐるものは貴いとしない。『己れの有するもの、人これを保たず』と言はれた通りである。それ所か、己れの有するもの、人これを愛するなし、で

はないか。

その家の周圍はさながら地上の樂園で、愉しい小鳥の囀りに滿ちてゐる。が、家の中には……噫、夏のうちは息の詰まるほどの暑苦しさであり、冬になるとまるで浴室の中のやうに熱く、炭の氣が立ち籠めて、退屈で物倦い。……

私がはじめてこの家を訪問したのはもうずつと以前のことで、所用で訪ねて行つたのである。つまり、この家の主人であるチカモーソフ大佐に、その夫人や令孃への言づけを頼まれたのであつた。この最初の訪問のことを私は實によく憶えてゐる。いや、忘れようとしても何で忘れられよう。

その時貴方が玄關から廣間へは入つて行くと、一人の年の頃四十ほどのじめじめした小さな婦人が、怖れと驚愕の思ひを眼に籠めてまじまじと貴方を見詰めたと想像して御覽なさい。貴方は『見知らぬ』客人であり、『青年』である。――そしてこれだけの事が既にこの婦人を驚愕と恐怖の淵に沈めるためには充分である。貴方は手に短劍を、手斧を、短銃を持つてゐる譯ではない。貴方は親切げな笑みをさへ浮べてゐる。しかし、貴方を迎へるものは狼狽だけである。

「あの失禮で御座いますが、誰方樣でいらつしやいませうか？」と一人の老婦人が顫へ聲で貴方に訊ねる。そして、これがこの家の主婦チカモーソフ夫人である。

貴方は自分の名を告げ、訪問の次第を述べる。今までの恐怖と驚愕の色は消えて、「まあ！」といふ歡びの鋭い叫びと、目が眩んだやうな表情とがこれに代る。この「まあ！」が、玄關から廣間へ、廣間か

ら客間へ、客間から厨へ、そして貯藏倉まで……まるで木魂のやうに傳はつて行く。やがて家ぢうが、樣々に音色の變つた歡ばしげな「まあ！」で一ぱいになる。五分間の後には貴方は客間の大きな、ふかふかする、燃えるやうに温かい長椅子に坐つて、今はモスクワ街全體に擴がつて行く「まあ！」の木魂を耳に聞いてゐる。

蠹虫埃と、新らしい羊皮の靴の匂ひがしてゐた。その靴は私のすぐ傍の椅子の上に、ハンカチにくるんで置いてあつたのである。窓にはジェラニウムの鉢植と、もすりんの窓掛がある。窓掛には蠅がうつとりとなつて留つてゐる。壁間には何やらの僧正の肖像が掲げてある。それは油繪であるが、隅の方の少し罅けた硝子が丁寧にはめてある。僧正の次には澤山の祖先たちが並び、どれもみな檸檬のやうに黄ばんだ、ジプシイの人相をしてゐる。卓上には指貫と毛絲の毬と編みさしの沓下が載せてあり、床の上には型紙と、假縫の黒い短衣が落ちてゐる。隣の間では二人の老婆が、狼狽した氣忙しない手振りで、床の上から型紙や白墨のきれ端を拾つてゐる。……

「ひどく取散かして居りましてお許し下さいまし」とチカモーソフ夫人は言つた。

チカモーソフ夫人は私と話しながらも、型紙の片附けがまだ濟まない隣の間を、當惑げにちらちらと盗み見た。扉もやはり當惑してゐる樣子で、一二寸開いて見ては、また閉つた。

「何か御用なのかい？」とチカモーソフ夫人は扉に向つて話掛けた。

「私の襟飾りはどこにありますの？　あのお父樣にくうるすくから送つて戴いた？……」と扉の蔭から

女の聲が訊ねた。

「ああ、マリイなのかい？……ね、今は駄目ですよ……はじめてのお客樣がお見えになつて被入しやるのですから……ルケーリヤに訊いて御覽。……」

『でも私達、佛蘭語が達者でせう？』と私はチカモーソフ夫人の眼のなかに讀んだ。滿足のために紅くなつてゐた。

やがて扉は開いて、脊の高い瘠せた、年の頃は十九ほどと見える一人の少女の姿があらはれた。彼女は長いもすりんの服を着け金泥の帶をしてゐた。その帶に青貝細工の扇が吊るしてあつたのを私は今でも憶えてゐる。彼女はは入つて來て、席に坐り、それから燃えるやうに紅くなつた。やや痘斑のある長い鼻が先づ紅くなつた。紅色は鼻から眼に、眼から鬢のあたりに移つた。

「私の娘で御座います」とチカモーソフ夫人は歌ふやうに言つた、「そして、マーネチカ、この若いお方はね……」

一通り挨拶が濟むと私は、實に澤山の型紙がおありなので驚きました、と述べた。母親と娘は眼を伏せてしまつた。

「私共の町では昇天節の日に市が立ちますの」と母親は言つた、「市が立ちますと私共は布地を澤山に購めまして、それを次の市まで丸一年かかつて縫ひ上げますの。私共は縫物を外へ出すやうなことは決して致しません。宅のピョートル・ステパアヌイチは大して頂いて居りませんのですから、私共とても贅

澤は致せませんの。縫物も自分達で致さなければ。……」

「ですが、こんなに澤山の御衣裳をお召しになるのでせうか？ お見受けするところ、お二方だけのやうですが。」

「まあ……どうしてこんなに澤山に着られますものですか。これは着るのでは御座いませんの。みんな、――これの嫁入仕度ですの。」

「あら、ママ、何を仰言るの？」と娘は言つて、斑らに紅くなつた。「この方が本當になさるぢやありませんか。……私、決してお嫁になんぞ參りませんわ。參りませんわ。」

娘はさう言つた。けれど『お嫁に』と言つたとき、その眼は燃えたやうであつた。

お茶とビスケットと牛酪（バタ）とジャムが運ばれた。それからクリイムを掛けた夷苺が出た。七時になると六皿から成る夜食が出た。ところが、この夜食の最中に私は大きな欠伸の聲を聞いた。誰やらが隣の部屋にゐて大きく欠伸をしたらしい。私は驚いて扉の方を振向いた。あんな欠伸は男でなければ出來ないに相違ない。

「あれは宅の弟のエゴール・セミョーヌイチですの……」とチカモーソフ夫人は私の驚き顔に氣附いて説明した、「昨年から私共の所に參つて居りますの。あれの失禮をお許し下さいまし。あれは貴方のお前には出られませんの。とても變屈人でして……人様の前に出ますと、もうどうしてよいやら分りませんのです……坊さんになる心算（つもり）で居りますの。……今までのお勤めでとても酷い心の傷手を受けましたの

ですよ。……で、その傷手のために……」

夜食が濟むとチカモーソフ夫人は私に、エゴール・セミョーヌイチが後で教會に獻納するため自分の手で刺繡つてゐる聖帶を見せて吳れた。マーネチカは一瞬間だけその含羞を棄てて、彼女がパパのために刺繡してゐる莨入れを見せて吳れた。私がその腕前に驚嘆したやうな振りをすると、彼女はまた眞紅になつて母親の耳に口を寄せて何やら囁いた。すると母親は一ぺんに生き生きとして來て、私を納戸へと案内するのであつた。納戸には大トランクが五つと、澤山の小トランクや箱が置いてあつた。

「これも……みんなあれの嫁入仕度で御座います」と母親は囁いた、「私共で縫ひましたの。」

その陰氣なトランクの山に眼を投げてから、私は愛想のいい女主人たちに別れを述べた。彼等は私に、またいつか必ず訪れるやうに約束させた。

私はこの約束を、最初の訪問から數へて七年の後にやつと實行することになつた。丁度私は或る訴訟事件の鑑定人として、この小さな町へ派遣されたのである。

その家に一歩踏み入ると、また同じ「まあ！」といふ木魂を聞いた。……私は見忘れられてはゐなかつた。……その筈なのである。私の最初の訪問は彼等の生活にとつて大事件であつたのだし、殆ど事件の起らぬ場所では一つの事件は長く記憶されてゐるものだからである。

私が客間には入つて行つた時、前よりも肥つて髮の白くなりかけた母親が、床の上を這ひ廻りながら青の布地を裁つてゐる所であつた。娘は長椅子に掛けて刺繡をしてゐた。同じく散亂してゐる型紙、同

じやうな蠶虫埃の臭ひ、同じく隅の缺けた肖像畫。……けれど、變つてゐたことが一つあつた。僧正の肖像の隣に、ピョートル・セミョーヌイチの肖像が掲げてあり、婦人たちは喪服を着けてゐた。ピョートル・セミョーヌイチは大將に列せられて一週間後に亡くなつたのであつた。

思ひ出話がはじまつた。……大將夫人は涙を滾した。

「私共は悲しみに鎖されて居りますの」と彼女は言つた、「御承知でも御座いませうが、宅はもう亡くなりました。私はもう娘とたつた二人きりになつてしまひ、私共のことを見て呉れるものは誰も居りませんの。そりや、エゴール・セミョーヌイチは存命して居りますけれど、あれに就てはもう碌なお話は御座いません。修道院には到頭入れて頂けませんでした。……あれが……あんまり強い飲物を頂くものですから。それで只今ではもう自棄になつて、もつと頂くやうになりましたのですよ。私、貴族團長の方にお縋りして見ようと存じますわ。ねえ、どうで御座いませう、彼はもう何遍もトランクを開けて……マーネチカの折角の嫁入仕度を引つ張り出しては、巡禮どもに施してしまひました。お蔭でトランクが二つも空になつて仕舞ひましたの。この儘で續いて參りますと、マーネチカの嫁入仕度はすつかり無くなつてしまひますわ。……」

「ママ、何を仰言るの！」とマーネチカは言つて、どぎまぎした、「この方が本當になさるぢやありませんか。どんな事をお考へになるか分りませんわ。……私は決して決してお嫁になど參りませんわ。」

マーネチカは感動と希望の眸で天井の方を振り仰いだ。今言つた言葉に自分でも信を置いてゐない樣

子であつた。

玄關の方に、フロックを着て長靴の代りにゴム靴を穿き、そして額際のひどく禿げ上つた小男の姿が、ちらと見えたと思ふと、忽ち鼠のやうに走り過ぎた。

『あれがエゴール・セミョーヌイチだ』と私は思つた。

私は母親と娘を交る交る眺めてゐた。二人とも恐ろしいほど老けて骨張つて來てゐた。母親の頭髮には銀が流れてゐるし、娘は色褪せ凋んで、母親に五つとは違はない妹のやうに見えた。

「私、貴族團長の方にお眼にかかるつもりですの」と、一度言つたのを忘れて老婦人が言つた、「あの方にお縋りして見ようと存じますの。エゴール・セミョーヌイチは私共の縫ひ上げますものを片端から持ち出して、後生の爲とか申して施してしまひますの。マーネチカの嫁入仕度がみんな無くなつてしまひますわ。」

マーネチカは顔を紅らめた。けれど今度は何も言はなかつた。

「また新らしく縫ひ上げなければなりませんの。それに私共もお金持ちぢや御座いませんものね。私共身寄りのない二人きりで御座いますものね。」

「二人きりですわ。」とマーネチカも繰返した。

去年のこと、私はまた運命のままにこの家を訪れた。私が客間には入つて行くと、老いたるチカモーソフ夫人が坐つてゐた。彼女は全身を喪服に包み、新たな喪のしるしを纏つてゐた。そして長椅子の上

で何やら縫物をしてゐた。彼女と並んで、茶色のジャケツを着、長靴の代りに氈靴を穿いた老人が坐つてゐたが、私の姿を認めるが早いか飛び上つて後も見ずに客間から逃げ出してしまつた。……

私の挨拶に答へて、老媼はかすかに微笑んで言つた。

「またお目に掛れて嬉しう御座いますこと。」（ジユ・スユイ・シヤルメ・ド・ヴー・ルヴオアール・ムシユ）

「何をお縫ひですか？」と暫くして私は訊ねた。

「これは肌衣なのですの。縫ひ上がると敎父様の所へ匿して頂きに行きますの。さもないとエゴール・セミヨーヌイチが持ち出しますからね。私今では何もかも敎父様に預つていただきますの」と彼女は小聲に囁いた。

そして、卓上のすぐ眼の前の所に立ててある娘の肖像にちらと眼を投げて、溜息をついて言つた。

「私共、身寄りもない二人ぎりで御座いますものね。」

けれど娘は何處なのだらう。マーネチカは何處に居るのだらう。私はそれを訊ねて見る氣にはなれなかつた。この新たな深い喪の衣に身を包んでゐる老媼に、私はそれを訊ねて見る氣にはなれなかつた。私がその部屋に坐つてゐた間も、別れを告げて玄關に出てからも、マーネチカは姿を見せなかつた。私には彼女の聲も聞えず、彼女の內氣な物靜かな跫音（あしおと）も聞えなかつた。……

私はすべてを悟り、私の心は重苦しかつた。

小波瀾

ニコライ・イーリイッチ・ベリヤーエフと云ふのは彼得堡の家作持ちで、競馬氣狂で、そして榮養のいいてらてらした顔の、年の頃三十二位の若紳士であつた。その彼がある晩のこと、オリガ・イヴーノヴナ・イルニナ夫人に逢ひに行つた。この女は彼と同棲してゐた、或ひは彼自身の表現を借りれば、彼は彼女と退屈な長つたらしいロマンスを牽きずつてゐたのであつた。實際、このロマンスの甚だ興味があり崇高ですらあつた書出しの幾頁かは、とつくの昔に讀まれてしまつたので、今では何の珍らしいことも面白いことも無い頁が、だらだらと續いてゐるだけであつた。

相憎くオリガ・イヴーノヴナは留守だつたので、私達の主人公は客間の寢椅子に寢そべつて、彼女の歸宅を待ち受けることになつた。

「今晩は、ニコライ・イーリイッチ！」と男の兒の聲がした、「ママは直きに歸つて來ますよ。今ソーニヤと一緒に仕立屋さんへ行つたの。」

同じ客間の長椅子の上にオリガ・イヴーノヴナの息子でアリョーシャといふ八つになる兒が寢轉がつてゐた。彼はなかなか綺麗な男の兒で、天鵞絨のジャケツを着て黑の長沓下を穿いた姿は、まるで繪でも見るやうだつた。彼は繻子のクッションの上に寢て、最近に曲馬（サーカス）を見物したときに眼をつけた輕業師の眞似をしてゐるらしく、片手を交り番こに上へ蹴上げて居た。やがて上品に出來上つた脚が草疲（くたび）れてしまふと、今度は兩手を使ひ出して、猛烈に飛び上つて見たり、四つん這ひになつて逆立ちの稽古をやり始めた。そんな事をやつて居る彼の顔附はとても眞劍で、苦しさうに息をはづませたりして、まるで

神樣がこんなに一刻もぢつとして居られない身體をお授けになつたことを怨んでゐるやうに見えた。

「やあ、今晩は、先生」とベリヤーエフは言つた、「君だつたのか。ちつとも氣が附かなかつたなあ。お母さんは丈夫かい？」

アリョーシャは右手で左足の踵を摑み、頗る不自然な姿勢になつたかと思ふとくるりと引つくり返り、途端に飛び上つて房の一ぱい着いた大きなラムプの笠の蔭からベリヤーエフの顔を覗き込んだ。

「さあ何て言ふのかなあ？」と少年はちよつと肩を搖すつて答へた、「本當を言ふと僕のママは何時だつて丈夫ぢやないんですよ。ママは女でせう、ところが女つてものは、ニコライ・イーリイッチ、しよつ中どこかしら痛いんですよ。」

ベリヤーエフは手持無沙汰だつたので、アリョーシャの顔を眺めはじめた。彼はオリガ・イヴーノヴナと今のやうな關係になつてから、まだ一度もこの男の兒に注意を向けたこともなく、全くその存在を無視してゐた。男の兒は彼の眼の前にいつも姿を見せた。けれど彼は、何故この兒が居るのか、どんな役目をしてゐるのか、そんな事は考へて見ようとも思はなかつた。

夕暮の薄ら明りに浮び上つてゐるアリョーシャの、蒼白い額と瞬きをしない黑い眼を持つた顔は、不意にベリヤーエフに、ロマンスの最初の頃のオリガ・イヴーノヴナを思ひ出させた。そこで彼は、その兒を可愛がつてやらうといふ氣になつた。

「さあ先生、ここへお出で」と彼は言つた、「ひとつ小父さんにもつと近い所で顔を見せてお呉れ。」

少年は長椅子から一足飛びに跳び下りて、ベリヤーエフの方へ馳け寄つた。

「そこでと」と、少年の瘠せた肩に手を掛けて、ニコライ・イーリッチは始めた、「どうだね、元氣かい？」

「さあ何て言ふのかなあ？　前の方がもつとよかつたなあ。」

「ふむ、どうして？」

「譯は簡單なんですよ。前にはソーニャと一緒に唱歌と讀み方をやつてればよかつたんでせう？　ところが今度は佛蘭西語の詩を暗誦するんですもの。小父さん此の頃お髯を刈つたんでせう？」

「ああ、此の間さ。」

「さうだと思つたんだ。お髯がちやあんと短くなつてますもの。ちよつと觸らせて見せてよ。……かうやつて痛かない？」

「いいや、痛くなんかないさ。」

「何故一本きり引つ張ると痛くつて、澤山一ぺんに引つ張るとちつとも痛くないの？　ふうん。――でも小父さんは頰髯がないから可笑しいなあ。ここん所から剃つちまつて、それから横つちよのここん所は殘しとくんですよ。……」

少年はベリヤーエフの頸つ玉に卷きついて來て、彼の時計の鎖をいぢり始めた。

「僕は中學生になつたら」と彼は言つた、「ママに時計を買つて貰ふの。僕もこんな鎖にして貰はうや。……やあ、素敵なメタルだなあ！　パパのも丁度同じやうなんだけど、小父さんのはほら此處んとこに係があるでせう？　パパのは字がは入つてるの。……まん中んとこにはママの寫眞が入れたるんですよ。パパの今の鎖は違ふんですよ、環のぢやなくつて、リボンなの。……」

「どうして知つてるの？　君パパに會つたの？」

「僕？　ううん、……違ふの。僕……」

アリョーシャは紅くなつた。噓を見附けられたのですつかり困つてしまつて、メタルを爪で一生懸命に引つ搔きはじめた。ベリヤーエフは凝と少年の顏を見詰めてゐたが、やがて訊ねた。

「パパに會ふんだらう？」

「ううん、……違ふの。……」

「いけない、本當のことをお言ひ、噓をついちやいけないよ。……君の顏にちやんと噓ですつて書いてあるのさ。一ぺん言ひ出したんだから、もう胡麻かしても駄目なんだよ。さ、言つて御覽、會ふんだらう？　さ、小父さんと仲好しにならう。」

アリョーシャはもぢもぢしてゐた。

「でも小父さん、ママに言はない？」と少年が訊いた。

「そんなことないさ。」

「本當に？」

「ああ、本當さ。」

「小父さん、誓ふの？」

「やれやれ、困つた坊ちやんだね。この小父さんを何だと思つてるの？」

　アリョーシャはあたりを見廻した。それから眼をとても大きくして、彼の耳にささやいた。

「ただお願ひですからママに言はないでね。……誰にも言はないでね、秘密なんだから。もしこれがママに知れたら、僕もソーニャもベラゲーヤも酷い目に逢はされるんだから。……ぢや、僕言ひますよ。僕とソーニャは毎週火曜と金曜にパパに會ふんです。夕飯の前にベラゲーヤが僕たちを散歩に連れて出ると、僕たちはアプフェル喫茶店へ行くんです。するともうパパが其處で待つてるの。……パパはいつも仕切のついた部屋に坐つてるの。あすこには大理石の素敵なテーブルや、脊中のない鵞鳥の恰好をした灰皿があるんですよ。……」

「それから何をするの？」

「何にもしないの。はじめに今日はを言つて、それからみんなでテーブルの廻りに坐ると、パパは僕達に珈琲やパイを御馳走して呉れるの。ソーニャは肉のはひつたパイを食べるでせう。けど僕は肉のはひつたのは大嫌ひなの。僕はキヤベツや卵のが好きなんです。僕たちうんと食べちまふものだから、後で夕御飯のときママに見附からないやうに、一生懸命澤山食べるんです。」

「それから何の話をするの？」

「パパと？　色んなこと話すの。パパは僕たちを接吻(キッス)して、抱きしめて、色んなとても滑稽な話をして

呉れるの。それからかうも言ふの、お前達が大きくなつたら引き取つてやるぞ、つて。ソーニャは厭だつて言ふけど、僕は賛成なの。そりやママが居ないと淋しいけど、僕その代り手紙を書きますよ。それよりか、お休みの日にママの家へお客様に行つてもいいぢやない？——ね、さうでせう？　パパは僕に馬を買つてやるつて言ふの。パパつてとてもいい人ですよ。何故ママが別々に住んで、逢つてはいけないつて言ふのか僕解らないなあ。パパはとてもママが好きなんですよ。會ふたんびに、ママは丈夫かい、何をしてるね、つて訊くんですもの。ママが病氣だつて言ふと、パパは斯うこんなにして兩手で頭を抱へて……それから、そこらぢう歩き廻るんです。いつでも僕たちに、ママの言ふことを聽くんだぞ、大事にするんだぞつて頼むの。ねえ、小父さん、僕たち不幸せなんでせう？」

「ふむ……何故さう思ふの？」

「パパがさう言ふの。お前達は不幸せな子供だなあ、つて言ふの。それを聞くと僕ぞつとするんです。お前達も不幸せだ、俺も不幸せだ、ママも不幸せだ、つて言ふの。それから、さあ神様にお前達のこともママのこともよくお願ひおし、つて。」

　アリョーシャは鳥の剝製を凝と見詰めて、そのまま考へ込んでしまつた。

「さうか……」とベリヤーエフは呟いた、「さうか、そんな風にやつてゐたんだね。喫茶店で會議をやつてゐたのか。で、ママは知らないの？」

「そりや、知りやしません。……どうして分るもんですか。ベラゲーヤはどうしたつて言ひつこは無い

し。一昨日パパは梨を御馳走して呉れましたよ。とても甘くつて、ジャムみたいの！　僕一つも食べちやつた。」

「ふむ、……で、何かね、……ねえ、パパはこの小父さんのことは何にも言はないの？」

「小父さんのこと？　さあ何て言つたらいいのかなあ。」

アリョーシヤは探るやうな眼附でベリヤーエフの顔をちらと見て、ちよつと肩を揺すつた。

「何にも變つたことなんか言やしませんよ。」

「ぢや例へば、どう言ふの？」

「小父さん、憤らない？」

「憤りなんかするものか。ぢや、小父さんの悪口を言ふの？」

「悪口は言はないの。だけど、つまり……小父さんのことを憤つてるの。ママが不幸せになつたのは小父さんのお蔭だつて言ふの。それから、小父さんが……ママを駄目にした、つて。ねえ、パパつて變な人ぢやない？　小父さんはいい人で、一度だつてママを叱つたことなんかない、つて僕言つてやるんだけど、パパは頭ばつかり振つてゐるんですもの。」

「すると、この小父さんがママを駄目にしたつて言ふんだね？」

「さうなの。憤らないでね、ニコライ・イーリッチ。」

ベリヤーエフは起ち上つた。暫らく凝と立つてゐたが、やがて部屋の中を歩き廻りはじめた。

「こりや全く奇妙な話だ……可笑な話だ。」と彼は肩を揺すり皮肉な笑ひを浮べながら呟くやうに言つた、「自分がぴんからきりまで悪い癖に、この俺が駄目にしただつて？　大した無垢の小羊があつたもんだ！　ぢや、つまり、この俺がお母さんを駄目にした、つてさうお前に言ふんだね？」

「さうなの、けど……ねえ、小父さん憤らないつて言つたぢやありませんか？」

「俺は憤りはしないさ。……それに、とに角お前の知つたことぢやない。いやはや、……まるでこれは大笑ひだ。この俺はまるで、鶏が味噌汁の中に跳びこんだやうな態だ。おまけに罪は俺にあるんださうだ。」

ベルの鳴るのが聞えた。少年は席を飛び立つたかと思ふと、駈け出して出て行つてしまつた。一分間ののち、一人の婦人が小さな女の兒を連れて客間には入つて來た。これがアリョーシヤの母親のオリガ・イヷーノヴナであつた。アリョーシヤも彼等の後から、兩手を振つて大聲に歌を歌ひながら、ぴよんぴよん跳ねてついて來た。ベリヤーエフはちよつと點頭(うなづ)いたまま、また部屋を行つたり來たりし續けた。

「そりや勿論、文句の持つて行き處はこの俺より外にはないからな」と彼は鼻をくんくん言はせながら呟いた。「あの男の言ふのは本當さ。あの男は成るほど侮辱を受けた亭主には違ひないさ。」

「それ、何のお話なの？」とオリガ・イヷーノヴナは訊ねた。

「何の話だつて？……まあ、お聽き。おまへの御亭主が飛んでもない話を觸れ歩いてるんだよ。この俺は大變な恥知らずの悪漢にされちまつたのさ。この俺がおまへや子供たちを駄目にしたんだとさ。おま

へ達はみんな不幸せで、俺だけが恐ろしく幸福なんだ。恐ろしく、まるで幸福なんだ！」

「私には何のことやら分りませんわ、ニコライ。一體何ですの？」

「ぢや、あの小つぽけな紳士に訊いて御覽」とベリヤーエフはアリョーシャを指さして言つた。

アリョーシャは眞紅な顔になつた。それから急に蒼ざめて行つた。顔ぢうが恐怖のために歪んでゐた。

「ニコライ・イーリイッチ」と彼は鋭くささやいた、「シッ。」

オリガ・イヴーノヴナは呆れ顔でアリョーシャを眺め、ベリヤーエフを眺め、それからまたアリョーシャを見た。

「訊いて御覽つたら！」とベリヤーエフは續けた、「おまへの所のベラゲーヤは大變な引きずり女だぞ。子供たちを喫茶店へ引つ張つて行つて、パパさんに面會させるんだ。だがその事ぢやない。問題は、パパさんが受難者で、この俺が惡者でならず者で、おまへ達二人の生活を滅茶滅茶にしちまつたんだ。……」

「ニコライ・イーリイッチ！」とアリョーシャは呻いた、「約束したぢやないの！」

「ええ、默つてろ！」とベリヤーエフは手を打振つた、「これは約束なんぞより大事なことなんだ。俺は僞善は我慢出來ん、嘘は。」

「ちつとも分りませんわ」とオリガ・イヴーノヴナは言つた。その眼に涙がきらきらした、「ねえ、リョーニカ」と彼女は伜を息子の方へ向けて、「お前はお父さんにお會ひなの？」

アリョーシャには母親の聲は聞えなかつた。彼は恐ろしさうな顔でベリヤーエフを見詰めてゐた。

「そんな事があるものですか！」と母親は言つた、「ベラゲーヤに訊いて見ませう。」

オリガ・イヴーノヴナは部屋を出て行つた。

「ねえ、小父さんは約束したぢやないの！」とアリョーシャは身體ぢうを顫はしながら言つた。

ベリヤーエフは少年に手を振つて、やはり歩き廻つてゐた。彼は自分の受けた恥辱のことばかりに心を奪はれてゐたので、また元通りに少年の存在を忘れてゐた。この大きな眞面目な男は子供のことなんぞ構つては居られなかつたのであつた。

アリョーシャは部屋の隅の方に坐つて、如何にも恐ろしくて堪らない樣子で、自分が瞞された次第をソーニャに物語つてゐた。彼はぶるぶると身顫ひがとまらないで、吃つたり泣いたりした。こんなに粗粗しい仕方で嘘と顔を突き合せたのは生れてはじめてであつた。甘い梨や、パイや、高い時計やのほかにも、この世の中にはまだ別の色々な事のあることを、彼はこれ迄知らずに居たのであつた。從つてそれに附ける名が子供の言葉にはないのであつた。

マリ・デル (MARI D'ELLE)

　その晩は身體が明いてゐた。オペラの歌姫のナターリヤ・アンドレーエヴナ・ブローニナ（嫁入り先の姓で言へばニキーチナだが）は、全身を安息にうち任せて寢室に横になつてゐた。彼女は快よい夢見心地のうちに、何處か遠い町にお祖母さんや伯母さんと一緒に暮してゐる自分の小さな娘のことを思ひ浮べる。……彼女にとつては見物や花束や新聞の短評や贔負の人々よりも、この子供の方がよつぽど大切だつた。子供のことなら夜明けまで思ひつづけてゐてもよかつた。彼女の心は幸福と平和で一ぱいになつてゐる。ただ一つの願ひは、かうして誰にも邪魔されずに横たはつて、まどろむともなく自分の小さな娘を夢みてゐることだけであつた。

　不圖、歌姫はぎよつとして眼を大きく見開いた。玄關で急に粗々しいベルの音がしたのである。十秒もたたぬうちに第二のベルが鳴り、また第三のベルが鳴る。やがて扉がどたんと開け放たれて、誰かが馬のやうに足を踏みならしながら、大きな鼻息を立てながら、寒いのでふうふう言ひながら玄關に上つて來た。

「畜生め、外套掛ける場所もないぢやないか！」と歌姫の耳に嗄れたバスが響いて來る、「有名な歌姫の君、このざまを御覽じませ、だ。年五千も取るくせに、帽子掛一つ買へないんだ！」

「うちの人だわ」と歌姫は眉を顰めた、「きつとまた誰か泊り客を引つぱつて來たんだわ。……ああ、堪らない。」

　もう平和どころではなかつた。誰かが立てるとても大きな鼻息と、ゴム靴を脱ぎ棄てる物音とがやつとの事で鎭まると、今度は彼女の寢室の中を誰やら拔き足で歩いてゐる。……それは彼女の良人、つまり女優の夫（マリ・デル）であるデニース・ペトローヴィチ・ニキーチンであつた。一陣のひやりとする風とブランデーの臭が彼のお土産だ。彼は何時までも寢室の中を歩き廻つてゐる。苦しさうな息を吐き、暗闇の椅子に躓きながら、どうやら何か探してゐるらしかつた。……

「何探してるのよ？」と彼の妻はその騷ぎが我慢しきれなくなつて到頭うなつた、「あんたのお蔭で目が覺めちまつたわ。」

「僕あマッチを探してるんだよ。君あ……君あ、ぢや未だ睡つちやゐなかつたんだね。よおし、そいぢや君に傳言（ことづけ）があつたぞ……宜しくつて言ひやがつたつけが……胴忘れしたぞ……ほら、しよつ中お前に花束を屆けて來る藥罐の先生さ……ザグヴォーズキンよ。……今奴と一緒だつたんだ。」

「あんな人の所へ何しに行つたの？」

「いや、別に何でもないさ……僕達あかう仲よく坐つて話し込んで、一杯やつただけさ。なあナタリイ、お前が何と言はうと俺ああの男は大嫌ひだぞ。斷然嫌ひだぞ。ありや稀に見る大馬鹿だ。奴あ金持の資本家だ。奴にあ六十萬からあるんだ、――と言つただけぢや、お前にあ分るまいな。奴の金と來た日にや犬ころに大根をやつた程の役にも立たないんだ。つまり、自分でも食ひやがらない癖に、他人にも遣らないんだ。金あ、かう循環しなくちあいけない。所が奴と來たら確り握り込んでやがつて、離すのをびくびくしてるんだ。……居眠りしてる資本が何になるもんか。居眠り資本は草の葉つぱも同然さ。」

マリ・デルは暗闇のなかを手搜りにベッドの端に辿りついて、ふうふう言ひながら妻の足の所に坐つた。

「それ所か、居眠り資本は害毒さ」と彼は續ける、「何故ロシヤぢや事業が不振だかか知つてるかい。そりや居眠り資本がどつさりあるからさ。投資をびくびくしてやがるんだ。所が、イギリスとなりやあ、まるで譯が違はあ。……なあ、おい、イギリスにあザグヴォズキンみたいな變てこな奴あ一人だつて居ないんだ……あすこぢや一文の金だつて循環してるんだぜ……さうとも……あすこぢや錢函に錠を掛けとくやうな吝な野郎は居ないんだ。……」

「さあ、もう澤山よ。私、睡いんだから。」

「もう直き、もう直き……何の話をしてたつけなあ？　ああ、さうだ……この世智辛え世の中によ、ザグヴォズキンみたいな野郎はぶらんこ往生だつて勿體ない位さ。……奴あ頓痴氣の上に惡黨だ……つまり頓痴氣だ。……僕が奴に擔保なしの借金を申込んだつてそれがなんだ、――え、これ程確かな投資はないこと位あ三つ兒だつて御承知だぞ。所があの驢馬め、厭だつて抜かしやがる。一萬出しやあ十萬になつて返つて來るんだ。一年たちやあ又十萬ほど轉り込むんだ。僕あ賴むやうにして話してやつたんだぞ。……所が奴あ出しやがらないんだ、大間拔め！」

「あんたは、まさか私からと言つて借金を申込んだんぢやないでせうね？」

「ふむ……妙な御質問だね……」とマリ・デルは氣嫌を損ねた、「どつち途、僕からつて言つた方が、お

前からなんて言ふよりや、奴にあ一萬投げ出し易からうぜ。お前はたかが女だ、所が僕あかう見えても男一匹だ、しかも事業好きの男と來てる。僕あどんな目論見を奴に話してやつたか分るかい？　泡沫(あぶく)でも空中樓閣でもないんだ、そりやもう、ちやんと確實極まる、その肝腎要つて奴さ。解りのいい人間にぶつかつて見ろ、この目論見だけで二萬は投げ出すだらうぜ。僕がお前に話してやるとすりやあ、お前にだつてその事は解らあ。ただお前が……饒舌るんぢやないぞ……一言もだぞ……待てよ、お前にあもう話したやうな氣がするぞ。腸詰の皮のことを話したつけかな？」

「まあ、……だんだん伺つてゐますわ。」

「だからさう思つたんだ。……お前にあこの話の大眼目が分るかい？　今ぢや食料品屋も腸詰屋も、腸詰の皮あわざわざ高い金を拂つて地方から取寄せるんだ。そこだよ、つまりコーカサスぢやあんな皮は一文もしないんだ、みんな打つちやつちまふんだから、そいつをコーカサスから持つて來るんだ……さあさうなつたら、ええお前、腸詰屋は一體どつちで買ふと思ふい？　ここの屠殺場か、それとも僕からか？　そりや勿論僕から買ひ込むにきまつてるさ！　だつて値段が十分の一だからなあ。そこで一つ考へて見ようぢやないか――ペテルブルグやモスクヴやまた他の中心地で、この皮の取引高が年々……まあ五十萬ルーブルだとして見やう。つまり最小限度に見積つてだ。さうすると、つまりだ……」

「その話、明日でもいいでせう……後でも……」

「うん、まあさうだ。お前は睡いんだつたね、御免(パルドン)よ……僕はもう直ぐ……いや、お前が何をしようと

望まうと、資本さへありあ何處でだつて、何處へ行つたつて甘い仕事が出來るんだ。……資本さへありあ只の煙草の吸口からだつて百萬長者になれるんだ。……例へばお前の芝居の方にしてもだ。一體何故レントフスキイが痛い目を見たか分るかい？ 譯ぁ至極簡單さ。奴ぁ初手から間違つてたんだ。奴ぁ資本もない癖に、いきなり短兵急に始めやがつたんだ。……先づ最初に資本の用意をしてから、そろそろと用心深くやりさへすりやよかつたんだ。……いま時ぢや芝居で一儲けするなんざぁ、私立だつて國民劇場だつて易々たるものさね。……立派な脚本を上演して、場代をうんと安くして、それで當りさへすりあ、初めの年に十萬は儲かるさね。……お前にぁ分らないが、僕の言ふ事ぁ本當なんだ。……お前は資本を貯めとくのが好きなんだ。ね、さうだらう？ だからお前はつまり、頓痴氣のザグヴオズキンと同じことなのさ。ただ積んで置くだけで、どうしようつて事もないんだ。……人の言ふことなんか天で聽かうともしないんだ……循環させる心算がありや、いつそ初めから躊躇しない、つて連中なんだ。…………私立劇場なんなら、初めは五千ありあ充分なんだぜ。……だが勿論レントフスキイみたいなへまはやらないぞ……只内輪に始めるんだ……小規模にな。僕はもう支配人も探し出してあるし、適當な小屋も物色したるんだ。……無いのは金だけさ。……お前がも少し解りのいい女なら、五分利なんて吝なのとはとつくの昔にお別れが出來るになぁ……あんな優先株なんて……」

「いいえ、有難う……もうあんたには散々に騙り取られたことよ……さ、一人にして頂戴、もう罰は充分ですわ……」

「お前が女だてらに議論を吹つ掛けるんなら、僕ぁ勿論……」とニキーチンは起き上りながら嘆息した、

「勿論そりあ……」

「さ、一人にして下さいつたら……ね、向ふへ行つて、私を睡らして頂戴……あんたの馬鹿げた話はもう澤山よ。」

「ふん……そりあ極つてるさ……勿論！ 騙りだつて……掠奪だと……出した物あ覺えてるが、は入つた物ぁ忘れるつてね。」

「私、あんたから何一つ貰ひはしなくつてよ。」

「本當かい？ ぢや僕たちがまだ有名な唄うたひにならない前は、一體誰の金で暮してたんだ？ そいから、も一つ、一體誰がお前を貧乏暮しから拾ひ上げて、幸福にしてやつたんだ？ 一つ伺ひたいもんだね。それとも、もう忘れたのかい？」

「さ、寢床へいらつしやいよ。向ふへ行つて、そんな事は綺麗さつぱりと夢に流してお仕舞ひなさいよ。」

「僕を醉拂ひ扱ひにしようつてんだな？……貴婦人のお眼に僕がそんな卑しく見えるんなら、……僕ぁさつさとこの家から出て行くさ。」

「ぢやさうして。なかなかいい事だわ。」

「こつちも望む所だ。この上卑しいものにぁなりたくないからな。ぢや出て行くぞ。」

「まあ有難い！ さ、さつさと出て行つて頂戴！ さばさばしちまふわ。」

「そりや結構。一つどうなるか見やうぜ。」

ニキーチンは何やらぶつぶつ獨り言を言つては椅子に躓きながら、寢室を出て行つた。やがて玄關の方から低いつぶやきやゴム靴を亂暴に引摺る音が聞えて來て、到頭扉がばたんと閉つた。マリ・デルは本氣になつて憤つて、出て行つたのだ。

「ああ、有難い、あの人は出て行つたわ」と歌姫は思つた、「やつと睡れるわ。」

そしてまたうとうとと睡に落ちながら、彼女は自分のマリ・デルのことを考へた。彼がどんな人間であり、またどうして此の災難が舞ひ込んで來たかを。以前には彼はチルニゴフに住んで、そこで帳簿係をやつてゐた。その頃はマリ・デルとしてではなく、ただ普通の無名な存在として、彼は毎日の勤めに出掛けて行き、月給を貰つて、その氣紛れな目論見にしても高々新らしいギタアとか、流行のズボンとか琥珀のパイプとかの範圍を出なかつた。その彼がこんなに變つてしまつたのは、『花形の良人』になつてからの事であつた。彼女が初めて自分の舞臺に立ちたい希望を言ひ出したとき、彼は喚き立てたり憤慨したり彼女の兩親に言つけたりした擧句、彼女を追ひ出してしまつた。で、彼女は夫の許しなしに舞臺に立つ破目になつた。その後、新聞や人の口から彼女が大層な收入だと聞き知ると、彼は『彼女を許し』そして帳簿を投げ出して彼女の食客になつてしまつた。

歌姫は自分の食客の姿をあらためて見直したとき、すつかりげつそりしてしまつた。一體何時そして何處でこの男は、新趣味や、上品さや、氣取りや、優雅さを習つたのだらう。一體何處でこの男は牡蠣だの樣々なブルゴーニュ葡萄酒なんぞを覺え込んだのだらう。彼に流行風な調髮や服裝を敎へ、またナターシャと呼ばずに『ナタイリ』なんぞと呼ぶことを敎へたのだらう？

「不思議なことだわ」と歌姫は考へた、「昔あの人は月給だけで暮してゐたのに、今ぢや日に百ルーブルあつても足りないんだもの。昔は何か可笑しなことを言ひはしまいかと小學生の前へ出てさへびくびくしてゐたのに、今ぢや公爵の前へ出たつて馴れ馴れし過ぎる程にするんだもの。……本當に穢しい惡ものめ。」

けれどその時、歌姫は再びぎよつとした。また玄關のベルが鳴つたのである。下女が腹を立てて、わざとスリッパをばたばた言はせながら扉を開けに行つた。また誰やらがは入つて來て、馬みたいに足踏みをした。

「あの人は歸つて來たんだわ」と歌姫は思つた、「何時になつたら平和な氣持になれるんだらう？胸が惡くなるわ！」

彼女の柳眉は見る見る逆立つた。

「待つてるがいい……今こそこの茶番のやり方を敎へ込んだげるから！あんたは出て行くの！この私が追ひ出してやる。」

歌姫は飛び上つて、跣足のままで驅け出した。そして自分の夫（マリ）が寢室にしてゐる應接間へ飛び込んだ。夫は丁度着物を脫いで、それを椅子の上に丁寧に疊みかけてゐる所だつた。

「あんたは出て行つたのよ！」と彼女は憎惡に眼をきらきらさせながら言つた、「何だつてまた歸つて來たの？」

ニキーチンは默つて鼻をすすつてゐた。

「あんたは出て行つたのよ。さあ、どうぞたつた今姿を消して下さいまし。さ、たつた今！　聞えるの？」

マリ・デルは咳拂ひをして、妻から眼をそらせながらズボン吊りを外した。

「ま、何て人でせう！　あんたが出て行かないなら、私が出て行くわ」と歌姫は跣足で地團太を踏み、夫を血走つた眼で睨みつけながら言ひ續けた、「私が出て行くわ！　聞えるの、あんたの耳！……恥知らずの、碌でなしの、惡者の、ごますりめ！　出てらつしやい！」

「おい、おい、人樣の前ぢや、ちつとは羞しがるものだぜ」と夫はつぶやいた。

歌姫はまはりを見廻した。すると、やつとその時、まるで役者みたいな感じの見知らぬ顔を見出した。……歌姫の裸かの肩や跣足を出せられたので、頗る當惑しきつて床に穴があればもぐり込みたいやうな顔附だつた。

「紹介しよう……」とニキーチンが言つた、「ベズボージュニコフ、地方巡業の支配人だ。」

歌姫はきやつと叫んだまま、自分の寢室に駈け戻つて行つた。

「そら、御覽の通りさ……」とマリ・デルは安樂椅子に大の字なりに寢轉びながら言つた、「つい今の

今までは蜜みたいにべたべたしてたんだ……わが愛人よ、可愛き君よ、いとしい人よ、接吻を、抱擁を、つて風にね。……所が君、事ひと度お金のことに及ばうものなら忽ち……御覽の通りさ……お金は君、偉大なものだよ……ぢや、お眠み。」

一分の後はもう高鼾きだつた。

天才

　避暑がてら、士官の後家さんの別莊に間借りをしてゐる畫家のエゴール・サヴイチは、いま自分の部屋の寢床に腰かけて、朝のメランコリイに耽つてゐる最中である。庭はもうすつかり秋の眺めになつてゐる。重苦しい、頗る拙く出來上つた層雲が、折角の大空を臺無しにしてゐる。肌を刺し貫ぬくやうな冷めたい風が吹き、樹木は情無さうな泣面をして一方へばかり身をねぢ曲げてゐる。大氣のなかにも地の上にも、黄色い木の葉がくるくる舞ひをするのが見える。さらば、夏よ！　この大自然の憂悶は、もし畫家の眼を以て觀察するならば、亦一種の美であり詩であるには相違なからう。だが、今エゴール・サヴイチは美どころの騷ぎではない。彼はすつかり鬱ぎの蟲にとりつかれて、せめてもの慰藉と言へば、明日は最早この別莊に居ないのだといふ事だけである。寢臺の上も、椅子の上も、卓子の上も、床の上も、何處も此處も褥だの、くちやくちやに丸めた毛布だの、バスケットだのの山である。部屋の中は散らかした儘で帚も入れてない。窓からは捺染更紗のカーテンも引つ剝した。明日は都會へ引越しだ。

　主婦の後家さんは留守である。明日は引越しだから荷馬車を探しに出て行つた。今年二十になる娘のカーチヤは、口喧しいお母さんの留守を利用して、もう大分長いこと青年の部屋に坐り込んでゐる。畫家は明日のこの家を出て行くのだが、彼女には言ひたいことが山ほどある。彼女はいくら饒舌つても饒舌つても、言ひたい事の十分の一しか言つてないやうな氣がする。彼女は眼を泪で一ぱいにして、畫家の尨毛の頭に見入つてゐる。見てゐると悲しくもあり嬉しくもある。エゴール・サヴイチは醜惡なほど、獸めいてゐるほど、尨毛である。髮の毛は肩骨までも垂れてゐるし、髯は首にも鼻の孔にも耳朶にも生

ひ茂つてゐるし、眼玉は繁りに繁つて垂れ下つた眉毛に隱れて見えない。實に何とも言ひやうのない繁りやう絡まりやうである。蠅でも油蟲でも一旦この密林に迷ひ込んだら最後、死ぬまで歸り途は見附かるまい。

　エゴール・サヴイチはカーチヤの言ふことに耳を澄しながら、欠伸をする。草疲れきつてゐるのだ。やがてカーチヤがめそめそ泣き出すと、彼は垂れ下つた眉毛越しにぎろりと睨んで顏を顰め、それから重々しい太い低音を出す。――

「僕は結婚なんか出來ないんだ。」

「どうしてなのよ？」とカーチヤは大人しく訊ねる。

「何故つて、畫家は勿論のこと、一般に藝術に携はる人間は、決して結婚なんかしちやいけないからさ。藝術家は自由でなければならん。」

「私があんたの邪魔をすると思ふの？　エゴール・サヴイチ。」

「僕は自分一個のことを言つてるんぢやないのさ。一般的に論じてるんだ。……有名な文士や畫家は決して、結婚なんかしないものなんだ。」

「あんたが今に有名になる位のこと、私だつてちやんと知つてるわ。でも、私の身にもなつて頂戴な。私はママがこはいの。……ママはあんな口喧しい怒り蟲でせう。だから、一旦あんたが私を貰つて下さるお心算ぢやなくつて、ただあんなに……と分つたら最後、私を酷い目にあはせるにきまつてるわ。あ

あ、私困るわ。おまけに、あんたまだ間代が拂つてないぢやないの。」
「畜生、拂つちまふとも。……」
エゴール・サヴイチは起き上つて、部屋の中を歩きはじめる。
「洋行がしたいなあ」と彼は言ふ。
そして畫家は、洋行ほど雜作のないことはないんだと説明する。畫を一枚描いて、それを賣りさへすればいいのだ、と。
「そりやさうね」とカーチャは賛成する、「あんたこの夏の中に何故描かなかつたの？」
「こんな物置小屋で仕事が出來ると思つてゐるのかい？」と無念さうに畫家は言ふ。「第一モデルも居ないぢやないか。」
階下の何處かでどしんと扉の音がする。刻一刻、母親の歸りに氣を配つてゐたカーチャは、急いで席を立つて逃げて行く。畫家は一人ぼつちになる。
彼は長いこと部屋の中を隅から隅へ歩き廻る。椅子やがらくたの山の間を縫つて歩く。歸つて來た後家さんが皿茶碗をがちやがちや言はせながら、何處やらの百姓が一車二留と吹掛けたと憤慨してゐるのが聞えて來る。胸のむかついて來たエゴール・サヴイチは食器棚の前に立停つて、ヴオトカの壜をいつまでも睨みつけてゐる。
「一そのこと死んでお仕舞ひ！」と後家さんがカーチャに飛び掛つて行くのが聞える、「憎まれつ子世に

憚る、つてお前さんの事だよ！」
畫家は思ひきつて一杯ぐつとやる。すると心の暗雲は徐々に晴れ渡つて、あらゆる内部感覺が自分の身のなかで微笑してゐるやうに感じられる。彼は空想を開始する。……
自分が有名になつた時のことに思ひは馳せる。勿論未來の作物を想像することは出來ない。だが新聞が自分の事を大いに書き立て、繪葉書屋の店頭に自分の繪葉書が並び、友人たちが自分を羨望の眼で眺める光景は歴然として浮び上る。次に豪奢な應接間に坐つて美しい女性の崇拜者に取卷かれてゐる光景を描いて見る。けれど生れて以來應接間といふ物を見たことのない彼には、この光景はどうももやもやした雲霧にとざされ勝ちである。女性の崇拜者もやはりうまく出て來ない。カーチャを別にすれば、彼は生れて此の方一人の崇拜者にも、一人の良家の娘にも出喰さなかつたのである。人生を知らぬ人間には書物で人生を想像するといふやり方がある。ところがエゴール・サヴイチは書物も知らない。ゴーゴリを讀んで見ようとした事があつたが、二頁目で眠つてしまつた。……
「ちつとも燃え附かないよ、ええ、ぢれつたい！」と何處か階下で、後家さんがサモワルの仕度をしながら怒鳴る、「カーチヤ、炭をお呉れ！」
夢想の畫家は誰かに自分の希望や空想のお裾分けをしてやりたくなる。彼は臺所へ降りて行く。でぶでぶした後家さんとカーチヤがサモワルの炭酸瓦斯を吸ひながら、燻つた爐の廻りで轉手古舞ひをしてゐる。彼は大甕の傍りの腰掛にお神輿を据ゑて、やり始める。

「畫家つて商賣は豪勢ですぜ。行きたい所へはすぐ出掛ける。やりたい事はすぐ出來る。勤めに出ることも要らないし、泥の臭も嗅がないで濟む。……課長もなければ上役もなし。……この僕が僕の上役なんですからね。まあそんな具合でゐながら、人類にはなかなかの大貢獻をするんですよ。」

晝飯が濟むと彼は『休憩』に取掛る。大概は夕闇迫るまで睡眠する。ところが今日は、晝飯が濟むと間もなく、誰やらが自分の脚を引つ張つて、自分の名を呼びながらげらげら笑つてゐるのを感じる。彼が眼をあけると、仲間のウクレイキンが立つてゐる。これは風景畫家で、この夏をコストローマ縣で送つたのである。

「いよう」と彼は歡聲を上げる、「こりや珍客だ！」

握手と質問がはじまる。

「おい、何か持つて來たらう？ 君の事だから百枚位はスケッチをやつつけただらうな？」とエゴール・サヴイチは、ウクレイキンがトランクから財產を取り出すのをぢろぢろ眺めながら言ふ。

「うん、まあ何とかやつたさ。……君の方はどうだ？ 何か描いたかい？」

エゴール・サヴイチは寢臺の後ろにもぐり込んで、顏を眞赤にしながらやつとのことで框にはまつた畫布を引きづり出す。埃と蜘蛛の巢で見えない程である。

「そうら……『婚約者と別れたる後の窓邊の少女』つて言ふんだ」と彼は言ふ、「モデルを三日使つたんだぜ。でもまだ完成してないんだ。」

その畫は、開け放した窓邊に坐つてゐるカーチヤのどうやら輪廓だけが出てゐる。窓の外は小庭と藤色の遠景だ。ウクレイキンにはどうも感服出來ない。

「ふむ、……氣分は出てるな……それに表現もある」と彼は批評する、「遠景もよく出てゐる、だが……このブラッシは金切聲だよ……恐ろしく金切聲だよ！」

そこへ可愛いいヴオトカの壜が登場する。

夕方になると、友達で別莊の隣人であるコストイリヨーフといふ歷史畫家がエゴール・サヴイチを訪ねて來る。これは年の頃三十五ほどの小男で、矢張り將來有望な卵である。長い髮をして、シエクスピヤ風の襟のついたブルーズを着用して頗る威嚴を作つてゐる。ヴオトカを見ると顏を顰めて自分の胸の病を大いに悲しがつたが、親友の斷つての勸めに餘儀なく一杯をまづ呑み乾す。

「諸君、僕は素晴しいテエマを思ひ附いたですよ」と彼は一杯機嫌で言ひはじめる、「僕は何か斯う言つたネロと言つたやうな、つまりヘロデとか、まあクレペンチヤンとか言つたやうな、さもなければ、何かその、お解りですか？ つまりまあ、そんな風な破廉恥漢ですな……そして、これに基督敎のアイデヤを對照させるんですな。一方には大羅馬、そして一方には、ねえ、どうです、基督敎なんです。……私はその、靈が表現して見たいです……お解りですかな、その、靈がですよ。」

階下では後家さんが相變らず怒鳴つてゐる。

「カーチヤ、胡瓜をお呉れ！ シドロフん所へ行つてクヷスを取つてお出でつたら、このお轉婆！」

三人の仲間はまるで檻の中の狼のやうに、部屋の隅から隅へと濶歩する。頗る眞劍に、そして熱烈に、のべつ幕なしに饒舌つてゐる。三人とも魂を飛ばして昂奮してゐる。將來われ等の掌中に落ちるものは何ぞ？ 名聲である、富である、と言つた調子だ。……彼等は陽氣だ、そして幸福だ、彼等は勇敢に『未來』の眼をのぞき込んでゐる。

夜中の一時を廻つた頃コストイリョフは左樣ならを言つて、例のシェクスピヤ襟を直しながら家途をたどる。風景畫家の方は風俗畫家の部屋に泊ることになる。寢床には入る前、エゴール・サヴイチは水を飲みに臺所へと、蠟燭片手にふらふら降りて行く。眞暗な細い廊下には、カーチャが手を膝に組んで上眼を使ひながらトランクに腰掛けてゐる。彼女の蒼白い疲れきつた顔には幸福な微笑みが漂つてゐる。眼はきらきらしてゐる。……

「なんだ君なのか？ 何考へてるんだい？」とゴール・サヴイチは訊ねる。

「私、あなたがどんな有名な人になるだらうつて考へてゐる所なの。……」と彼女は半ば囁くやうに言ふ、「あなたがどんな偉い人になるだらうと思つて、私樂しみでならないのよ。……今のあなた方の話はすつかり聞いちまつたの。……私、だから空想してるの、……空想してるの……」

カーチャは幸福な笑聲を立てはじめる。それから泣き出して、兩手を恭々しく自分の神樣の肩に掛ける。

富籤

イヴン・ドミートリッチは中流階級の人間で、家族と一緒に年に千二百留(ルーブル)の收入で暮して、自分の運命に大いに滿足を感じてゐる男であつた。或る晩のこと夜食の後で、彼は長椅子の上で新聞を讀みはじめた。

「私、今日はうつかりして新聞も見なかつたのよ」と彼の細君が、食器の後片附けをしながら言つた。「當り籤が出てないか、ちよつと見て下さいな。」

「ああ、出てるよ」とイヴン・ドミートリッチは言つた、「だけど、お前の富札は質流れになつてるんぢやないのかい？」

「いいえ、火曜日に利子を入れて置いたのよ。」

「何番だつたね？」

「九四九九號の二十六番ですわ。」

「よしよし、……ひとつ探してやらう。……九四九九の二十六と。」

イヴン・ドミートリッチは籤運などは信用しない男であつたから、ほかの時なら何と言はれたつて當り籤の表など振り向きもしなかつたに相違ない。けれど今はほかに何のすることもないし、おまけに新聞が丁度眼の前にあるので、彼はついその氣になつて番號を上から下へと指で追つて行つた。すると忽ち、まるで彼の不信心を嘲笑ふかのやうに、九四九九といふ數字が彼の兩眼に跳びついて來た。彼はもう札の番號などには眼も呉れず見直しもしないで、いきなり新聞を膝の上に落したかと思ふと、まるで

自分の腹の上に冷水でもはね掛けられたやうに、鳩尾のところに冷やりと實にいい氣持がした。探つたいやうな、空恐ろしいやうな、妙に甘つたるい氣持がした。

「マーシャ、あつたぞ、九四九九が！」と彼は洞間聲を上げた。

細君は彼の喫驚りしたやうな呆れ返つたやうな顏をぢろぢろ眺めて、これは巫山戲てゐるのぢやないと思つた。

「本當に九四九九なの？」と彼女は顏色を變へて、折角疊んだ卓布(テーブルクロス)をまた卓の上に取落してしまつた。

「さうだ、本當なんだ……本當にあつたぞ！」

「でも、札の番號はどう？」

「あ、さうだつけ。まだ札の番號つて奴があるんだね。だが、お待ち。……ちよつとお待ち。いいや、それが何だと言ふんだ。どつち途、俺達の番號はあるんだ。どつち途だよ、解るかい？……」

イヴン・ドミートリッチは細君の顏を見ながら、まるで赤ん坊が何かきらきらする物を見せられた時のやうな、幅つたるいぽかんとした笑顏になつた。細君も笑ひ出した。彼がただ號の番號を言つただけで、この幸運の札の番號を急いで探さない所が、彼女にもやはり樂しみだつたのである。ひよつとしたら舞ひ込むのかも知れない幸運の期待で、自分の心を苛立たせ焦らすのは、何とまあわくわくして面白いんだらう！

「俺達の號はあつたんだ」とイヴン・ドミートリッチは少し默つてから言ひついだ、「つまり、俺達が當

つたのかも知れない見込があるんだ。見込だけなんだよ。けど、その見込は儼然としてあるんだ。」

「さうよ、だから見て御覧なさいよ。」

「待て、待て。幻滅の悲哀を味はふのはまだ後でもいいさ。上から二行目だから、つまり七萬五千留といふ譯だ。さうなるともうお金ぢやない、力だ、資本なんだぞ。今すぐ、ひよいとこの俺が表をのぞいて見る、――すると、ちやんと二十六なんだ。ええ、どうだね。俺達が本當に當つてゐたら、一體どうなるんだね？」

夫婦は思はず笑ひ出して、もう何も言はずに長いことお互の顔を見詰め合つてゐた。幸運が舞ひ込むかも知れないといふ考へで、二人ともすつかり間誤ついてしまつた。この七萬五千留で何をしようか、何を買はうか、何處へ出掛けやうか、――そんな事は思ひにも浮ばず口にも出せなかつた。彼等はただ、九四九九と七五〇〇〇といふ數字のことばかり考へてゐた。その數字ばかりを思ひに描いてゐた。大いに可能性のある幸福それ自身の方へは、どうした譯か考へが向かなかつた。

イヴン・ドミートリツチは新聞を兩手に握りつぶした儘、部屋の隅から隅へと二三回往復した。そしてやつと最初の深い感動がしづまつて來たとき、少しづつ夢想をやり始めた。

「俺達が當つたのだとしたら、どうなるんだ」と彼は言つた、「それこそ新生涯だ、大團圓だ。札はお前のだが、もしあれがこの俺のなら、俺は勿論まづ第一着に、二萬五千ほど投げ出して何か地所と言つたやうな不動産を買ひ込むね。それから一萬はそれに喰つついて來る色んな費用に充てる。造作のやり直

しとか、旅費とか、税金とか、そんなものにね。……あとの殘りの四萬は銀行へ預けて利子を取るんだ。……」

「さうね、地所は素敵だわ」と細君は言つて、兩手を膝の上に落しながら坐り込んだ。

「どこかツーラかオリヨル縣あたりがいゝな。……第一に、別莊なんかは要らないし、第二に、と言つて上り高は確かでなくちやあね。」

そして彼の想像のなかに色々な光景が群り寄せて來て、それが段々と愈々美しく愈々詩的になつて行つた。そのどの光景の中に坐つてゐる彼の姿も、みんな滿腹しきつて、安樂で、健康で、温いどころか熱いほどだつた。いま彼はオクローシカといふ氷のやうに冷めたい夏向きのスープを詰め込んで、川岸の熱いほど燒けた砂の上に仰向けに寢轉がる。それとも庭の菩提樹の蔭の方がいいかな。……とに角とても暑い。……小つぽけな男の兒や女の兒たちが、自分の身のぐるりを這ひ廻りながら、砂を掘つたり草のなかの瓢蟲を捕まへたりしてゐる。何にこれと言つて考へる事もない。ただ甘い夢想に耽つてゐる。今日も、明日も、明後日も勤めに出なくていいのだ、とそんなことを身體全體で感じてゐる。寢轉んでるのが厭きて來ると、今度は乾草の原つぱへ出かけたり、森へ茸をとりに行つたり、でなければ百姓が投網をするのを見物する。日が沈むと、タオルや石鹸を持つて緩りと歩いて水浴場へ行く。行つてからも別に急か急かせずに、悠々と着物を脱ぎ、裸かになつた胸を丁寧に掌で撫で廻してから水につかる。水の中には、ぼんやり透いて見える石鹸の環のまはりを、小つちやな魚たちがちらちらしてゐるし、

また青々した水草の搖れるのも見える。水浴が濟むと、クリームと牛乳入りのビスケットでお茶を飲むことにする。……晩は、散歩をするかそれとも近所の人達と骨牌をやる。

「さうね、地所が買へたらとてもいい事ね」と細君もやはり何やら空想しながら言つた。すつかり自分の考へで魔法にかかつてしまつてゐることは、その顏でよく解つた。

イヷン・ドミートリッチは引續いて秋の光景を描いて行つた。時雨、肌寒い晩方、それから小春日和。……この季節には庭や菜園や川岸などの散歩はいつもより少し長めにしなければなるまい。それは、さうしてすつかり身體を冷え切らせて置いてから、大きな盃でヷオトカをぐいとやるためなのだ。それから鹽漬の茸か茴香漬の胡瓜をちよつと撮んで、またもう一杯ぐつとやる。子供達は菜園から人參や大根の土の香のぷんぷんする奴を引つこ拔いて駈け出して來る。……やがて今度は長椅子に思ひきり手足を伸して寢そべり、何か繪入り雜誌を眺める。そのうちに、その雜誌を顏の上に伏せてチョッキの釦をはづし、うつらうつらと夢路を辿る。……

小春日和が過ぎると、曇つた陰氣な季節になる。夜晝の境目もなく長雨が降りはじめて、裸かになつた木々が泣く。冷めたいじめじめした風が吹く。犬も馬も鷄もみんなびしよ濡れで、しよげ返つて小さくなつてゐる。散歩どころか家から一足だつて出られはしない。一日ぢう部屋の中を行つたり來たりして、怨めしさうに陰氣な窓を睨んでゐなければならぬ。ああ退屈だ。

此處まで來たとき、イヷン・ドミートリッチは考へを中止して細君の方を見た。

「ねえ、マーシャ、俺はそれよりも外國へ出掛けるね」と彼は言つた。

そして彼は、晩秋になつて外國へ出掛けたらどんなに素晴しいだらうと考へはじめた。何處か、南佛か、伊太利か、それとも印度あたりへ。

「私だつて、きつと外國へ行きますわよ」と細君が言つた。「もういい加減で札の番號を見て頂戴。」

「お待ちよ、まあ、もう少しお待ちよ。……」

彼はまた部屋の中を歩き出して、空想をつづけた。こんな考へが浮んで來た。——本當に女房も外國へ出掛けるとしたらどんな事になるだらう。旅をするなら一人旅に限る。さもなければ、浮氣で明けつぱなしで、その時々のことしか考へぬ女達と一緒に限る。所が、俺の女房と來た日にや、旅行の間ぢう子供達のことばつかりくよくよ心配して話すだらう。溜息はつき通しについて、一哥出すにもびくびくと顫へるだらう。……イヷン・ペトローヴィチは細君が汽車の中で、どつさりの包だのバスケットだの合財袋のなかに埋つて坐つてゐる有樣を想像した。旅の疲れが出て頭痛がするとか、大變なお金を使つてしまつたとか言つて、溜息をつきながらぐずぐず言つてゐる。汽車が停ると自分は、お湯だのバタパンだの飲料水だのと言つて、停車場ぢうを駈け廻らなければなるまい。……女房は高いと言つて食堂車へはとても行くまい。……

『だが女房は俺にもとても吝々するだらうな』と彼は細君をぢろりと眺めて考へた。『あの札は女房ので、俺のぢやないんだからな。それにしても、一體女房なんか外國へ出掛けて何になるんだ。結局行かない

のも同じ事さ。ホテルに閉ぢ籠つたきりで、この俺まで傍から放しはしまい、……ちやんと解つてゐるさ。』

そして彼は生れて始めて、自分の細君がすつかり老け込んで、容色が落ちて、身體ぢう糠味噌の臭が滲み込んでしまつてゐ、一方自分の方はまだ若く、健康で、新鮮で、もう一度結婚してもいいほどの男振りなことに氣が附いた。

『そりや勿論こんなことはみんな、詰らぬ馬鹿げ切つた事さ』と彼は考へた、『だがだ、……女房が外國へ出かけてどうしようと言ふんだ。行つたつて何が解るものか。それだのに、女房はきつと出掛けるに相違ない、……ちやんと解つてるさ。……所が女房にとつちや本當の所、ナポリもクリンも同じことなんだ。ただ俺の邪魔がして見たいのさ。俺はきつと一々女房に束縛されちまふに相違ない。解つてるさ、お金を受取つたら最後、女の流儀ですぐさま錠前を六つも掛けてしまふのさ。……俺には拜ませても異れないんだ。……自分の親類にばかりばつぱして、この俺には一哥ごとに吝々するんだ。』

イヴン・ドミートリッチは細君の親類のことを思ひ出した。兄弟たち、姉妹たち、伯母さん達に伯父さん達、どれもこれもみんな錢が當つたことを耳にするや否や這ひ込んで來て、脂つこい笑顏を取繕ひながら乞食みたいに強請りはじめるだらう。實に根性のまがつた厭な奴らだ。一ぺん遣つたら後を引くし、若し遣らないと、呪つたり下らぬ事を言ひ觸らしたり、色んな仕返しをはじめるんだ。』

イヴン・ドミートリッチは今度は自分の方の親類を考へはじめた。すると今まで何の氣もなしに眺めてゐた彼等の顏附が、胸のむかつく程憎らしくなつた。

『實に何たる害蟲共だ！』と彼は思つた。

すると細君の顏までが厭な、憎らしいものに見えはじめた。細君に對する遺恨で胸のなかが煮えくり返つて、彼は憎々しげに考へた。

『この女は金に對する觀念なんかまるでないんだ。だから吝々するんだ。もし籤が當つたとしても、この俺には百留とは寄越すまい。あとの殘りは——錠前だ。』

そして彼は笑顏どころか、憎惡に燃えた眼附で細君を睨みすゑた。彼女の方でも嫌惡と怨恨のごちや交ぜになつた眼で夫を睨み返した。細君にも自分の計畫や思惑や、虹霓のやうな夢想があるのだつた。そして自分の夫が今何を空想してゐるか、とてもよく察しがついた。自分の當り籤に先づ第一に熊手を差し出す者は誰なのかを細君は知り拔いてゐたのであつた。

『他人の懷を當てにして、よくもそんないけづうづうしい事が考へられたものね！』と細君の眼が語つてゐた、『いやなことだわ、あなたにそんな事をさせてなるもんですか！』

夫は細君の眼を讀んだ。すると彼の胸は嫌惡で一ぱいになつてしまつた。そこで彼は細君をやつつけるために、構はず新聞の第四面に眼を投げると、いとも嚴そかな口調で讀み上げた。——

「九四九九號、第四十六番！　二十六番に非ず。」

希望も憎しみも、兩方とも一ぺんに消え失せてしまつた。たちまち、イヴン・ドミートリッチにも細君にも、その部屋が薄暗く狹苦しく見えはじめ、今しがた食べた夜食もがちつとも腹の足しに

ならずに、唯胃の腑の下の所にぽとんと溜つただけのやうな氣がした。宵の時間までが長つたらしく退屈で堪らなくなつた。……

「一體これは何といふ態だ！」とイヴン・ドミートリッチはそろそろだだを捏ねはじめた、「一歩あるけば、きつと紙屑を踏んづけるんだ。見ろ、この何だかの屑や殼を！一ぺんだつて箒を手に持つたこともないんだ。こいぢや、厭でも出て行きたくなる。惡魔めに浚はれて見たくなつちまふ。俺は出て行くぞ。そして一番先にぶつかつた柳の木で首を縊つちまふぞ！」

大ヴォローヂャと小ヴォローヂャ

「ね、馭者をやつて見てもいいでせう。私、馭者のとこへ行くわ！」とソフイヤ・リヴオヴナが聲高に言つた、「馭者さん、待つてよ。私、あんたの隣へ行くから。」

彼女が橇の中で起ち上ると夫のヴラヂーミル・ニキートイチと幼な友達のヴラヂーミル・ミハイルイチとは、倒れぬやうに彼女の腕を支へた。トロイカは疾走してゐる。

「だから、コニヤツクを飲ませてはいけないと言つたぢやないか」とヴラヂーミル・ニキートイチが連れの耳に忌々し氣に囁いた、「本當に君は何といふ男だ！」

大佐はこれまでの經驗で、自分の妻のソフイヤ・リヴオヴナのやうな女が、少し醉ひ加減ではしやぎ廻つた擧句は、きつとヒステリツクに笑ひ出し、それから泣き出すものなことを知つてゐた。家へ歸つても寢るどころか、濕布だ水藥だと騷がなければなるまいと、心配であつた。

「ブルルル！」ソフイヤ・リヴオヴナが叫んだ、「馭者をやるんだつてば！」

彼女はとても陽氣で、勝ち誇つたやうな氣持だつた。結婚の日からかぞへてここ二ケ月のあひだと言ふもの、自分がヤアギチ大佐と結婚したのはつまり打算からであり、また世間で言ふ自棄半分（パル・デピ）なのだつたといふ考へに、絶えず惱み通した、それが、やつと今日になつて、郊外の料理店にゐたとき、矢張り自分は夫を熱愛してゐるのだと悟つたのであつた。夫は、五十四といふ年齢に似合はぬ調和のとれた、器用な柔和な男で、氣の利いた洒落も飛ばせば、ジプシイの唄に合せて口吟んだりもした。實際この頃では、老人の方が若者より千倍も快活で、まるで老人と若者が持役の取り替へっこでもした樣である。

大佐は彼女の父親より二つも年上なのだが、それでゐてまだ二十三の彼女よりもずつと精力旺盛であり、生き生きと元氣がある以上、何の文句もない筈ではないか。

「ああ、私の夫はとても素敵だわ！」と彼女は思つた。

レストランで彼女は、以前の感情はもはや閃めきすらも殘つてゐないことを悟つた。幼な友達のヴラヂーミル・ミハイルイチ（約めてヴオローヂヤと呼んでゐたが）には、つい昨日まで半狂亂の態で、報いられぬ思慕を捧げてゐたのに、今ではすつかり何の氣もなくなつてしまつた。今晩の彼は不活潑で睡たげで、何の興味もないつまらぬ人間に思はれたし、何時もの事ながら、料理の勘定になると知らん顔で冷然と構へてゐる態度が、今夜といふ今夜こそ彼女にとつて、ひどく腹立たしかつた。「お金がないなら、家に坐つていらつしやいよ」と、さう言つてやりたい程であつた。勘定は大佐が一人でした。

樹立や電柱や斑ら雪が、絶えず彼女の眼をかすめ過ぎる所爲か、ひどく取り留めのない考へが後から後から浮んで來た。彼女は思つた――レストランでは百二十留（ルーブル）拂つた。ジプシイに百留やつた。明日になつて、もし氣が向けば、千留のお札を風に飛ばすことだつて出來る。それが、つい二た月前まで、つまり結婚する前は、自分のお金がたつた三留でもあつた例しがない。細々したものを買ふ時にも、一々お父さんにねだらなければならなかつた。何といふ變りやうだらう！

思ひはもつれて來た。自分がまだ十歳ほどの頃、現在の夫のヤアギチ大佐が叔母さんに言ひ寄つて、そのお蔭で叔母さんの身の破滅になつたと、家ぢうの者が噂してゐたことを思ひ出した。本當に、食堂

に出て來る時でも、叔母は眼を泣きはらしてゐたし、始終どこかへ外出勝ちであつた。可哀さうに、何處へ行つても心は安まるまいに、などと人々は話し合つてゐた。その頃、彼は非常な美男子で、女にかけては並々でない腕の持主であつた。町中で彼を知らぬ者はなく、てんでに彼のことを醫者が患者廻りをするやうに、毎日自分に參つてゐる婦人達を一順訪問して歩くのだ、などと噂した。今では、髮に霜がまじり、顔には皺が出て、眼鏡さへかけてゐるが、それでも時たまその瘦せた横顔などが、綺麗だな、と思はせることもあつた。

ソフイヤ・リヴオヴナの父親は軍醫で、一時ヤアギチ大佐と同じ聯隊に勤務してゐたことがあつた。ヴオロージヤの父親も矢張り軍醫で、矢張り彼女の父親やヤアギチと同じ聯隊に勤めてゐたことがあつた。ヴオロージヤは色々と面倒な戀愛問題を持ち上げたりしながら、學校の成績は仲々よかつた。そして大學を優等で卒業して、今では外國文學を專門にして行かうと決めてゐた。何でも學位論文を書いてゐるといふ評判だつた。彼は父の軍醫と一緒に兵營の中で起居して、もう三十になるのに自分のお金が一文も無いのであつた。子供の時、ソフイヤ・リヴオヴナと彼とは一つアパアトメントに住んでゐたことがあつて、よく遊びに來たし、一緒に舞踏や佛蘭西語の會話のお稽古をした事もあつた。けれど、彼が成長して立派なとても美しい青年になつた時、彼女は含羞むやうになり、間もなく夢中になつて戀ひ焦れるやうになつた。この戀心は彼女がヤアギチと結婚するその日まで續いた。

彼もやはり、十四になるかならぬ内から、女にかけては仲々の凄腕で、彼ゆゑに良人を裏切つた夫人

たちは、ヴオロージヤはまだほんの子供だもの、と口實を使ふのだつた。此間も、こんな話をした男があつた。——彼がまだ學生で、大學の近所に下宿してゐた頃は、誰かが訪問に行つて彼の扉を叩くと、きつと扉の後ろで彼の靴音が聞え、それから「失敬（パルドン）、僕いま一人ぢやないんだ（ジユ・ヌ・スキ・パ・スール）」と忍び聲で斷りを喰つたものだと言ふのである。ヤアギチは彼と知り合ひになると、すつかり肝膽相照すやうになり、チエルジヤヴインがプーシユキンを遇したやうに、大いに見込があると祝福するのであつた。打ち見るところ、少なからず彼が氣に入つたらしい。二人は何時間もぶつ續けに物も言はず撞球やピケットと言ふ骨牌遊びをするし、ヤアギチがトロイカで何處かへ出掛けるときは必ずヴオロージヤを連れて行つた。ヴオロージヤの方でもヤアギチだけには論文の秘密を打ち明けてゐた。はじめのうち、大佐がまだ若かつた頃には、互に競爭者の位置に立つたことも一再ではなかつたが、そんな時でも嫉妬し合つたことなどは決して無かつた。彼等の交際仲間では、ヤアギチは大ヴオロージヤで、その親友は小ヴオロージヤと綽名してゐた。

その橇には、大ヴオロージヤ、小ヴオロージヤ、それからソフイヤ・リヴオヴナのほかに、もう一人、皆がリイタと呼び慣はしてゐるマルガリイタ・アレクサンドロヴナも乘つてゐた。これはヤアギチ夫人の從姉で、もう三十を越した、顔色の惡い眉毛の濃い、鼻眼鏡の老孃であるが、烈しい寒風のなかでも小休もなく卷煙草を喫ふのが癖で、胸のあたりや膝の上に煙草の灰を絶やしたことがない。鼻聲で、一語一語を引き伸ばして話す。冷血な生れ附きと見えて、リキユルやコニヤックを幾ら飲んでも醉つぱ

らひもせず、だらだらした面白くもない調子で、陳腐な一口噺を並べ立てるのであつた。家に居ると、朝から晩まで何やら厚ぼつたい雜誌に讀み耽つてそれを煙草の灰だらけにするか、さもなければ凍り林檎をむしやむしやつて居た。

「ソーニヤ、騷ぐのはおやめつたら」と彼女が間のびのした聲で言つた、「本當に、馬鹿みたいよ。」

町の門が見えはじめると、トロイカは速力を緩め、家並や人々の姿がちらちらした。ソフイヤ・リヴオヴナはすつかり大人しくなつて、夫に寄りかかつた儘、物思ひに沈んでしまつた。小ヴオローヂヤは向ひ側に坐つてゐた。今までの陽氣な浮々した考へに、段々暗い影がさし始めた。彼女は思つた——この眼の前に坐つてゐる男は、私が思ひを寄せてゐたことを知つてゐるのだ。それだけでなく、自分が大佐と結婚したのは自棄半分（パル・デピ）だといふ世間の取沙汰をそのまま信じてゐるに異ひない。彼女はまだ彼に戀を打ち明けたことはなかつたし、自分の戀を彼に知られたくないので感情は包みかくしてゐたが、彼の顏附で見ると、すつかり自分の心の中を讀んでゐることは明かであつた。そのため、彼女の自尊心は痛んだ。それよりもなほ屈辱に思はれるのは、結婚して以來眼に見えて小ヴオローヂヤが彼女に近づきはじめたことでそんなことは今迄決してないことであつた、默り込んで彼女の傍に何時間も坐り込んでゐたり、でなければ無駄話で御機嫌を取つたりする。今でも橇の中で、まともに話し掛けこそしないが、そつと足を踏んで見たり、手を握りしめたりする。して見れば、彼は彼女の結婚するのを待ち設けてゐたに異ひない。そして今では、彼女を蔑すんで、心中ひそかにだらしのない不貞な女に對する、一種の興味を起してゐるに異ひなかつた。さう思ふと、折角の勝ち誇つた氣持や夫への愛情が忽ち、苦しい屈辱や口惜しさに掻き亂され、腹立ちまぎれに馭者臺に上つて、大聲を出したり口笛を吹いたりしたくなるのであつた。……

丁度この時、彼等は尼僧院の前を通りかかつて、折柄千貫の大鐘が鳴りはじめた。リイタが十字を切つた。

「この尼僧院には私達のオーリヤが居るのよ」とソフイヤ・リヴオヴナは言つて、やはり十字を切つたが、その身は打ち顫へた。

「なぜ尼僧院になんかは入つたんだらう？」と大佐は訊いた。

「自棄半分（パル・デピ）。」と、ムッとしてリイタが答へた。ソフイヤ・リヴオヴナとヤアギチの結婚に當てつけてゐるに異ひない。「自棄半分（パル・デピ）つていふのが、此頃は流行なのね。世間ぢうの人に齒向ふんだわ。あの人はおきやんきやらの手に負へない浮氣やさんで、舞踏會やお取巻き連中に夢中だつたのに、いきなり——ねえ、どうでせう！　吃驚りするぢやないの。」

「そんな事はないですよ」と小ヴオローヂヤが、外套の襟を下げて秀麗な顏を見せながら言つた、「あの人のは自棄半分（パル・デピ）ぢやありません。いはば重なる不幸のためなんです。兄さんのドミートリが懲役になつたまま、今では行き方が知れないのですよ。お母さんは悲嘆の餘り亡くなるし。」

そして外套の襟をまた立てた。

「だからオーリヤはいい事をした譯ですよ。」と彼は籠つたやうな聲で附け足した、「貰ひ子の身分になつて、おまけにソフイヤ・リヴオヴナみたいな寶石と一緒ぢや、やり切れませんものね。」

　ソフイヤ・リヴオヴナはその聲の中に嘲けるやうな調子のあるのを聞き漏さなかつた。何か辛辣なことを言つてやりたかつたが、默つて我慢した。またもや忿怒がむらむらと湧いて來た。彼女は起ち上つて、泪聲で叫んだ。

「私、朝のお勤めに出るわ。馭者さん、引き返して！　オーリヤに會ひたくなつたの。」

　橇は後戻りした。僧院の鐘は沈んだ響を傳へて、それを聞いてゐると何となくオーリヤの事や自分の生活が思ひ出されて來た。ほかの教會でも鐘が鳴つてゐた。馭者がトロイカを停めると、ソフイヤ・リヴオヴナは橇を滑り出て、皆を殘して一人で門の方へ急いだ。

「早くして貰ひたいな」と夫が後から聲をかけた、「もう遲いんだからね。」

　彼女は暗い門をくぐり、そこから本堂へ導く並木路を歩いて行つた。足の下には雪がさくさくと音を立てた。鐘の音はもう頭のすぐ眞上に來てゐて、身體ぢうに沁みわたる樣に思へた。本堂の扉があつて、そこを三段ほど下りると柱廊で、兩側には聖者の畫像が連なり、白檀と抹香の匂ひがたち籠めてゐる。もう一つ扉があり、黑い人影がそれを開いて低く低くお辭儀をした。……勤行はまだ始まつてゐなかつた。一人の尼僧は聖像屛の傍に沿うて燭臺に灯を入れて廻り、もう一人は枝附燭架に灯を入れてゐた。圓柱のあたりや唱歌席の其處此處に、黑い人影がひつそりと佇んでゐる。「あの人達はああして立つた儘、

朝まで動かないのか知ら」とソフイヤ・リヴオヴナは思つた。彼女にはそこが暗く、寒く、わびしく、——墓場よりももつとわびしい場所に思はれた。彼女はそのひつそりと凍りついたやうな人影を物寂しい氣持で眺めてゐるうちに、不意に胸が締めつけられるのを覺えた。尼僧たちのなかで、脊の低い肩の細つた、そして黑の頭布をまとつた一人が、何故とはなしにオーリヤのやうな氣がした。オーリヤが僧院には入つたときには、もつと肥つてゐて脊ももう少し高かつた筈だが。……ソフイヤ・リヴオヴナは心の亂れ騷ぐのを感じながら、おづおづとその平尼僧に近づいて、肩ごしに顏を覗いて見ると矢張りそれがオーリヤであつた。

「オーリヤ！」と彼女は言ふと、兩手をすり合せたまま、胸が一ぱいになつて、もう何も言へなかつた。

「オーリヤ！」

　尼僧はすぐに彼女と氣が附いて、驚いて眉をあげた。その蒼ざめた、淨めてから間もない淸らかな顏も、それから頭布からはみ出てゐる白い襟布までが何となく、歡(よろこ)びに輝いたやうに見えた。

「何といふ不思議なお引き合せでせう！」と彼女も、瘦せた、蒼白い小さな兩手をすり合せながら言つた。

　ソフイヤ・リヴオヴナは彼女を強く抱きしめて接吻した。しながら、お酒の匂ひがしはしないかと心配した。

「私たち今、この前を通り掛つたの。そしてあんたの事を思ひ出してたのよ」と彼女は、まるで小走り

に駈けた後のやうに、息を彈ませながら言つた、「何て惡い顔色なの！ ああ私、……私、あんたに會へてとても嬉しいのよ。で、どう？ どんな具合？ 退屈ぢやなくつて？」

ソフイヤ・リヴオヴナはまはりの尼僧たちを見廻して、小聲になつて言ひ續けた。

「私の方はとてもの變りやうよ。……ねえ、私、ヤアギチと結婚したの。ヴラヂイミル・ニキートイチよ。あの人憶えてるでせう。……私、あの人と幸福に暮してゐるの。」

「まあ、結構ですわ。お父樣も御丈夫？」

「丈夫よ。よくあんたの噂をしてゐるわ。ねえ、オーリヤ、お休みには私達のとこへ被入つしやいな。いいでせう？」

「行きますわ。」とオーリヤは言つて微笑した、「あさつて上りますわ。」

ソフイヤ・リヴオヴナは何故と自分でも分らないが泣き出してしまつた。暫くの間、默つて泣きつづけてゐたが、やがて涙を拭きながら言つた。

「リイダはあんたに會はなかつたことを、さぞ殘念がるでせうよ。あの人も一緒に來てゐるの。ヴオローヂヤもゐるのよ。みんな門の所で待つてるわ。行つて會つてやつたら、みんなどんなに喜ぶでせう！ ね、行つて御覽なさらない？ お勤はまだ始まらないぢやないの。」

「參りませう」とオーリヤは同意した。

彼女は三べん十字を切つてから、ソフイヤ・リヴオヴナと連立つて出口へ歩いた。

「あなた幸福に暮してらつしやるつて仰言つたわね、ソーネチカ」と、門を出たとき彼女が訊いた。

「とてもよ。」

「さう、いい事ねえ。」

大ヴオローヂヤと小ヴオローヂヤは、尼僧の姿を見ると橇を下りて、丁寧に挨拶をした。二人とも、彼女の蒼白い顔や黒い僧服を見てひどく感動してゐた。自分達のことを忘れずに居て、わざわざ挨拶に出て來て呉れたのが、二人には嬉しかつた。寒くないやうにと、ソフイヤ・リヴオヴナは膝掛を彼女にすつぽりと被せ、自分の外套の半分で包んでやつた。今しがたの涙で、彼女の心は安らいで明るくなつた。そして、この騷々しい落着きのない、本當に汚れきつた夜が、思ひがけなく斯うして清淨に穩かに終つたのが嬉しかつた。彼女は、少しも長くオーリヤを傍に置きたくなつて、提言した。

「ねえ、この人を乘せて走つて見ないこと？ オーリヤ、お乘りなさいな。ほんの少しだけよ。」

聖徒はトロイカなどに乘つて駈けずり廻らぬものだから、男たちは多分尼僧が斷るだらうと思つた。

ところが意外にも彼女は承知して、橇に乘つた。そしてトロイカが町の門へ向つて疾驅して行くあひだ皆は默り込んで、ただ彼女が温かく居心地のいいやうに氣を使ひながら、銘々の心の中で、以前の彼女と現在の彼女の變りやうを、ぢつと思ひ較べるのであつた。彼女の顔は今では情熱も表情もなく、透きとほるばかりに冷たく蒼ざめ、その血脈を流れるのはもはや血液ではなくて、清水なのではあるまいかと疑はれた。つい二三年前までは、あんなに圓々と肥つて紅ゐにかがやき、求婚者の噂をしたり、詰ま

ぬことにも笑ひ轉けたりしたのに。……

町の門近くまで來ると、トロイカは引き返した。十分ほどして僧院の前に停ると、オーリヤは橇を出た。鐘の音はもう間遠に鳴つてゐた。

「皆さま御機嫌よう」と、オーリヤは尼僧の作法で低くお辭儀をした。

「ぢや、きつと被入つしやいね、オーリヤ。」

「參りますわ、參りますわ。」

彼女は足早に、間もなく暗い門内に姿を消した。それから、トロイカが再び動き出したとき、皆はとても陰氣に默り込んでしまつた。ソフイヤ・リヴオヴナは身體ぢうの力が拔けたやうな氣がして、すつかり滅入つてしまつた。尼僧を無理に橇に乘せて、正氣でない人達と一緒に引つぱり廻したことが、今では馬鹿げた無暴な、そして神聖を瀆す所業のやうにさへ思はれた。醉ひが覺めるにつれて、自分自身を欺かうとする氣持も消え失せた。今ではもう、自分が夫を愛しても居ず、また愛する氣になれもしないことや、何もかもみんな愚劣な馬鹿げた事なのだといふことが、はつきり解つた。彼女が結婚したのは打算からなので、學校友達の言ひ振りで言へば彼は斷然お金持だつたし、リイタのやうに老孃になるのも怖ろしかつたし、また醫師の父にも厭々してゐたし、また一つには小ヴオローヂヤをがつかりさせてやりたいと言ふ氣もあつたのであつた。結婚といふことが、こんなにも辛い忌はしい重荷なことに、結婚する前に氣がついてゐたなら、彼女は世界中の富を臭れると言はれても、決して嫁になどは行かな

かつたであらう。だが、今となつては及ばぬ事なのだ。思ひ諦るほかに途はなかつた。

彼等は家に歸り着いた。溫い柔かな寢床に橫になつて、夜衣にくるまりながら、ソフイヤ・リヴオヴナは暗い柱廊や、抹香の匂ひや、圓柱の傍の人影を思ひ出した。自分が眠つてゐる間も、あの人達はぢつと身動きもせずに立ち續けてゐるのだらう、と思ふと堪らない遣る瀨なさがこみ上げて來た。長い長い朝勤めが濟むと、讃禱がそれに續き、それから彌撒、謝恩の禮拜。……

「けど、神樣といふものはあるんだわ。きつとあるに異ひないわ。私だつて何時かは死なければならないんだから、晩かれ早かれあのオーリヤのやうに、魂や永遠の生のことを考へなければならないのね。オーリヤは今では救はれたのだわ。あの人は自分の問題をすつかり解いたんだから。……でも、もし神樣がないとしたら? さうしたら、あの人の生涯は破滅なのね。けれど、どんな風に破滅なんだらう? なぜ破滅なんだらう?」

少したつと、またこんな考へが浮んで來た。

「神樣はあるわ。人間はどうしても死ななければならない。だから魂のことを考へなければいけないわ。オーリヤは今この瞬間に死がやつて來たつて、ちつとも怖がりはしないでせう。覺悟が出來てゐるんだもの。何よりも大事なのは、あの人がもう自分の人生の問題を解いてゐることだわ。神樣はある。……さう、あるのだわ。……けど、僧院へは入るほかに、何か別の途はないものか知ら。だつて、僧院へは入るといふのは――生活と左樣ならをすることだもの。生活を滅ぼすことだもの。……」

ソフイヤ・リヴオヴナは少し怖くなつて、枕に頭を押しかくした。

「こんな事はもう思ふまい」と彼女は呟いた、「もう思ふまい。……」

隣室には、ヤアギチが何か考へ事をしてゐると見えて、輕く拍車を鳴らせながら、絨氈の上を行つたり來たりしてゐた。ふとソフイヤ・リヴオヴナは、この男が自分にとつて親しい大切なものに思はれるのは、やつぱりヴラヂーミルといふ名前を持つてゐるといふ事だけ、ただそれだけの所爲ではないかと氣附いた。彼女は寢床の上に起き上つて、優しく呼びかけた。

「ヴオロージヤ！」

「何だね？」と夫の聲がした。

「何でもないの。」

彼女はまた横になつた。鐘の音が聞えて來る。それはあの僧院で鳴らすのであらう。するとまた、柱廊や黒い人影が思ひ出され、神や避けがたい死のうへに、思ひは當て途なくさまよふのであつた。彼女は鐘の音を聞くまいとして頭から夜衣を被つた。老年や死が近づいて來るまでには、まだ長い長い生活が續くのだと彼女は考へた。いま寢室には入つて來て寢床に上らうとしてゐる男、この愛してもゐない男の身近に、來る日も來る日も暮さなければならない。そしてもう一人の、若いうつとりする様な、彼女にとつて掛け替へのない男への戀心を、ぢつと殺してゐなければならない、……彼女は夫に背を向けて、お眠みなさいを言はうとしたが、いきなり泣き出してしまつた。自分が口惜しくてならなかつた。

「そおら、音樂がはじまつた。」と、ヤアギチが言つた。音の字を妙に延ばしながら。

彼女が鎭まつたのはずつと後のことで、朝の十時近くになつてからであつた。やつと泣き止んで、身悶えも止まると、今度はひどく頭痛がし出した。ヤアギチは遲れた彌撒に急いで出掛けなければならないので、着替への手傳ひをする從卒にぶつぶつ小言を言つてゐるのが隣室から聞えた。彼は何か取りに、輕く拍車を鳴らせながら寢室へは入つて來た。それからもう一度、今度は肩章や勳章を飾り立てては入つて來た。僂麻質斯のせいで少し跛を引きながら。その歩き附きや眼附を見てゐると、何だか猛禽のやうに思へてならなかつた。

やがてヤアギッチが電話を掛けてゐるのが聞えた。

「ヷシーリエフスキーの兵營につないで呉れ給へ」と彼が言つた。それから一寸間を置いて、「ヷシーリエフスキー兵營？ ドクトル・サリーモヴイチにお電話口までお願ひしますつて。……」また暫くして、「もしもし、誰方？ ヴオローヂヤ君か。やあ。濟まないが君のお父さんに、直ぐにお出で願ひたいと申上げて呉れないか。實は令夫人が昨夜のお蔭で滅茶滅茶なんだ。え、お留守だつて？ ふむ。……いや、有難う。結構だね。……そりや御親切に。……多謝。」

ヤアギチは三度目にまた寢室には入つて來て、妻の上に跼み込みながら、十字を切り、手を差し出して接吻させた。（これまで彼に戀をした女達が彼の手に接吻する慣はしだつたので、それが習慣になつたのである。）そして、夕食までには歸るよ、と言ひ殘して出て行つた。